

ライフスタイルプロジェクト研究資料 第5号

わが国における農村型ワーキングホリデーの 実態と課題

平成17年11月

農林水産政策研究所

はじめに

農林水産政策研究所は、平成15～17年度でプロジェクト研究「ライフスタイルの変化に対応した農山漁村地域の再生方策に関する研究」を実施している。本プロジェクト研究の目的は、都市と農村との交流を通じて農山漁村地域の再生を図るために、新たなライフスタイルの実現や都市住民の農山村地域への参入を一層促進していくための条件整備方策を解明することにある。

近年、わが国の都市部においては、「緑のある生活」がもてはやされ、ゆとりある“アグリライフ”を志向する人々が増えつつある。一方、農村においても、より広く新規の参入者や訪問客を受け入れ、地域の活性化やビジネス創出に結びつけようという気運が高まっており、個別の農家ベースのみならず、集落や地域全体で取り組まれている事例もみられる。

このように、農業・農村への関心は高まりつつあり、様々なルートを通じて都市から農山村地域への“人の流れ”が生じている。現在、農村において多様に展開しているグリーン・ツーリズムは、単なる農村地域への一時的な観光・訪問といった形態から、体験や民泊を取り入れたものへと、都市農村交流人口の拡大とともにその幅は広がってきた。今日では、都市住民への一方的なサービスの提供から脱したより深い交流が、グリーン・ツーリズムには求められている。

一方、本報告書で扱っているワーキングホリデーは、参加者側からみれば、数日間地域にとどまることで農家における「ホンモノ」の農作業と生活を体験することができ、農家側からみれば、不足しがちな農業労働力を補完することができる。ツーリズムと援農の両者の仕組みを併せ持つワーキングホリデーは、新たな都市農村交流の形として大きな注目を集め、参加者にとってより満足度が高く、受入側の農村にとってより貢献度が高い仕組みとして普及しつつある。本報告書は、近年注目されつつあるこのワーキングホリデーについて、現状の位置づけと課題、今後の展望を明らかにしようとするものである。

本報告書の執筆に当たっては、実態調査やアンケート調査に関して、市町村の担当者の方々をはじめ、ワーキングホリデーの受入農家の方々に多大なご協力を頂いた。これらの方々のご協力なしには、とりまとめは難しかったであろう。中でも、宮崎県西米良村の田爪竜治氏、長野県飯田市役所の井上弘司室長、清水美沙子氏、岩手県遠野市の徳吉英一郎氏をはじめ関係者の皆様には、大変お世話になった。また、研究の推進には、竹本田持助教授（明治大学農学部）より、グリーン・ツーリズムに関する特別研究会における報告、ワーキングホリデーの実態調査への参加、および本報告書への分担執筆といった多方面でご助力を頂くことができた。以上の方々には深く感謝申し上げる次第である。

本報告書が、ワーキングホリデーをはじめとした農村における都市農村交流の一層の発展のため、少しでもお役に立てれば幸いである。

平成17年11月
農林水産政策研究所

わが国における農村型ワーキングホリデーの実態と課題

目 次

	ページ
第1章 ライフスタイルの変化と農村型ワーキングホリデーの展開 … (鈴木源太郎)	1
(1) 農村型WHとは何か	1
1) 農村型WHの由来, 定義について	1
2) 農村型WHが生まれた背景とニーズ	1
3) 農村型WHの予期せぬ成功と農村定住への道筋	2
(2) 本報告書の課題と構成	2
第2章 WH参加者アンケート調査報告 … (鈴木源太郎)	5
(1) 調査目的	5
(2) 調査方法	5
(3) 分析結果	6
1) アンケート調査の概要	6
2) WHへの参加理由	10
3) WHへの満足度と評価	13
4) WHへの再参加意志	18
5) 参加者の定住意志	20
(4) まとめ	23
第3章 WHの事例分析 … (渡部岳陽)	27
(1) 宮崎県西米良村における取組	27
1) 地域概況	27
2) WH構想が浮上した背景と仕組み	28
3) WHの実績	33
4) 受入側のWHへの評価	33
5) WHが地域に与えた影響	37
6) 今後の課題と展望	39
(2) 長野県飯田市における取組	40
1) 地域概況	40
2) WHに取り組んだ背景と仕組み	41
3) WHの実績	45
4) 受入側のWHへの評価	47
5) WHから定住へ結びついた事例	51

6) WHが地域に与えた影響	53
7) 今後の課題と展望	54
(3) 岩手県遠野市における取組	56
1) 地域概況	56
2) WHに取り組んだ背景と仕組み	56
3) WHの実績	57
4) WHが地域に与えた影響	58
5) 今後の課題と展望	58
(4) 農村型WHの普及拡大へ向けた課題	60
第4章 大学における学外実習教育の現状と課題	(竹本田持) 63
(1) わが国における農村型WHと大学における実習教育の位置づけ	63
(2) 大学における実習教育	63
(3) カリキュラム上の実習・研修科目	64
1) 農場実習	64
2) 農村調査実習	65
3) ファームステイ研修(海外)	66
(4) ファームステイ研修(国内)について	67
1) これまでの経緯	67
2) 具体的内容－学生の選考, 受入農家の選定, 実施日程など－	68
3) 受入農家による評価	69
4) 参加学生の感想	71
(5) 農家主導による学生受入事例－「農業体験ふれあい交流会」－	73
(6) 大学生によるインターンシップの現状	75
(7) 問題点の整理	77
第5章 わが国の農村におけるWHの課題と展望	(鈴木源太郎) 81
(1) わが国における体験型GTとWHの位置づけ	82
(2) WHが個別農業経営に与える影響と課題	83
(3) WHを通じた地域農業, 集落の活性化への貢献	84
巻末附表1 飯田市WHアンケートにおける自由回答	87
巻末附表2 飯田市WHアンケート調査票	101

第1章 ライフスタイルの変化と農村型ワーキングホリデーの展開

農林水産政策研究所 鈴木源太郎

(1) 農村型WHとは何か

1) 農村型WHの由来、定義について

本報告書では、わが国において取り組まれている農村型ワーキングホリデー（以下、WH）について扱うが、その前にそもそもWHとは何であるのかについて簡単に説明したい。

社団法人日本ワーキング・ホリデー協会のウェブサイトによれば、「ワーキング・ホリデー制度は、二国間の協定に基づいて、最長1年間異なった文化の中で休暇を楽しみながら、その間の滞在資金を補うために付随的に就労することを認める特別な制度です。本制度は、両国の青少年を長期にわたって相互に受け入れることによって広い国際的視野をもった青少年を育成し、ひいては両国間の相互理解、友好関係を促進することを目的としています。」（<http://www.jawhm.or.jp/jp/prgrm/index.html>より引用）とある。海外で働くためにはその国から就労ビザの発行を受ける必要があるが、WHはそうした手間を省き、比較的長期にわたる海外生活を気軽に楽しめる機会を若者に与える制度である。

それに対して、本稿で分析対象となるわが国における農村型WHは、「参加者が農村において働きながら休暇を楽しむ、援農的な取組」と表現できる。農繁期に不足する労働力の補完を主要目的の1つとして農村地域は都市から人々を迎え入れており、一定距離の移動（＝旅行）と旅先での就労がセットとなっている点で、上記WHと共通している。国際間協定を意味した「WH」という単語を、「国内版WH」として位置づけ直し、わが国で初めて農村型WHに取り組んだのが、後に取りあげる宮崎県西米良村である。

2) 農村型WHが生まれた背景とニーズ

都市から農業・農村へのアプローチの手段としてまず思いつくのが、農村を目的地とした旅行や手軽な形態のグリーン・ツーリズム^①（以下、GT）である。そして、その究極の姿が、住居の異動を伴うU・Iターンの現象や農村定住の動き^②である。両者は連続的な関係にあるとはいえないものの、国内の農業・農村に注目が集まる現在の状況を利用し、農業や農村に関心を持つ者を迎え入れたいと考える農村地域は少なくない。こうした状況の下、手軽な旅行としてのGTではなく、一歩踏み込んだ農業・農村体験、より本格的な農作業体験を味わえる農村型WHが注目されている。

では、WHが成立するために必要な、都市の参加者側および農村の受入側双方のニーズは何であろうか。参加者側には、オプションとしての「体験」を含む旅行としてのGTに飽き足らず、「農」とのより深い関係を望むニーズがある。その中には「農作業をしたい」、「土に触れたい」といった農作業そのものに対するものと「田舎の人に接したい」、

「農家の生活に触れたい」といった農家・農村との交流に対するものがある。一方、農村側には、不足しがちな農業労働力を確保したいというニーズや、一過性のGTでは得られない都市住民との交流を求めるニーズが存在している。

3) 農村型WHの予期せぬ成功と農村定住への道筋

後述するように、事例として取りあげた宮崎県西米良村と長野県飯田市では、いずれも事業計画段階で参加者の属性を大きく見誤った。というのも、いずれの地域もWHの参加者の大半が、定職をリタイアした高齢者層であると想定していたのである。農業・農村への関心は高まっているものの、多くの都市の若年・青年層が「地味な農作業」を提供する農村へ訪れることなど考えてもみなかった。しかし現実には、いずれの地域でもWHの参加者は20～30歳代の若い女性が中心で、彼女らのほとんどが真剣に「地味な農作業」に汗を流している。まさに、都市側のライフスタイルの変化は、若年層ほど大きく現れているのである。WHが、期せずして潜在的な社会需要を掘り起こしたとみるべきであり、「予期せぬ成功^①」をとらえることができる。また、WHを実施する各地域ではすでに参加者の中から地域への定住者が現れている。定住対策として様々な助成措置を講ずる地域が多い中、WHのみを契機に定住者が現れてきたことは注目に値する。

このように、わが国の農村型WHは、その背景にかなりの部分でGTと共通の基盤を持ち、農業・農村とより密接に関わる手段として位置づけることができる。加えて、直接の目的ではないものの、その取組の延長線上には農村地域への定住や農業への新規参入といった次のステップも存在する。ライフスタイルの変化に基づく都市と農村を結びつける多様な取組の中に、農村型WHを積極的に位置づけるべきであろう。

なお、本報告書では、宮崎県西米良村、長野県飯田市、岩手県遠野市の先進事例を取りあげ分析するが、全国的にみるとWHに取り組む市町村は未だ点的な存在である。これら3事例から学び、地域おこしの実践に結びつけようとしている市町村があるように聞いているが、具体的な実績は確認できていない。ただし、3事例のWHは参加者から高い評価を受けており、都市におけるWHへの潜在的ニーズも大きいことから、他市町村へWHが広がる可能性は十分あると考えられる。新しい都市農村交流のスタイルを提起するWHは、定住者確保にも結びついており、コストをかけない有効な地域おこしの実践として注目される。

(2) 本報告書の課題と構成

本報告書の課題は、GTの新たな展開型といえるWHが、どのようなニーズの下に生まれ、何を期待されているのか、そして多様な都市農村交流の取組がある中で、WHは参加者、受入地域双方にどのように評価されているのかを探ることにある。また、WHへの参加の後、参加者は何を考え、次にどういった行動を起こそうとしているのか、「農村への定住」や「農業への新規参入」など次の次元の事象をも視野に入れながら検討を加えていきたい。

本報告書の構成は以下の通りである。

第2章では、長野県飯田市のWHへの参加者を対象に実施したアンケート調査の結果を用いて、参加者の属性や参加状況など、多様な角度からWH参加者の内実について分析する。

第3章では、WHに取り組む西米良村、飯田市、遠野市という3事例の実態分析を行う。各地の取組内容や実績の分析を通じて、現状の農村型WHの課題と今後の展開方向を検討する。

第4章では、WHに関連して、大学における農村調査の実態を報告する。

第5章では、以上の分析内容をまとめるとともに、わが国における農村型WHの位置づけについて整理し、WHの受入主体および地域社会に与える影響について言及したい。

注(1) 農林水産省の定義によれば、グリーン・ツーリズムは「農山漁村地域において自然・文化、農林漁業とのふれ合いや人々との交流を楽しむ滞在型の余暇活動」とされている。農林水産省HP、農林水産関係用語集。

(2) 近年のIターン者の動向については、農林水産政策研究所(2005)、「公的機関の定住対策とIターン者の実態―島根県のケーススタディー」、『ライフスタイルプロジェクト研究資料第2号』、農林水産政策研究所、参照。

(3) 「予期せぬ成功」が新規事業を起こすイノベーションの核となると唱えるのは、P.F.ドラッカーである。彼は企業経営におけるイノベーションの機会を提供するキーワードとして、①予期せぬことの生起、②ギャップの存在、③ニーズの存在、④産業構造の変化、⑤人口構造の変化、⑥認識の変化、⑦新しい知識の出現を挙げている。詳細はP.F.ドラッカー(1997)、『イノベーションと起業家精神』、上田惇生訳、ダイヤモンド社、参照。

第2章 WH参加者アンケート調査報告

農林水産政策研究所 鈴木源太郎

(1)調査目的

本章では、「飯田市のワーキングホリデー（WH）に関するアンケート調査」について分析を行う。当調査は、長野県飯田市の行うWHの参加者を対象にアンケート調査を実施し、参加者の属性、WHの満足度、WHに求めるもの、農村定住とWHとの関連などについて把握し、WHの課題や今後のあり方を明らかにすることを目的としている。

飯田市のWHにおいては、参加者全員を対象としたアンケート調査を同市WH事務局がWH終了直後にその都度実施している。その調査結果は非常に興味深いものの、記述式アンケートが中心で、統計的な分析は十分行われてこなかった。また、調査がWH参加直後に実施されているため、多くの参加者が「熱の冷めないうちに」熱心な記述を行っているのも大きな特徴である。

この点、今回新たに実施したアンケート調査は、記述的な調査項目を減らし、客観的かつ定量的な分析が行えるよう工夫した。また、調査時期も、日常生活に復帰した参加者による冷静な回答が寄せられるよう設定した。

なお、調査結果については、自由回答部分を含め、飯田市WH事務局に全面的にフィードバックすることとし、同市の今後のWHの企画・立案に資するよう十分配慮を行った。アンケート調査票については本報告書の巻末に添付した。

(2)調査方法

当アンケート調査は、2005年4月上旬に郵送回収方式により実施した。対象は、1998年から2005年の間に飯田市のWHに参加経験のある者約800人である。そのうち転居等の理由によって所在不明であることが分かっていた者を除く527人を対象に調査票を送付した。発送後、宛先不明等の理由で不達であったものが14通あったので、実質的な調査対象母数は513人である。なお、個人情報保護の関係から、WHの参加者名簿は市役所内に留めることとし、アンケートの発送および回収は飯田市役所農業課WH事務局に実施していただいた。

4月28日付の官製はがきによる督促（1回）を経て、回収数は264件、回収率は51.5%となった。なお、回収された回答の中に無効回答は存在しなかったため、有効回答数、有効回答率とも同上である。回答結果の入力および調査データの分析については、全て農林水産政策研究所が行った。

以下では、アンケート内容を、①概要、②参加理由、③WHへの満足度と評価、④WHへの再参加意志、⑤参加者の定住意志、の5つの項目に分けて分析する。

(3)分析結果

1)アンケート調査の概要

(i) 参加者の属性

回答者の年齢、男女別の分布を示す(第2-1表)。年齢別には、「30歳代」(30%)が最も高く、「50歳代」(23%)、「60歳代以上」(21%)が続いている。また、男女別には男性の割合が56%と若干高い。年齢別にみる男女比は、「60歳代以上」では男性の割合が高いのに対して、「20歳代」では、逆に女性の割合が高い。若年層ほど女性の比率が高く、高齢者ほど男性の比率が高い傾向にある。

参加者の年齢と同居家族との組み合わせから抽出した7通りの家族パターン⁽¹⁾の分布を第2-1図に示す。若年の独身男女の割合が合計で32%と高い値を示している。中でも若年独身女性は全体の18%を占めている。既婚者では、親世代が50歳代の「夫婦(子供大)」が13%、60歳以上の高齢世帯では「高齢夫婦のみ」の世帯が10%存在している。

家族パターン別に飯田市のWHへの参加回数をみると(第2-2図)、参加回数「1回」の割合が高いのは「若年独身(男性)」と「若年独身(女性)」であり、両者の過半数が1回限りの参加である。これに対して、「高齢夫婦のみ」の71%が「3回以上」参加の経験がある。また、子育てに忙しいと思われる「夫婦(小児子育て中)」の45%が「3回以上」参加している。

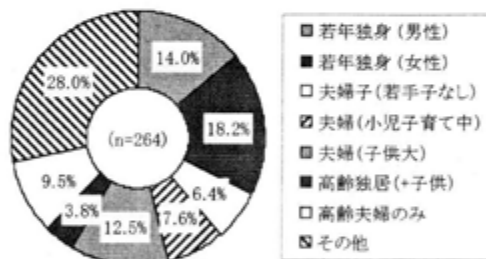
第2-1表 アンケート回答者の年齢・男女別分布

(単位:件, %)			
区 分	男性	女性	計
20歳代	9 (3.4)	26 (9.9)	35 (13.4)
30歳代	43 (16.4)	35 (13.4)	78 (29.8)
40歳代	24 (9.2)	10 (3.8)	34 (13.0)
50歳代	30 (11.5)	29 (11.1)	59 (22.5)
60歳以上	41 (15.6)	15 (5.7)	56 (21.4)
計	147 (56.1)	115 (43.9)	262 (100)

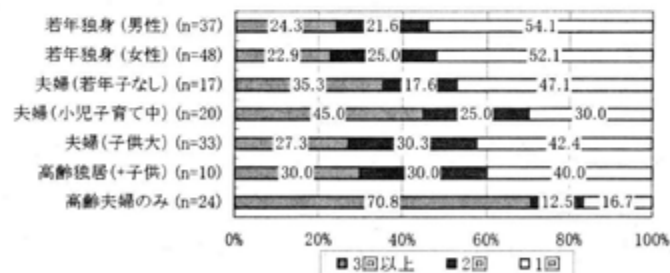
資料:飯田市農業課・農林水産政策研究所、飯田市のワーキングホリデー(WH)に関するアンケート調査(以下同様)。

注:1)表中()内の割合は分母から年齢・性別無回答を除く。

2)アンケート回答者合計は年齢・性別無回答者2名を含め264名である。



第2-1図 家族パターンの構成(単一回答)



第2-2図 家族パターン別にみる参加回数

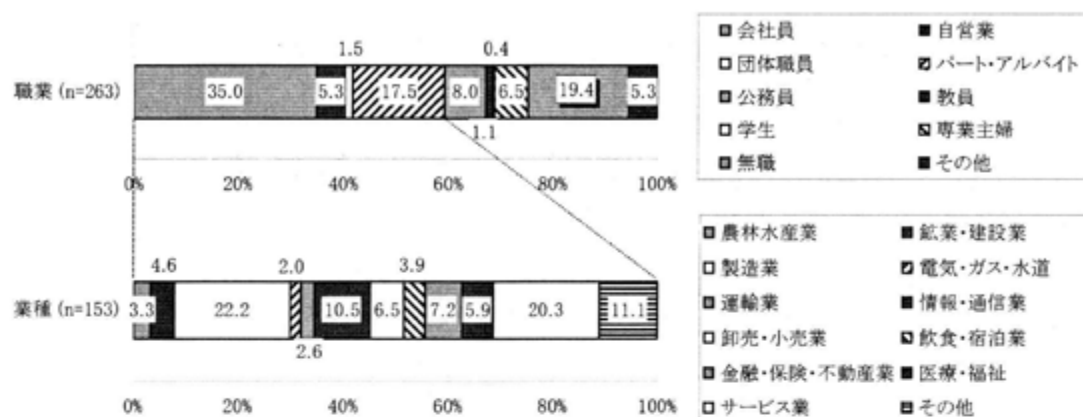
注:1)家族パターン、参加回数はいずれも単一回答。

2)無回答および家族パターンの「その他」の75件を除く。

第2-2表 アンケート回答者の居住地域
(単位:件, %)

区 分	件数(割合)
北海道	1 (0.4)
東北	2 (0.8)
関東	157 (59.9)
北陸	2 (0.8)
地域ブロック	
甲信	6 (2.3)
東海	41 (15.6)
近畿	46 (17.6)
中国	3 (1.1)
四国	1 (0.4)
九州・沖縄	3 (1.1)
無回答	2
地域類型	
都市部	124 (47.9)
都市郊外	120 (46.3)
平地農村	11 (4.2)
中山間農村	4 (1.5)
無回答	5

注:表中()内の割合は分母から無回答を除く。



第2-3図 回答者の職業及び業種の構成

注. 1) 参加者の職業、業種はそれぞれ単一回答。
2) 職業については無回答の1件を除く。業種については無回答および非該当の111件を除く。

第2-3表 農家との関係、農村のイメージ

		(単位:件, %)	
区 分		件数(割合)	
Q6(1)農家 との関係 (単一回答)	実家が農家	26	(9.9)
	親戚が農家	39	(14.8)
	非農家	198	(75.3)
	無回答	1	
Q6(2)農村 のイメージ (単一回答)	良いイメージ	93	(36.2)
	やや良いイメージ	104	(40.5)
	どちらとも言えない	44	(17.1)
	やや悪いイメージ	14	(5.4)
	悪いイメージ	2	(0.8)
無回答		7	
計		264	(100.0)

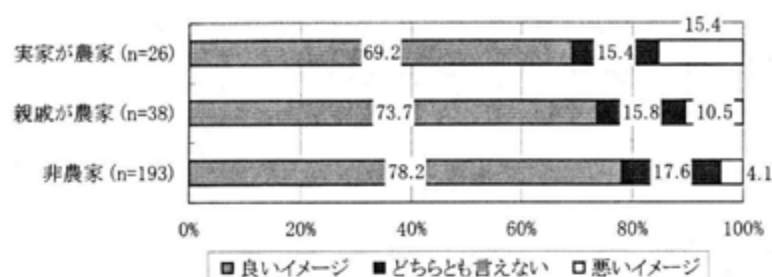
注. 表中()内の割合は分母から無回答を除く。

回答者の居住地域を第2-2表に示す。地域ブロックでは、「関東」が最も多く、全体の6割を占める。次いで「近畿」(18%)、「東海」(16%)の割合が高く、飯田市へのアクセスの良い3大都市圏からの参加者が圧倒的に多い。また、参加者の居住地の地域類型をみると、「都市部」(48%)および「都市郊外」(46%)が大半を占め、農村部からの参加者は6%にとどまる。

第2-3図は、参加者の職業・業種の構成を示している。まず、職業で最も割合が高いのは「会社員」(35%)であり、このほか「無職」(19%)、「パート・アルバイト」(18%)など、定年後と考えられるケースや流動的な職業の割合が高くなっている。「会社員」、「自営業」、「団体職員」、「パート・アルバイト」については、業種に関する設問を設けた。それによると、業種で最も割合が高いのは、「製造業」(22%)、「サービス業」(20%)、「情報・通信業」(11%)などとなっている。

(ii) 農業への関わりと関心

参加者の農家との関係、農村へのイメージを第2-3表に示す。農家との関係をみると、全体の75%が「非農家」であり、「実家が農家」(自家が農家を含む)と「親戚が農家」



第2-4図 農家との関係別にみる農村のイメージ(3カテゴリ)

- 注. 1) 農家との関係、農村のイメージはいずれも単一回答。
 2) 農村のイメージ(3カテゴリ)では、「良いイメージ」と「やや良いイメージ」を「良いイメージ」に、「悪いイメージ」と「やや悪いイメージ」を「悪いイメージ」にそれぞれカテゴリ統合した。
 3) 無回答の7件を除く。

第2-4表 参加年度と参加回数

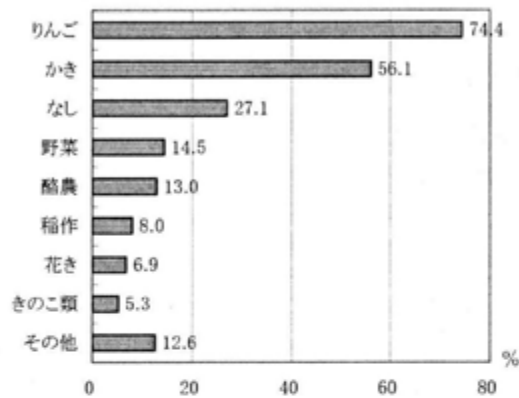
		(単位:件, %)	
区 分		件数(割合)	
Q8参加年度 (複数回答)	10年度	11	(4.3)
	11年度	16	(6.3)
	12年度	39	(15.2)
	13年度	34	(13.3)
	14年度	60	(23.4)
	15年度	113	(44.1)
	16年度	119	(46.5)
	17年度	6	(2.3)
	無回答	8	
Q9(1)参加回数 (単一回答)	1回	117	(44.8)
	2回	59	(22.6)
	3回以上	85	(32.6)
	無回答	3	
計		264	(100)

注. 表中()内の割合は分母から無回答を除く。

はそれぞれ、10%、15%である。農村のイメージは「良いイメージ」(36%)、「やや良いイメージ」(41%)の両方で8割近くにおよび、農村への親近感の高い人々がWHに参加していることが分かる。第2-4図は、農家との関係別に農村のイメージを示したものである。「良いイメージ」を持つ参加者の割合は「実家が農家」(69%)より「非農家」(78%)の方が高く、両者のポイント差は9ポイントである。

(iii) 参加年次・参加回数

WHの参加年度と参加回数を第2-4表に示す。参加年度について回答割合の高かったのは16年度(47%)、15年度(44%)である。参加割合は年をさかのぼる毎に低くなっている。これらのことから、最近参加し、WHの記憶の新しい者がアンケートに積極的に回答したものと考えられる。したがって、この参加年度別の分布は、実際の参加実績と大きく異なる。一方、参加回数は「1回」が45%と最も高いが、「3回以上」との回答も33%寄せられている。自由記入欄の結果より5~10回程度訪問している参加者も多くみられることから、リピーター率の高さが確認できる。



第2-5図 受入農家の作目(複数回答)
(n=262)

注. 無回答の2件を除く。



第2-6図 作業内容(複数回答)
(n=262)

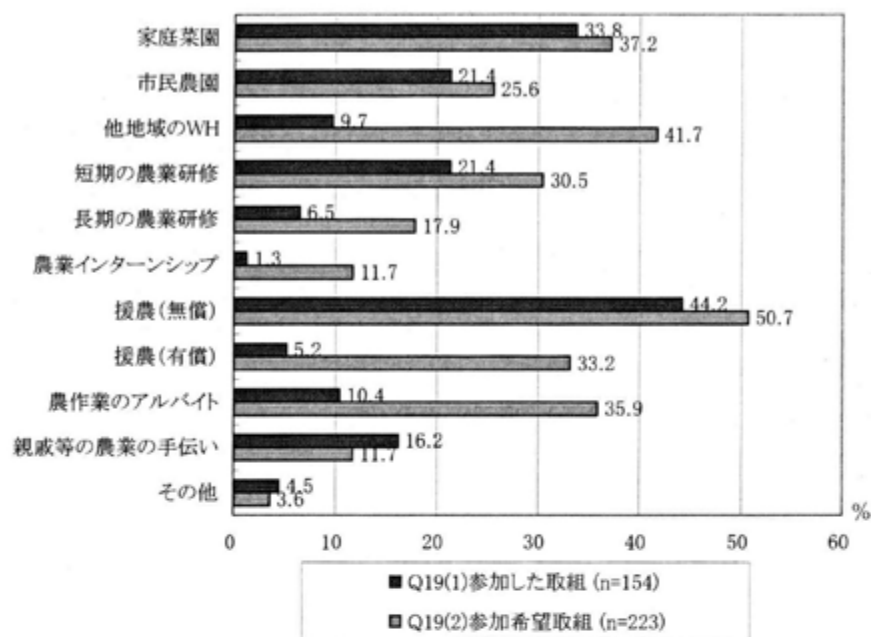
注. 無回答の2件を除く。

(iv) 作目と作業内容

WH参加者を受け入れた農家の作目と作業内容を第2-5図、第2-6図に示しておこう。作目としては「りんご」(74%)、「柿」(56%)、「なし」(27%)といった果樹が多くなっている。これに対応して、作業内容も果樹を中心とした「摘花・摘果」、「収穫作業」(いずれも57%)、「出荷作業」、「収穫物の調整作業」(いずれも28%)等の作業が中心となっている。

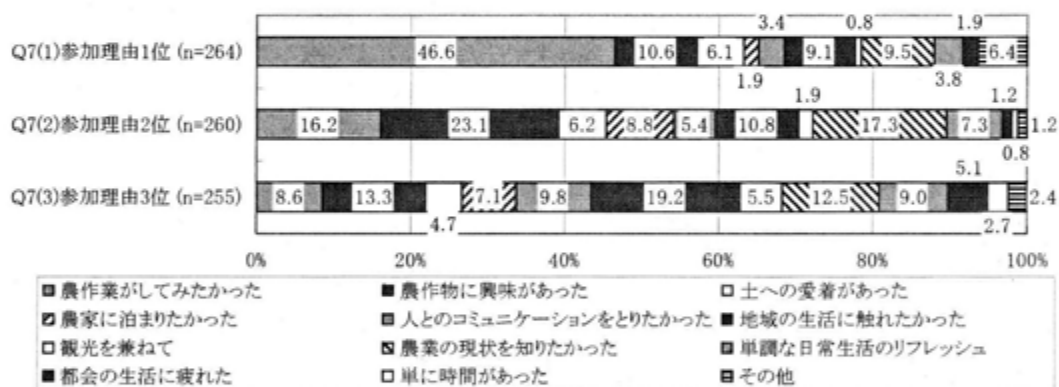
(v) 他地域の農業関連の取組への参加状況

他地域の農業関連の各種取組への参加状況を示したのが第2-7図である。同図では「これまでに参加した取組」と「今後の参加希望取組」を比較している。「これまで」の参加割合が高い取組は、「無償の援農」(44%)、次いで「家庭菜園」(34%)、「市民農園」(21%)、「短期の農業研修」(21%)である。「これまで」と「今後の参加希望」を比較すると、「親戚等の農業の手伝い」と「その他」以外はいずれも「今後の参加希望」の割合が高い。ポイント差が大きいのは「他地域のWH」(32ポイント)、「有償の援農」(28ポイント)、「農作業のアルバイト」(26ポイント)などである。今後、無償・有償の農作業に関わりたという意向を持つ参加者が多いと考えられる。



第2-7図 他地域の農業関連の取組への参加状況

注. 参加希望取組は41件, 参加した取組は110件の無回答を除く。



第2-8図 WHへの参加理由

注. 1) 参加理由1位, 2位, 3位はそれぞれ単一回答。

2) 参加理由2位については無回答の4件を除く。同3位については無回答の9件を除く。

2) WHへの参加理由

第2-8図は、WHへの参加理由を示している。参加理由の第1位では、「農作業がしてみたかった」が全体の半数近くを占め、そのほか「農作物に興味があった」(11%)、「農業の現状を知りたかった」(10%)などの回答割合が若干高くなっている。これに対して、第2位では「農作物に興味があった」(23%)、「農業の現状を知りたかった」(17%)の割合が、第3位では「地域の生活に触れたかった」(19%)の割合がそれぞれ高くなっている。

WHへの参加理由(1~3位積み上げ)を男女別にみたのが第2-5表である。まず、男女計では、「農作業がしてみたかった」(71%)とする参加理由の割合が最も高く、以下「農作物に興味があった」(46%)、「農業の現状を知りたかった」(39%)、「地域の生活に触

れたかった」(39%)の割合が高い。男女別にみると、男性の割合が女性のそれを大きく上回っている項目として「農業の現状を知りたかった」(20ポイント)、女性の割合が男性のそれを上回っている項目として「人とのコミュニケーションをとりたかった」(9ポイント)、「地域の生活に触れたかった」(9ポイント)、「農作業がしてみたかった」(8ポイント)、「農家に泊まりたかった」(5ポイント)が、それぞれ挙げられる。男性は農業・農村への関心が高いのに対し、女性はWHを通じた人との交流への関心が比較的高い。

家族パターン別のWHへの参加理由を第2-9図に示す。全体的に「農業・農作業に対する関心」の割合が高いが、中でも「若年独身(男性)」(91%)、「夫婦(若年子なし)」(88

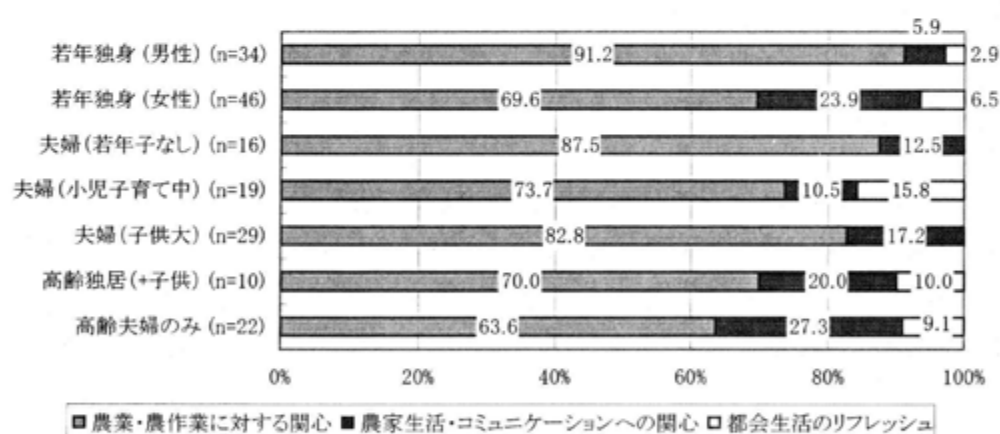
第2-5表 参加理由(1~3位積み上げ)別にみる男女比

(単位:件, %)

区 分	Q3性別		
	男性	女性	合計
Q7参加理由 (1~3位)	農作業がしてみたかった	87(75.7)	186(71.0)
	農作物に興味があった	52(45.2)	120(45.8)
	土への愛着があった	19(16.5)	44(16.8)
	農家に泊まりたかった	23(20.0)	45(17.2)
	人とのコミュニケーションをとりたかった	27(23.5)	48(18.3)
	地域の生活に触れたかった	50(43.5)	101(38.5)
	観光を兼ねて	8(7.0)	21(8.0)
	農業の現状を知りたかった	32(27.8)	102(38.9)
	単調な日常生活のリフレッシュ	21(18.3)	51(19.5)
	都会の生活に疲れた	7(6.1)	21(8.0)
	単に時間があつた	3(2.6)	9(3.4)
	その他	10(8.7)	26(9.9)
合計	147(100.0)	115(100.0)	262(100.0)

注. 1) 参加理由(1~3位積み上げ)は複数回答、性別は単一回答。

2) 無回答の2件を除く。

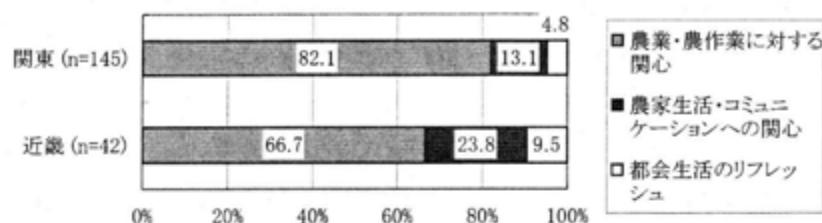


第2-9図 家族パターン別にみる参加理由1位

注. 1) 家族パターン、参加理由1位はいずれも単一回答。

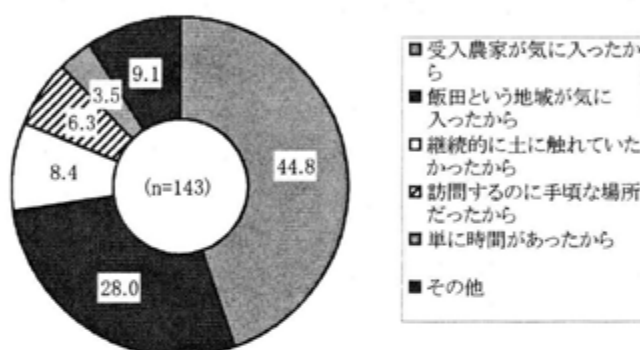
2) 参加理由1位については、「農作業がしてみたかった」、「農作物に興味があった」、「土への愛着があった」、「農業の現状を知りたかった」の4カテゴリを「農業・農作業に対する関心」に、「農家に泊まりたかった」、「人とのコミュニケーションをとりたかった」、「地域の生活に触れたかった」の3カテゴリを「農家生活・コミュニケーションへの関心」に、「単調な日常生活のリフレッシュ」、「都会の生活に疲れた」の2カテゴリを「都会生活のリフレッシュ」にそれぞれカテゴリ統合した。

3) 無回答および家族パターンの「その他」の88件を除く。



第2-10図 関東・近畿別にみるWHの参加理由1位

- 注. 1) 地域ブロック、参加理由1位はいずれも単一回答。
 2) 参加理由1位のカテゴリ統合方法は、第2-3図に同じ。
 3) 無回答および地域ブロックの「関東」、「近畿」以外のブロックである77件を除く。



第2-11図 複数回参加した主な理由(単一回答)

注. 無回答および非該当の121件を除く。

%)の割合は特に高くなっている。「農家生活・コミュニケーションへの関心」は、「高齢夫婦のみ」(27%)、「若年独身(女性)」(24%)などで比較的割合が高い。一方で、「都会生活のリフレッシュ」が高いのは、公私ともにストレスが多いと考えられる「夫婦(小児子育て中)」(16%)の参加者であった。

10の地域ブロックのうち、最も回答者数の多い関東と近畿について、参加理由1位の違いを示したのが第2-10図である。関東と近畿では、市民農園の立地件数が大きく異なり²⁾、農作業に対する潜在的な需要も異なることが予想された。同図によると、関東は「農業・農作業に対する関心」の割合が高いのに対し(82%)、近畿は「農家生活・コミュニケーションへの関心」(24%)や「都会生活のリフレッシュ」(10%)の割合が相対的に高くなっている。

参加理由の最後に、飯田市のWHへの複数回参加者について検討しておく(第2-11図)。複数回参加した理由として最も割合が高いのが「受入農家が気に入ったから」(45%)、ついで「飯田という地域が気に入ったから」(28%)である。「継続的に土に触れていたかったから」とする回答者割合は8%にとどまった。単に農作業をしたいという理由でリピーターとなる人は比較的少なく、リピーターの多くは受入農家や飯田という地域を気に入り、人とのつながりを求めて訪れている。

3) WHへの満足度と評価

(i) WHへの満足度

WHの満足度については、満足できた点、不満な点を定性的に尋ねる設問と、作業、生活・交流、総合の3側面から定量的に尋ねる設問を用意した。前者についての結果を第2-6表に示した。同表によると、満足できた点として回答割合が高いのは「農作業を体験できたこと」(73%)、「農家の人柄が良かったこと」(63%)、「農家における生活体験ができたこと」(51%) などとなっている。これに対し、不満な点については、「特になかった」が64%と特に高く、その他、「交通費がかかりすぎたこと」(18%) との回答割合がやや高くなっている。

WHに参加して満足できた点と参加回数との関係を検証したのが第2-7表である。「3回以上」の参加者では、「農家とのコミュニケーションがとれたこと」(41%)、「WH参加者同士の交流ができたこと」(16%) の割合が、「1~2回」の参加者より相対的に高く、参加回数の多い参加者は、農家との深いコミュニケーションや参加者同士の交流を積極的に評価していることが分かる。

第2-6表 WHに参加して満足できた点、不満だった点

		(単位:件, %)	
区 分		件数(割合)	
Q12満足できた点 (複数回答)	農作業を体験できたこと	188	(72.6)
	農家の人柄が良かったこと	164	(63.3)
	農家における生活体験ができたこと	131	(50.6)
	農家とのコミュニケーションがとれたこと	88	(34.0)
	飯田という地域をよりよく理解できたこと	56	(21.6)
	気分転換になったこと	51	(19.7)
	農業についての理解が深まったこと	50	(19.3)
	WH参加者同士の交流ができたこと	27	(10.4)
	その他	3	(1.2)
	無回答	5	
Q13不満だった点 (複数回答)	交通費がかかりすぎたこと	45	(18.1)
	単調な作業が多かったこと	15	(6.0)
	観光的な楽しみ方ができなかったこと	11	(4.4)
	他のWH参加者と意見が合わなかったこと	6	(2.4)
	受入農家との意見が合わなかったこと	4	(1.6)
	作業内容がきつすぎたこと	3	(1.2)
	その他	34	(13.7)
	不満な点は特になかった	158	(63.5)
計		264	(100.0)

注. 表中()内の割合は分母から無回答を除く。

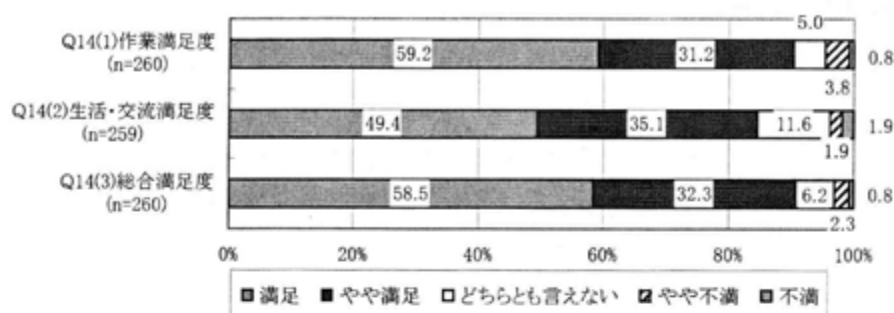
第2-7表 参加回数別にみるWHに参加して満足できた点

(単位:件, %)

区 分	Q12満足できた点									合計
	農作業を体験できたこと	農家の人柄が良かったこと	農家における生活体験ができたこと	農家とのコミュニケーションがとれたこと	飯田という地域をよりよく理解できたこと	気分転換になったこと	農業についての理解が深まったこと	WH参加者同士の交流ができたこと	その他	
1回	86(74.1)	78(67.2)	60(51.7)	38(32.8)	21(18.1)	18(15.5)	23(19.8)	9(7.8)	2(1.7)	116(100.0)
2回	42(72.4)	33(56.9)	32(55.2)	15(25.9)	12(20.7)	17(29.3)	10(17.2)	5(8.6)	1(1.7)	58(100.0)
3回以上	60(71.4)	52(61.9)	38(45.2)	34(40.5)	22(26.2)	16(19.0)	16(19.0)	13(15.5)	-(-)	84(100.0)
合計	188(72.9)	163(63.2)	130(50.4)	87(33.7)	55(21.3)	51(19.8)	49(19.0)	27(10.5)	3(1.2)	258(100.0)

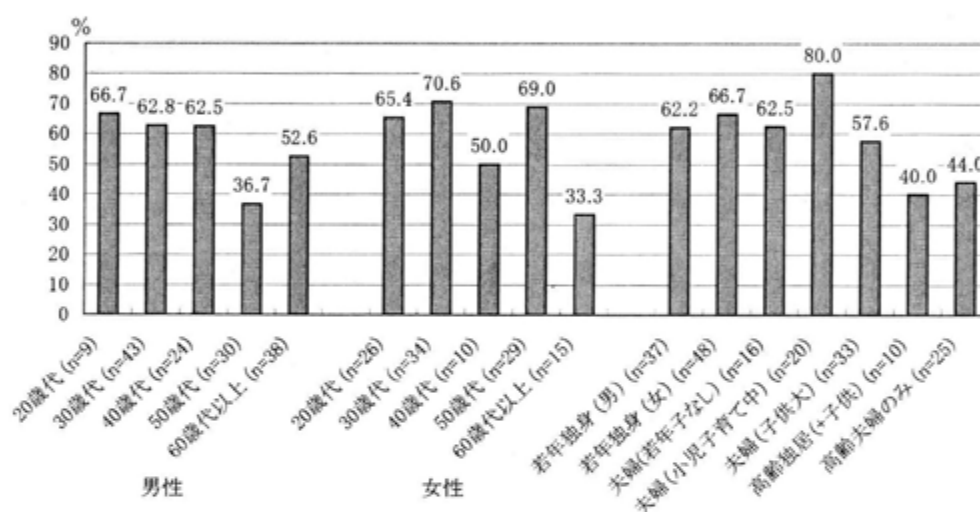
注. 1) 参加回数は単一回答、満足できた点は複数回答。

2) 無回答の6件を除く。



第2-12図 WH参加者の満足度

注. 作業満足度, 生活・交流満足度, 総合満足度についてはそれぞれ無回答の4件, 5件, 4件を除く。



第2-13図 年齢・性別、家族パターン別にみる総合満足度「満足」の割合

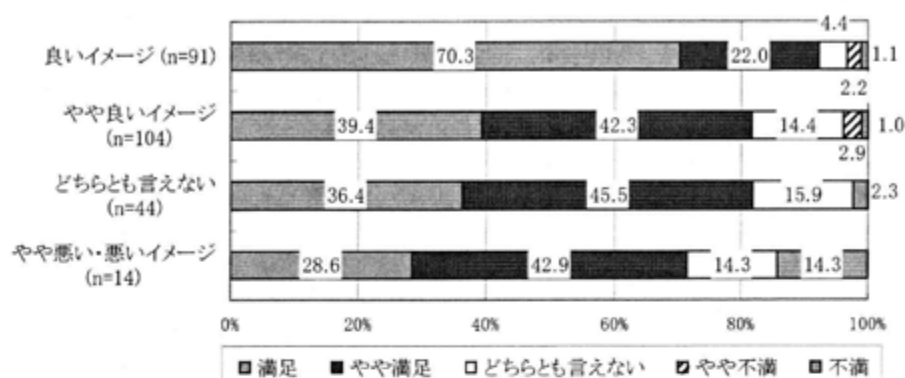
注. 1) 年齢, 性別, 家族パターン, 総合満足度はいずれも単一回答。

2) 年齢, 性別グラフは無回答の6件を除く, 家族パターンは無回答の75件を除く。

作業満足度, 生活・交流満足度, 総合満足度の3指標について第2-12図に示す。作業満足度と総合満足度は, それぞれ「満足」が59%であり, 「やや満足」も合わせると, いずれも90%以上が肯定的な回答を寄せている。生活・交流満足度はこれらよりやや低く, 「満足」が49%, 「やや満足」が35%にとどまっている。

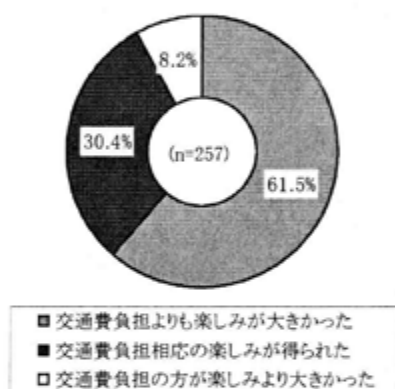
では, 総合的満足度が高いのはこういった属性の参加者なのか。これについては, 年齢別・男女別および家族パターン別に, 総合満足度における「満足」の割合を示した(第2-13図)。WHについて「満足」したとする者の割合は, 男性では「20歳代」(67%), 女性では「30歳代」(71%), 「50歳代」(69%)がそれぞれ高い。家族パターン別には, 「夫婦(小児子育て中)」の80%が最も高い。逆に, 満足度が最も低いのは, 男性の場合は「50歳代」(37%), 女性の場合は「60歳代以上」(33%)であり, 家族パターン別には「高齢独居(+子供)」(40%)となっている。

農村のイメージ別に生活・交流満足度をみたのが第2-14図である。農村に対して「良いイメージ」を持つ者は, 生活・交流の満足度を「満足」とする割合が70%に達している。



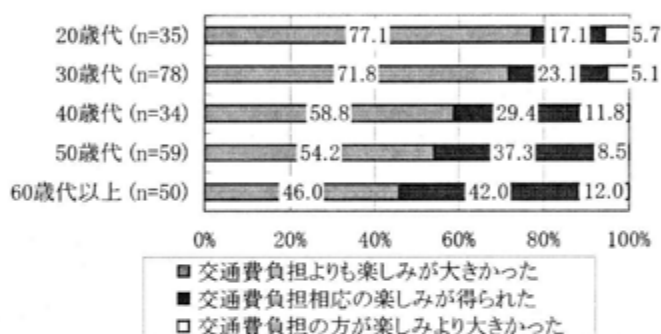
第2-14図 農村のイメージ別にみる生活・交流満足度

注. 1) 農村のイメージ, 生活・交流満足度はいずれも単一回答。
2) 無回答の11件を除く。



第2-15図 交通費に見合う楽しみ (単一回答)

注. 無回答の7件を除く。



第2-16図 年齢別にみる交通費に見合う楽しみ

注. 1) 年齢, 交通費に見合う楽しみはいずれも単一回答。
2) 無回答の8件を除く。

しかし一方で、悪いイメージを持つ層ほど「満足」の割合は少なくなっている。

(ii) 「交通費に見合う楽しみ」と「労働に見合う満足感」

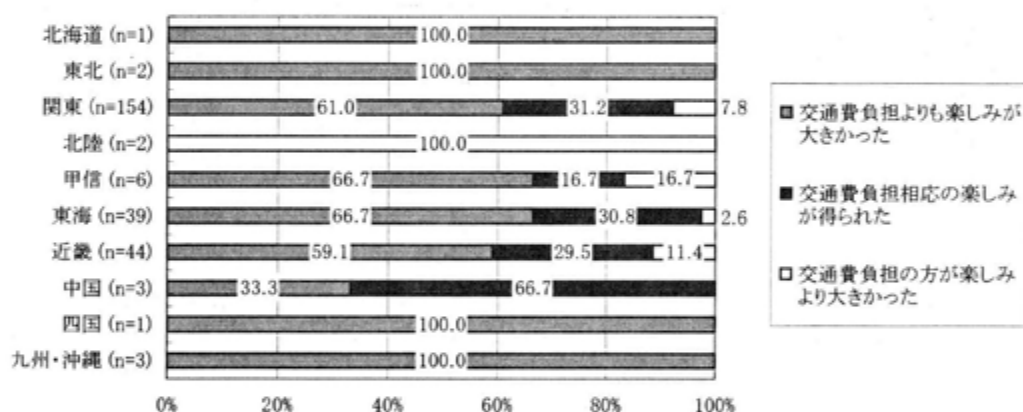
当アンケートでは、WH参加者の満足度を計測する指標として、①「交通費負担に見合う楽しみを得られたか」という設問と、②「労働（苦労）に見合うサービス・満足感を得られたか」という2種類の設問を用意した。これらの設問において、WHへの参加コストと効用の関係を検証した。

前者の「交通費に見合う楽しみ」では、「交通費負担よりも楽しみが大きかった」とする割合が62%と最も高く、「交通費負担相応の楽しみが得られた」が30%である(第2-15図)。これを年齢別にみると、「交通費負担よりも楽しみが大きかった」とする回答割合は、若い世代ほど高く、特に「20歳代」(77%)、「30歳代」(72%)において高い。逆に、相対的に交通費負担を重く感じているのは「40歳代」と「60歳代以上」(共に12%)である(第2-16図)。

また、地域ブロック別に分析したのが第2-17図である。同図に示されているように、母数は少ないものの、「北海道」、「東北」、「四国」、「九州・沖縄」といった、飯田市から遠い地域から訪れた参加者が全て「交通費負担よりも楽しみが大きかった」（いずれも100%）と回答している点は注目される。

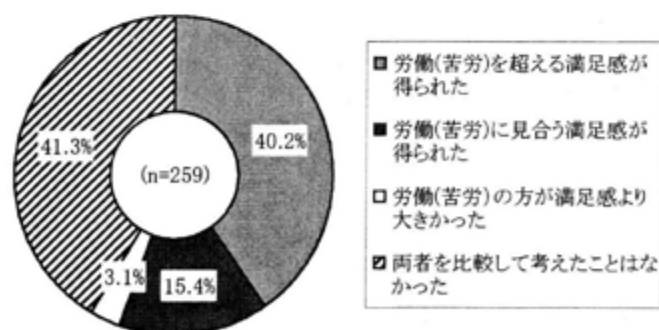
後者の「労働に見合う満足感」に関する設問では、「労働（苦労）を超える満足感が得られた」（40%）とする回答と、「両者を比較して考えたことはなかった」（41%）とする回答がほぼ拮抗している（第2-18図）。「両者を比較して考えたことはなかった」とする回答を除けば、「労働（苦労）を超える満足感が得られた」とする回答は全体の68%を占める。

年齢別に労働に見合う満足感の程度を示したのが第2-19図である。「労働（苦労）を超える満足感が得られた」については、若年世代ほどその割合が高まっている。「60歳代以上」で最も回答率が高いのは「両者を比較して考えたことはなかった」（58%）とする回答であり、同カテゴリの回答率は若年世代ほど少ない。若年層ほどWHに対してシビアに



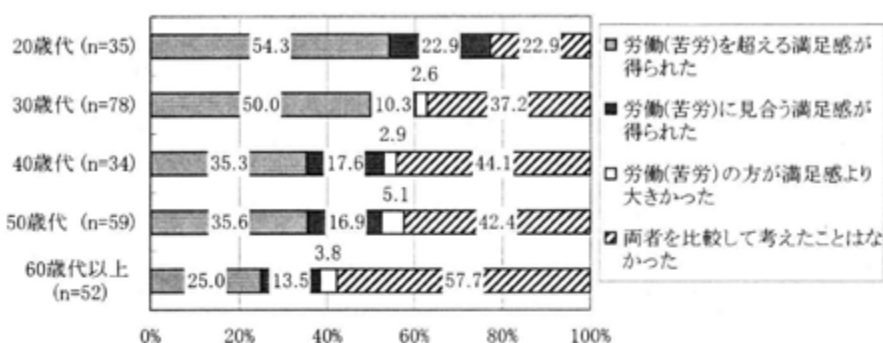
第2-17図 地域ブロック別にみる交通費に見合う楽しみ

注. 1) 地域ブロック、交通費に見合う楽しみはいずれも単一回答。
2) 無回答の9件を除く。



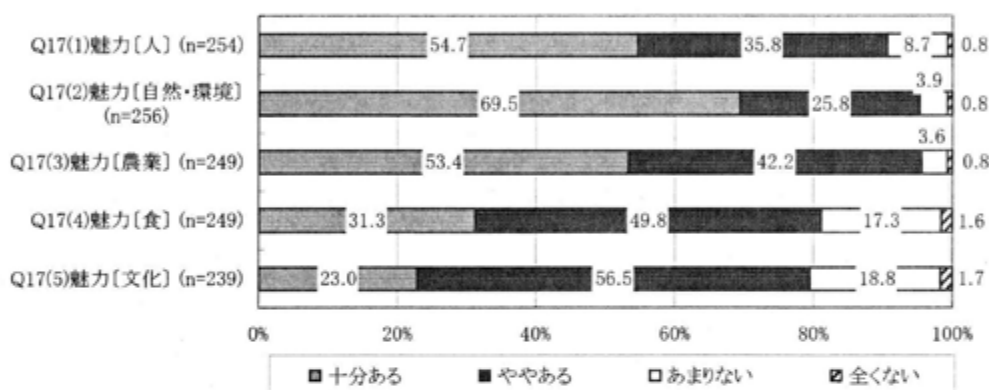
第2-18図 労働に見合う満足感(単一回答)

注. 無回答の5件を除く。



第2-19図 年齢別にみる労働に見合う満足感

注. 1) 年齢, 労働に見合う満足感はいずれも単一回答。
2) 無回答の6件を除く。



第2-20図 飯田独自の魅力

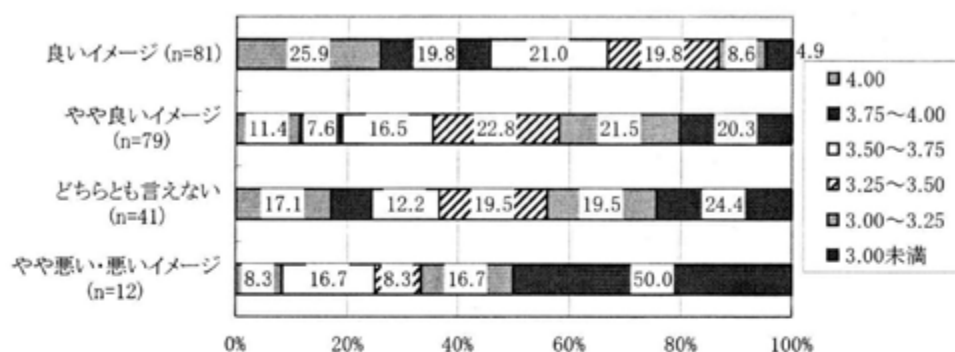
注. 魅力の人, 自然・環境, 農業, 食, 文化はそれぞれ無回答の10件, 8件, 15件, 15件, 25件を除く。

経済的な評価をしていることが分かる。

(iii) 飯田独自の魅力

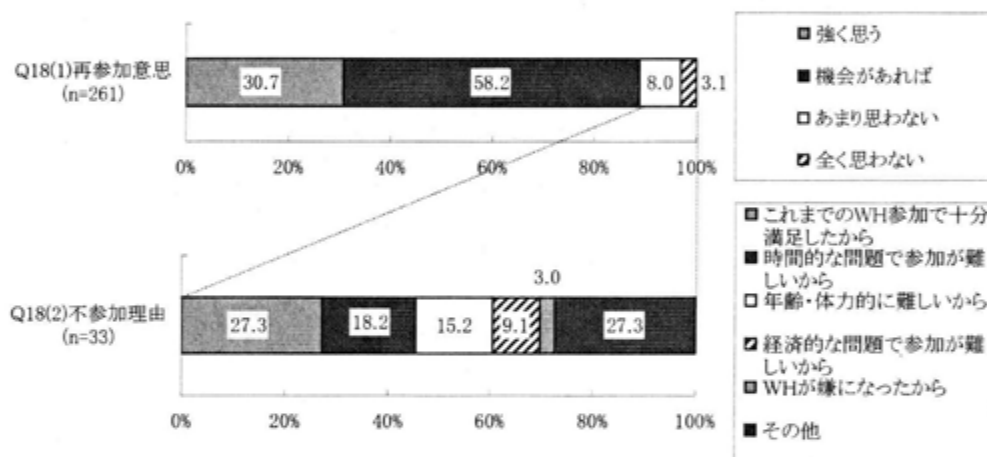
第2-20図では飯田独自の魅力について示した。独自の魅力を測る柱として、「人」、「自然・環境」、「農業」、「食」、「文化」の5つのカテゴリを用意したが、その中で最も評価が高かったのは「自然・環境」である。「自然・環境」については、70%の回答者が魅力を「十分ある」としており、「ややある」を含めると95%が「ある」と回答している。これに対して、評価が最も低かったのは「文化」であり、「十分ある」が23%となっている。なお、別途行った自由回答の分析によると、文化水準の高低がこの結果に影響したというよりは、むしろ農作業目的に数日間滞在するWHでは、地域の文化の魅力まで十分に感じ取ることができなかったと判断した方が適当と考えられる。

次に、参加者が抱く農村のイメージと飯田の魅力の関係をみたものが第2-21図である。農村に「良いイメージ」を持つ者をみると、魅力の平均点^①「3.50以上」の割合が計67%と高い。反面、「やや悪い・悪いイメージ」を持つ者において、平均点「3.00未満」の割合は高く、その割合は67%に及んでいる。



第2-21図 農村のイメージ別にみる「飯田の魅力」の平均点

- 注. 1)「飯田独自の魅力」の平均点は、「人」、「自然(環境)」、「農業」、「食」、「文化」のそれぞれについて「十分ある」を4点、「ややある」を3点、「あまりない」を2点、「全くない」を1点として5項目の単純平均を算出したものである。
 2)農村のイメージは単一回答、飯田の魅力の平均点は数値。
 3)無回答の51件を除く。



第2-22図 再参加の意志と再参加したいと思わない主な理由
(いずれも単一回答)

注. 再参加意志は無回答の3件、不参加理由は無回答および非該当の231件を除く。

4) WHへの再参加意志

今後のWHへの再参加意志についてまとめたのが第2-22図である。WHへの再参加意志については、「強く思う」が31%、「機会があれば」参加が58%となっており、「あまり思わない」と「全く思わない」を合わせても11%に過ぎない。再参加意志のない参加者の理由をみると、「これまでのWH参加で十分満足したから」とする回答が27%存在する一方、「時間的な問題で参加が難しいから」(18%)、「年齢・体力的に難しいから」(15%)といった回答割合も高くなっている。

続いて、参加して不満だった点と再参加意志との関係を見た(第2-8表)。筆者はここで、参加者の再参加意志に影響する不満要因の析出を試みたが、ほとんどの項目において「参加したいと思う」の割合が「参加したいと思わない」の割合を大幅に上回っており、決定的な要因は見つからなかった。「参加したいと思わない」とする割合が高かったのは、「作

第2-8表 参加して不満だった点と再参加意志

(単位:件, %)

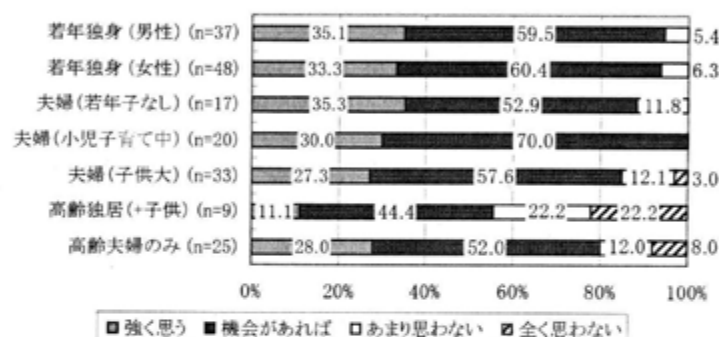
(単位:件, %)

区 分		Q18(1)再参加意思(2カテゴリ)		合計
		参加したい と思う	参加したいと 思わない	
Q13不満 だった点	交通費がかかりすぎたこと	36(80.0)	9(20.0)	45(100.0)
	単調な作業が多かったこと	10(71.4)	4(28.6)	14(100.0)
	観光的な楽しみ方ができなかったこと	9(81.8)	2(18.2)	11(100.0)
	他のWH参加者と意見が合わなかったこと	5(83.3)	1(16.7)	6(100.0)
	受入農家との意見が合わなかったこと	3(75.0)	1(25.0)	4(100.0)
	作業内容がきつすぎたこと	1(33.3)	2(66.7)	3(100.0)
	その他	29(85.3)	5(14.7)	34(100.0)
	不満な点は特になかった	151(95.6)	7(4.4)	158(100.0)
合計		222(89.5)	26(10.5)	248(100.0)

注. 1) 不満だった点は複数回答, 再参加意志は単一回答。

2) 再参加意志については、「強く思う」、「機会があれば」の2カテゴリを「参加したいと思う」に、「あまり思わない」、「全く思わない」の2カテゴリを「参加したいと思わない」にそれぞれカテゴリ統合した。

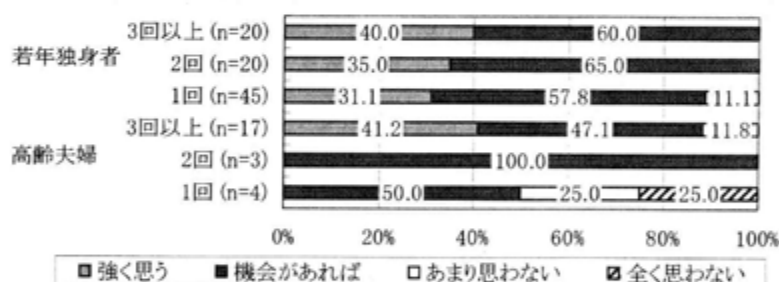
3) 無回答の16件を除く。



第2-23図 家族パターン別にみる再参加意志

注. 1) 家族パターン, 再参加意志はいずれも単一回答。

2) 無回答および家族パターンの「その他」の75件を除く。

第2-24図 若年独身者と高齢夫婦にみる
参加回数別の再参加意志

注. 1) 参加回数, 家族パターン, 他地域の取組への参加希望数はいずれも単一回答。

2) 無回答および家族パターンの他カテゴリである168件を除く。

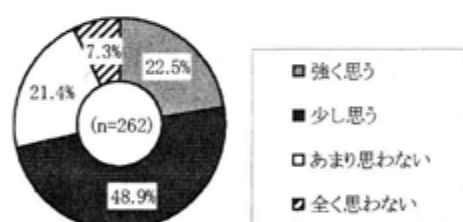
業内容がきつすぎたこと」(67%)と「単調な作業が多かったこと」(29%)等であるが、「作業内容がきつすぎたこと」については、サンプル数が3と少なく、不満要因と断定することは難しい。

家族パターン別に再参加する意志を確認したのが第2-23図である。WHへの再参加について「強く思う」とする割合が高いのは「夫婦(若年子なし)」(35%)、「若年独身(男性)」(35%)、「若年独身(女性)」(33%)などいずれも若い世代である。若年独身者と

高齢夫婦に焦点を絞って、さらに参加回数別に分けると（第2-24図）、「高齢夫婦」は「1～2回」の参加者と「3回以上」の参加者で再参加意志が大きく異なることが分かる。しかも「3回以上」の参加者数はかなり多い。このように、高齢夫婦グループには、“ヘビー・リピーター”ともいべき参加者層が一大団をなして存在していると推察できる。

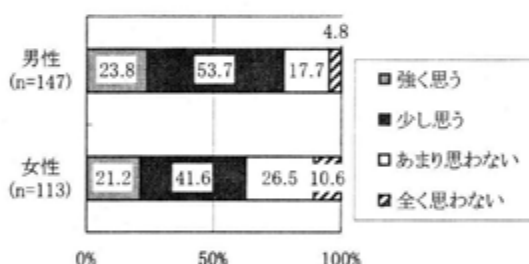
5) 参加者の定住意志

最後に、農村地域への定住意向について検討を行いたい。農村への定住意志については第2-25図に示した。定住について「強く思う」とする回答は23%であり、「少し思う」(49%)を加えると、71%が「定住の意志あり」となる。これらは「あまり思わない」(21%)、「全く思わない」(7%)を大きく上回っており、WH参加者の定住志向はかなり高いことが示されている。男女別にみると、「強く思う」、「少し思う」割合はいずれも男性が高い（第2-26図）。では、農村への定住意志を持つ者は、他地域の農業に関する取組にどの程度参加してきたのだろうか。この関係を示したのが第2-27図である。定住意志について「強く思う」とする割合は、他地域の農業に関する取組への参加数⁽⁴⁾「1個」では20%にとどまるのに対し「5～6個」では67%に及んでいる。他地域の農業に関する取組への参加数が多い者ほど、農村定住に積極的な姿勢を持っていることが分かる。さらに、「農村に良い



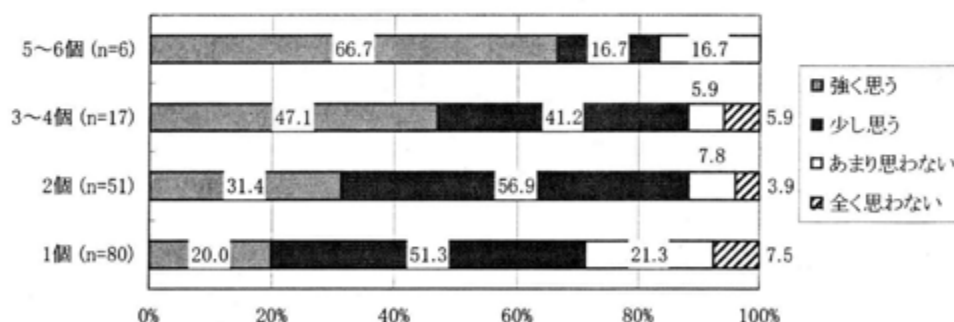
第2-25図 農村への定住意志
(単一回答)

注. 農村への定住意志は無回答の2件を除く。



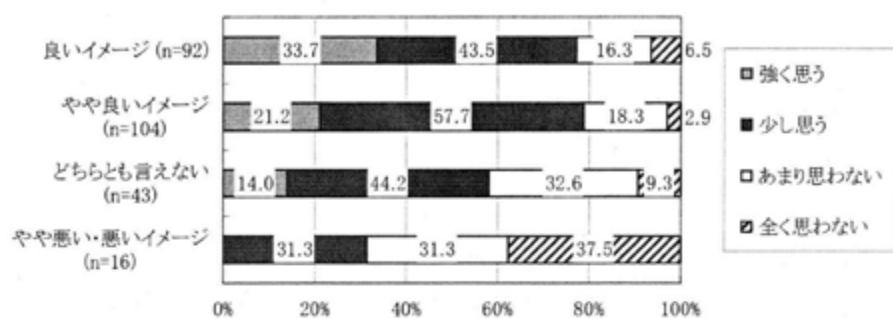
第2-26図 男女別にみる定住意志

注. 1) 性別, 農村への定住意志はいずれも単一回答。
2) 無回答の4件を除く。



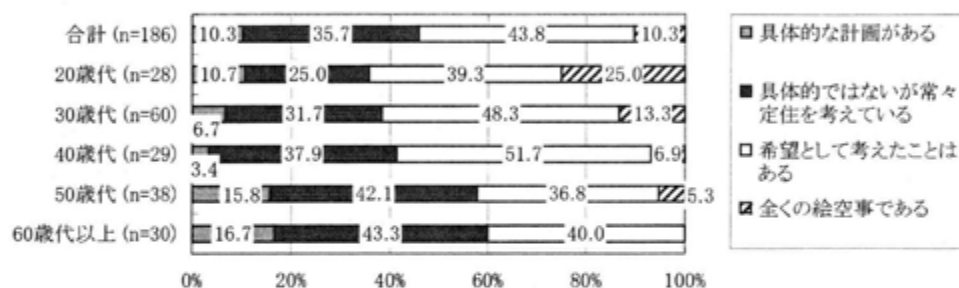
第2-27図 他地域の取組への参加数と農村への定住意志

注. 1) 他地域の農業に関する取組への参加数は、「問19(1)他地域の農業に関する取組」(複数回答)における回答項目数を事後的にカウントした数値である。この数値が高いほどその参加者が他地域の取組に多くの興味を持っていることを示す。
2) 他地域の取組への参加数は数値, 農村への定住意志は単一回答。
3) 無回答および非該当の110件を除く。



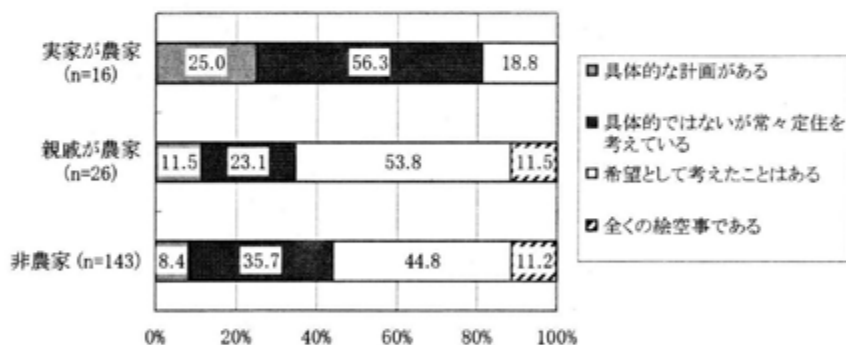
第2-28図 農村のイメージ別にみる定住意志の有無

注. 1) 農村のイメージ、定住意志はいずれも単一回答。
2) 無回答の9件を除く。



第2-29図 年齢別にみる定住計画の有無

注. 1) 年齢、定住計画の有無はいずれも単一回答。
2) 無回答および非該当の79件を除く。



第2-30図 農家との関係別にみる定住計画の有無

注. 1) 農家との関係、定住計画の有無はいずれも単一回答。
2) 無回答および非該当の79件を除く。

イメージ」を持つ回答者のうち、定住について「強く思う」とする者は34%おり（第2-28図）、
「農村に良いイメージ」を持つ者の定住意志の高さも明らかとなっている。

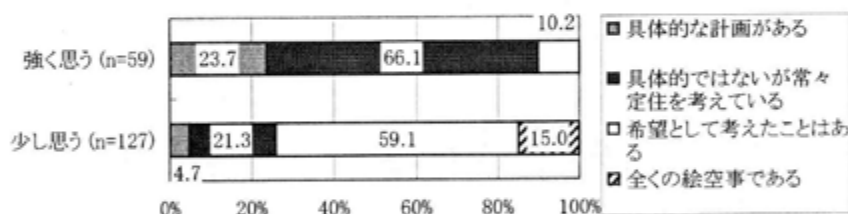
続いて、定住意志があると回答した者には、定住計画の有無と定住する際の生計手段について設問を設けたので、これらについて分析を進めたい。まず、定住計画の有無について年齢別に示す（第2-29図）。ここで注目されるのが「50歳代」と「60歳代以上」である。

「具体的な計画がある」はそれぞれ16%と17%、「具体的でないが常々定住を考えている」割合はそれぞれ42%、43%と、若年世代に比べて高くなっている。

農家との関係別に具体的な定住計画の有無を見たのが第2-30図である。ここでは、「具体的な計画がある」、「具体的ではないが常々定住を考えている」とする回答の割合が、いずれも「実家が農家」の参加者において高い。ここでの「定住」には、実家へのUターンが含まれるとはいえ、かなり高い割合である。

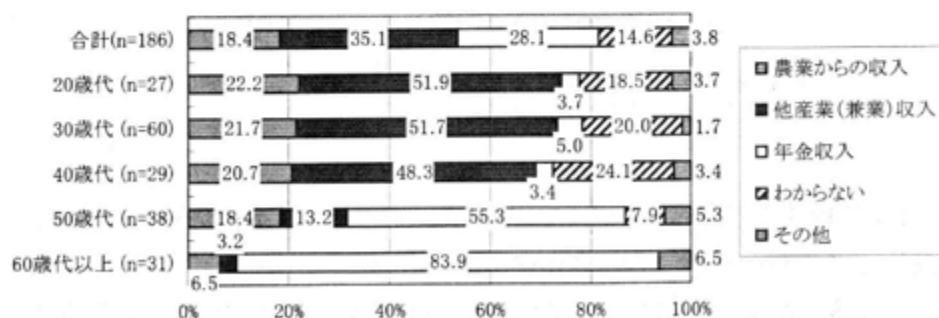
農村への定住意志と具体的な定住計画との関係については第2-31図に示した。農村への定住意志について「強く思う」回答者のうち、「具体的な計画がある」とする回答率は24%に達するが、「少し思う」では同回答率が5%に満たない。また、「少し思う」では、6割弱が定住計画について「希望として考えたことはある」としている。定住意志が強いほど、定住計画の具体性が高いといえるだろう。

さて最後に、定住の際の生計手段について分析しよう。全体の合計数値で見る限り回答率が高いのは「他産業（兼業）収入」（35%）、「年金収入」（28%）であり、「農業からの収入」は18%にとどまる（第2-32図）。これを年齢別にみると、「20歳代」、「30歳代」の若い世代は、生計手段を「他産業（兼業）収入」や「農業収入」としている割合が高いが、「50歳代」以上、特に「60歳代以上」は圧倒的に「年金収入」を見込んでいる。各世代が思い描いている農業経営の姿と定住の実現可能性の差がこの結果に影響していると思わ



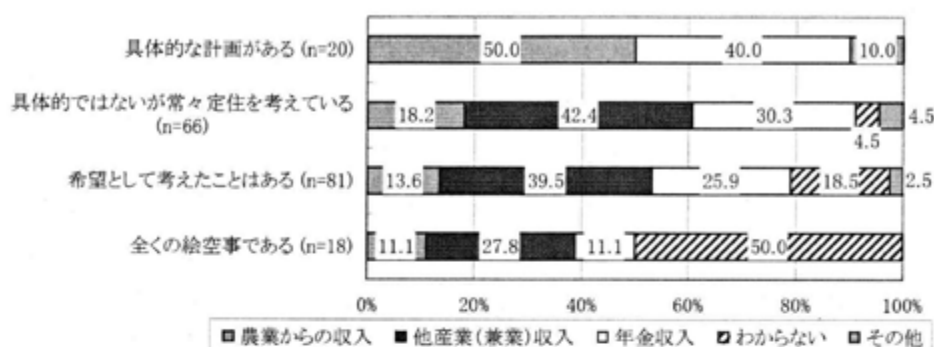
第2-31図 農村への定住意志と具体的な定住計画の有無

- 注. 1) 農村への定住意志、定住計画はいずれも単一回答。
 2) 具体的な定住計画は定住意志について「強く思う」または「少し思う」と回答した者にも設定された設問である。
 3) 無回答および非該当の78件を除く。



第2-32図 年齢別にみる定住の際の生計手段

- 注. 1) 年齢、定住の際の生計手段はいずれも単一回答。
 2) 無回答および非該当の79件を除く。



第2-33図 具体的な定住計画の有無と定住する際の生計手段

注. 1) 定住計画, 生計手段はいずれも単一回答.

2) 無回答および非該当の79件を除く.

れる。また、第2-33図で定住計画と生計手段との関係を見ると、「具体的な計画がある」者に回答割合が高いのは「農業からの収入」（50％）と、「年金収入」（40％）であるのに対して、「具体的ではないが常々定住を考えている」あるいは「希望として考えたことはある」者に割合の高いのは「他産業（兼業）収入」（42％）である。具体的計画を持つ者は、農業収入を基盤として暮らしたいと考える者と、年金収入を基盤に安定した田舎暮らしを希望する者に二極化しているように思われる。

(4)まとめ

以上、飯田市におけるWH参加者を対象としたアンケート調査について様々な観点から分析を行った。当アンケートの分析から、同じ飯田市のWHに参加しても、参加者の年齢、性別、出身地域等によって、その印象や満足度が大きく異なることが分かった。農村定住に意欲を見せる者の属性についても、ある程度明らかにすることができた。以下では、アンケート調査の要点をまとめるとともに、飯田市で行われているWHの課題と展望について若干の見解を述べたい。

アンケートにみるWHの特徴は、第1に参加者の属性である。若年独身者の参加割合が全般的に高く、年齢別の性別構成をみると20歳代では女性、60歳代では男性の割合がそれぞれ高い。参加者にはいくつかの家族パターンが存在し、そのパターンごとに、参加理由や参加回数、WHの満足度などが大きく異なることが分かった。たとえば、高齢夫婦と若年独身女性は、同じく生活やコミュニケーションに関心が高いにもかかわらず、高齢夫婦は参加回数が多い割に満足度が低いのに対して、若年独身女性は参加回数が少ない割に満足度が高いなどの特徴がみられる。

第2に、参加者の性別や居住地域によって参加理由の特徴が異なる。「男性」や「関東出身者」は「農業・農村への関心」が、「女性」や「近畿出身者」は「生活やコミュニケーションに対する関心」の割合が比較的高い。こうした参加理由の特徴は、それぞれの地域にWHのPRを行う際や各農家レベルで参加者に接する際の参考となるのではなかろう

か。

第3に、日常的な農村のイメージによってWHの印象が相当程度規定されている。農村に対して「良いイメージ」を持つ者は、そうでない者よりもWHの満足度が高く、地域の魅力も強く感じ、定住にも前向きであった。

第4に、参加者はWHを非常に高く評価している。参加者の満足度は全般に極めて高く、満足できた点として、「農作業体験」、「農家の人柄」、「農家における生活体験」などが挙げられている。また、WH参加者の受ける効用は、「交通費負担や提供する労働」を上回るとする回答が多く、参加者のWHに対する評価の高さがうかがえる。これに関連して、参加者の再参加意志が高いのも飯田WHの大きな特徴となっている。

第5に、WH参加者の定住意志は高い。単純集計の結果、約7割の参加者が定住意志を示しており、そのうち農村定住を強く志向する割合は23%にのぼっている。また、その中身である具体的な定住計画の有無や定住する際の生計手段については、年齢や性別、家族パターン、農家との関係等によって多様な状況であることが今回のアンケート分析から明らかになった。飯田市のWHは発足後8周年を迎えた。参加者の農作業体験に重きを置いた現状のWHを継続しつつも、参加者の農村定住を視野に入れた「ポストWH」ともいうべき次の一手を農業施策において考え始める時期に来ているように思われる。そのためにも農村定住希望者についての一層の分析は今後欠かせない作業となろう。

以上、アンケート調査の特徴を簡単に述べたが、この分析を通じて、飯田市のWHに対する満足度と期待の高さが改めて浮き彫りになったといえよう。このことは、巻末にまとめた自由回答欄への記述内容からも見受けられ、そこでは、一步進んだWHの有り様を模索する意見が随所に目立った。中でも参加者を一堂に集める全体交流会への改善要望は多い。農家生活やコミュニケーションのあり方を重視する参加者が多い現状や、農村定住意識の高さなどをふまえれば、WHの実施主体はこうした意見を真摯に受け止め、改善する努力を惜しむべきではないだろう。

その具体策として、「飯田市のWHをどのように改善すべきか」あるいは「WH後に農村とどう関わりたいか」などに論点を絞り、お互いのコミュニケーションを図るような機会を設けることは重要である。WHの究極の目的を、地域農業の振興と農業の担い手確保とするなら、WH参加者の綿密かつ計画的なフォローは、今後の最も重要な課題の1つである。

注(1) 「家族パターン」については、回答者の年齢、性別、家族構成より、事後的に分類した。年齢が「20歳代」または「30歳代」で「祖父母、父母」のいずれかと同居または「独居」である者を「若年独身」とし、性別により男女を分けた。年齢が「20歳代」または「30歳代」で、「配偶者」（あるいは+「父母」）と同居である者を「夫婦（若年子なし）」、年齢が「30歳代」または「40歳代」で、家族構成が「配偶者」と「子」（あるいは+「父母」）である者を「夫婦（小兒子育て中）」、年齢が「50歳代」で、家族構成が「配偶者」と「子」（あるいは+「父母」）である者を「夫婦（子供大）」、年齢が「60歳代」で、家族構成が「子」または「独居」である者を「高齢独居（+子供）」、年齢が「60歳代」で、家族構成が「配偶者」である者を「高齢夫婦のみ」とした。

- (2) 市民農園の立地件数は、東日本と西日本で大きな差がある。市民農園は全国に2,904カ所あるが、地域ブロック別内訳を見ると、関東が1,501カ所（52%）と過半数を占める。ついで東海（348カ所、12%）、近畿（307カ所、11%）となっている。

附表 地域ブロック別市民農園数

(単位:箇所、%, 区画, ha)

区 分	農園数	区画数	面積
北海道	69 (2.4)	6,982	91
東北	78 (2.7)	4,960	60
関東	1,501 (51.7)	81,838	399
北陸	128 (4.4)	5,593	59
東海	348 (12.0)	14,304	94
近畿	307 (10.6)	16,153	91
中四国	293 (10.1)	10,073	78
九州	171 (5.9)	12,162	81
沖縄	9 (0.3)	416	5
全国計	2,904 (100.0)	152,481	959

資料:農林水産省農村振興局地域振興課調べ。

注. 2004年3月現在。

- (3) 「飯田独自の魅力」の平均点は、「人」、「自然(環境)」、「農業」、「食」、「文化」のそれぞれについて「十分ある」を4点、「ややある」を3点、「あまりない」を2点、「全くない」を1点として、5項目の単純平均を算出したものである。
- (4) 他地域の農業に関する取組への参加数は、「問19(1)他地域の農業に関する取組」(複数回答)における回答項目数を事後的にカウントした数値である。この数値が高いほどその参加者が他地域の取組に多くの興味を持っていることを示す。

第3章 WHの事例分析

東北大学大学院農学研究科 渡部岳陽

(1)宮崎県西米良村における取組

筆者は2004年9月および2005年3月に西米良村を訪問し、役場や受入農家等に対してヒアリング調査を行った。以下では、調査時に入手した資料、ヒアリング内容を元に、西米良村において取り組まれているWHについて検討を進める。

1)地域概況

宮崎県中央部最西端、九州中央山地に位置する児湯郡西米良村は、宮崎県下の市町村の中で最も人口の少ない山間農業地域である（第3-1図）。北隣には日本三大秘境の1つといわれた椎葉村が控え、平家落人伝説もある山奥に位置する小さな村である。県都宮崎市および宮崎空港から自動車で2時間、隣の西都市から1時間の距離にある。村内には鉄道はなく、公共交通機関は宮崎交通と西米良村営のバス路線のみである。また、219号線、265号線の2つの国道が村内を通っている。村の中央には1つ瀬川が流れ、豊かな自然と個性的風土に恵まれている。地形は急峻、村土の96%を森林が占め、耕地面積率は1%にも満たない。人家や耕地は谷沿いに点在している。降水量が多く、夏期冷涼でかつ、気温の日較差が大きい気候を利用して、柑橘や花きの栽培が行われている。

西米良村の人口は1960年の5,586人から2000年には1,481人にまで減少した（第3-1表）。若者の流出も進み高齢化も深刻である（2005年4月1日時点で高齢化率40.2%）。その背景にはこれまで地域の雇用を支えてきた林業の衰退がある。昭和40年代頃まで村の主産業は林業と薪炭業であったが、エネルギー革命やその後の木材価格の低下により採算がとれなくなった。椎茸栽培が盛んな時期もあったが、中国産の輸入増加で価格が低迷し苦しい状況にある。土木事業などの公共事業も昨今の不況下で昔ほど行われなくなっている。

農業面では、農家数、農業就業人口、基幹的農業従事者数、経営耕地総面積などの減少が著しく、経営規模の拡大も進んでい



第3-1図 西米良村の位置

第3-1表 西米良村農業の概要

区 分	1985年	1990年	1995年	2000年
総人口	1,989	1,694	1,543	1,481
総世帯数	762	690	657	675
農家率(%)	32.0	32.9	29.1	25.3
農業就業人口(販売農家) ⁽¹⁾ (人)	407	233	185	145
農業就業人口/総人口(%)	20.5	13.8	12.0	9.8
基幹的農業従事者数 ⁽²⁾ (人)	299	179	146	108
農家				
総農家数(戸)	244	227	191	171
販売農家率(%)	-	69.6	61.8	59.6
専業農家率(販売農家) ⁽¹⁾ (%)	17.6	6.3	18.6	23.5
第1種兼業農家率(販売農家) ⁽¹⁾ (%)	25.4	19.6	20.3	15.7
第2種兼業農家率(販売農家) ⁽¹⁾ (%)	57.0	74.1	61.0	60.8
経営耕地規模別農家率(総農家) ⁽³⁾ (%)				
0.3ha未満(自給的農家)	34.4	32.1	39.7	41.8
0.3～0.5ha	32.0	34.0	34.2	35.2
0.5～1.0ha	29.9	28.4	24.5	21.8
1.0～1.5ha	2.5	3.7	1.6	0.0
1.5～2.0ha	0.4	0.5	0.0	0.0
2.0～3.0ha	0.4	0.9	0.0	1.2
3.0～5.0ha	0.4	0.5	0.0	0.0
5.0ha以上	0.0	0.0	0.0	0.0
経営耕地面積(販売農家) ⁽¹⁾				
経営耕地総面積(ha)	109	91	58	51
一戸当たり耕地面積(a)	45	58	49	50
水田率(%)	58.7	52.7	62.1	60.8
畑地率(%)	8.3	6.6	12.1	11.8
樹園地率(%)	33.0	40.7	27.6	29.4

資料：農(林)業センサス各年度版より作成。

注：1)1985年は総農家ベース。

2)2000年は販売農家ベース。

3)1990年以降は分母の総農家戸数から例外農家を除く。

第3-2表 西米良村における農業粗生産額の推移

(単位:1,000万円)

区分	米	畜産	野菜	果実	花き	計
1985年	7.5	8.2	3.7	2.6	-	26.2
1990年	4.1	5	3.6	6.6	0.4	23.3
1995年	5	3	3	9	2	25
2000年	3	2	2	10	3	26
2002年	4	2	2	9	5	21

資料：農林水産省『生産農業所得統計』各年度版より作成。

注：1995年以降は統計自体が1,000万円単位で公表されている。

ない(第3-1表)。農業を営む人が減り、それに伴い農地も荒廃の一途を辿っている状況がうかがえる。そうした中でも、村の農業粗生産額は2000年まで2.5億円ラインを維持していた(第3-2表)。パンジー・ピオラなどの花きやホオズキ、柚子といった特産物への取組が現在の村農業を支えている。2002年度時点で柚子生産農家は67戸、花き栽培農家は7戸、ホオズキ栽培農家は23戸である(重複有り)。認定農業者は11名存在する。

2)WH構想が浮上した背景と仕組み

(i)「カリコボーズの休暇村・米良の庄」構想

過疎化、高齢化が進行する中で何らかの対応策を講じることが求められた西米良村では、1994年に「西米良総合産業フィージビリティ調査」が実施され、自然、気候、歴史、文化面での地域特性を活かした村づくりを進めることとした。95年度に策定された第三次西米良村長期総合計画後期計画では、「定住人口の増加と併せて緊急に交流人口を増加させる

こと」を基本施策とし、その基本コンセプトを“九州中央山地・一ツ瀬川源流・生涯現役元気村「カリコボーズの休暇村・米良の庄」”と設定した。この構想では、①西米良村に伝わる山の精霊「カリコボーズ」が住む豊かな自然と個性的な風土が共生する村づくり、②全村民が生涯現役として暮らせる村づくり、③全村を休暇村として多くの交流人口を迎え入れ訪問者と村民双方が笑顔で暮らせる村づくり、を狙いとした。

この「カリコボーズの休暇村・米良の庄」づくりを推進するための戦略プロジェクトとして展開されたのが「8つの庄づくり」である。この計画は、8つの施策それぞれにテーマ性と物語性を持たせ、将来にわたって西米良の地域情報を発信することを基本としており、その実働部隊として、1995年8月に村や農協等が出資する第三セクター「(株)米良の庄」が設立された。8つの庄として「健康づくりの庄」(温泉施設)、「街づくりの庄」(下水道整備)、「語り部の庄」(語り部屋敷・民話の宿)、「花づくりの庄」(花き団地)、「湖遊びの庄」(道の駅)、「川遊びの庄」(釣り堀施設)、「物づくりの庄」(特産品加工場)、「泊まりの庄」(キャンプ場拡充)が提示され、それぞれハード面での整備が進められた。これらのソフト面の推進方策、すなわち村外から人を呼び込むための手段の1つとして導入されたのがWHである。

(ii) WHの事業創設過程

まずはじめに役場が検討したのは、いかにして都市住民を村へ来させるのかという点である。そのためには、都市側のニーズの変化の検討と、村側の地域資源の再確認および交流需要の掘り起こしを行う必要があった。前者については、①豊富な自由時間を持つ高齢者層の増大、②充実しかつ費用のかからない旅行へのニーズの高まりが確認された。後者については、①柚子・花き栽培における季節的労働力不足、②遊休化したキャンプ場などの公営宿泊施設、③村の豊かな自然と人情味あふれる生活文化の存在、④交流による活性化への期待が見いだされた。これら双方の要因を有機的に結びつけることこそが、新たな交流事業の出発点になると役場は考えたのである。

こうした背景を持つWHは1996年に提案され、農業労働力が不足する時期・人数や農家民泊の可能性など、多様な角度からフィージビリティスタディが実施された。97年には参加意志を示した農家等に対して趣旨説明と意向調査が行われ、具体的な実施要領づくりが進められた(第3-3表)。要領と宿泊施設の設備が整い、その年の9月から12月まで3カ所の受入先でWHは試行的に実施された。当初WHのPRは、従前からある「ふるさと村民制度」¹⁾の会員720人に対して行ったが、彼らからはほとんど反応がなかった。しかしその後、地元新聞の一面に取りあげられたことを契機に全国の様々なメディアに紹介されることになり²⁾、参加希望の問い合わせが来るようになった。「本当に人が来るのか」という不安と期待の中で試行期間中に29人の参加があり、翌98年度よりWHは本格的に実施された。導入前は「シルバービレッジ構想」の名に象徴されるように、村は温泉や民宿に続く滞在プランとして高齢者層の参加を見込んでいた。しかし、予想に反して若年層の反響を呼ぶこととなり、とりわけ若い女性から強い関心が寄せられた。こうした経緯から、2000年度策

第3-3表 西米良村ワーキングホリデービレッジの案内

◆ 計画概要

- 双子キャンプ村や小川城址公園「民話の宿」を拠点とし(村内の民宿等の利用も可)、仕事は花の苗の鉢上げ・手入れ・出荷、柚子の選別・加工などの軽作業を準備。
- 受け入れ期間は、原則として1回につき、1人・1家族・1団体、休暇を含み3日から1週間以内といたします。例えば、1週間の場合は、3日間仕事を手伝って、残りの4日間は、ゆっくりと休暇を楽しんで頂けます。
- 米良の庄の売りは、豊かな自然です。フィトンチッドの森、澄み切った空気の中、山や川に遊び、吸い込まれるような星空を眺め、騒音も光もない、自然と一体になれる時間も必要と考えています。
- その他にも、ご希望に応じてさまざまな過ごし方ができます。体験学習、実習、ボランティアなどでの参加につきましては、別途お問い合わせください。

◆ 申し込み方法

- 第三セクター「株式会社 米良の庄」を窓口とし、電話、あるいはE-Mailでお申し込み下さい。農家から提出された仕事調査票により、農家と申し込み者との調整を行わせていただきます。また、仕事そのものにつきましては、基本的に農家と申し込み者との相対で契約していただくことになります。
- なお、いずれの日程におきましても、農家でのご仕事が満杯になり次第、締め切らせていただきますので、ご了承ください。

◆ 勤務時間

- 勤務時間 8:00～16:30(通勤時間は含みません)
 - 休憩時間 1時間30分
 - 実働時間 7時間
- ※休憩時間は、午前と午後に15分づつ、昼食時間が1時間となります。
 ※遅出、早退、残業、半日勤務などにおいては、時間給で計算します。
 ※送迎の用意もありますが、農家によってはご用意できない場合もあります。
 申し込みの際にご相談ください。

◆ 報酬

- 日当 4,270円
 - 時給 610円
- ※職種、男女、雇用者による区別はありません。
 ※仕事の内容によっては割増しする場合もございます。

◆ 宿泊施設と宿泊料金

- 双子キャンプ村のコテージを使用していただきます。
 <施設概要>
 ログハウス造り、和室、台所(炊事用具一式、食器類完備。但し、包丁や布巾などはご持参ください)、水洗トイレ、夜具完備(布団上下)。風呂はありませんが、管理棟に温水シャワーがあります。近くに温泉館がありますので温泉付きのキャンプ場としても、ご利用頂けます。
- 宿泊料金 1日1棟 3,000円
 ※電話は、管理棟にピンク電話があります。(携帯電話も使用できます。)
 ※宿泊料金は、ワーキングホリデー滞在者料金です。
 なお「小川城址公園 民話の宿」もご利用頂けます。

◆ 食事

- コテージを使用致しますので、食事の提供ができません。基本的に自炊となります。昼食は、基本的には、仕出し弁当(500円程度)などになります。

◆ 労働災害など

- 仕事に関しては、労働災害保険の適用があります。
- その他につきましては、申し込み者の責任において、生命保険、傷害保険、旅行保険などをご用意ください。また、健康保険証は必ずご持参ください。

資料:西米良村ホームページ(<http://www.nishimera.jp/nishimera/>)より。

定の第四次長期総合計画における「ワーキングホリデービレッジ構想」のコアにWHは位置づけられることとなった。

(iii) WHの仕組み

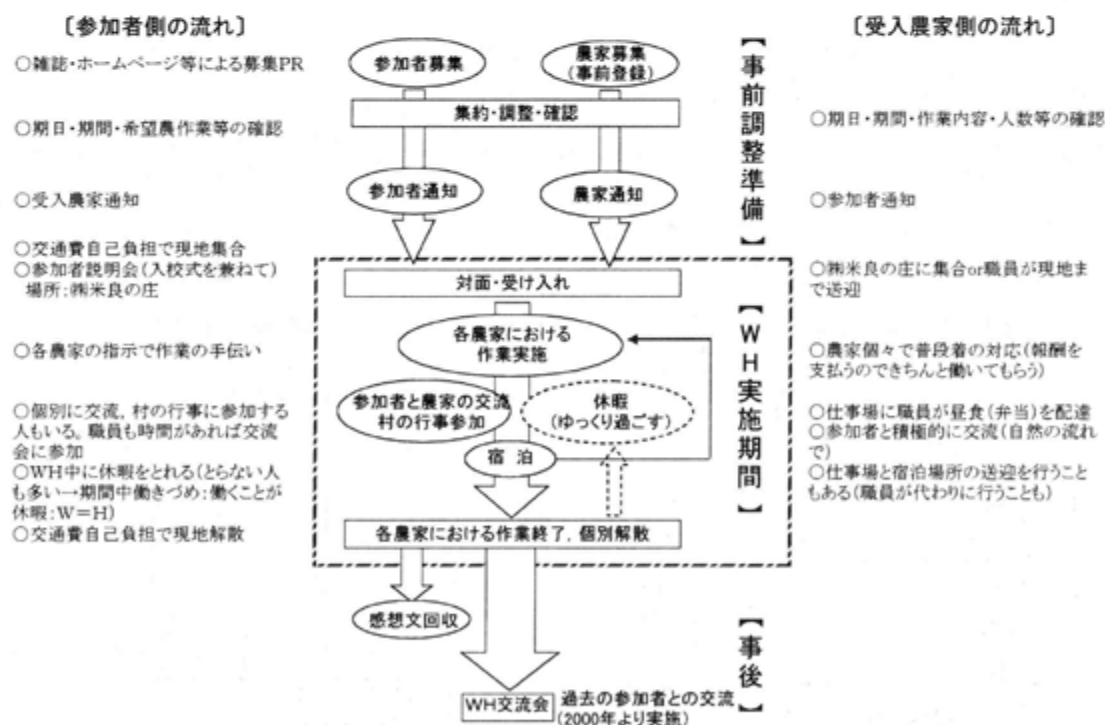
WHを仕組むに当たって注意が払われたのは、①村に来た人が少しでも長く滞在できるようにすること、②滞在する中で西米良の良さを知らせファンになってもらうこと、③来てくれた人の口コミを通じて西米良を発信すること、④将来的に不足することが見込まれ

る農業労働力の確保に繋げることの4点であった。村内滞在中の参加者の経済的負担を軽減させつつ、村民との交流を深めることによって、西米良村の良さを体験してもらうことが主要な目的とされた。これらをふまえ、西米良村におけるWHの仕組みは以下のように形作られた。

第1に、受入側が参加者の提供する農作業の手伝いに対して報酬を支払う。額は宮崎県最低賃金時給610円に設定し、実働7時間計算で日給4,270円とした。農作業の未体験者でも簡単にできる単純作業が中心である。参加者自身の労働に対して賃金が支払われるので、滞在期間中参加者にかかる費用負担が軽減されることになる。また万一の事故を想定し、参加者は労災保険に加入する。参加者の受け取った報酬は宿泊代や食事代として使われるため「受入者→（報酬）→参加者→（宿泊代・食事代）→村（隼米良の庄）」とお金が村内で循環する構造になっている。

第2に、農家等が人手を必要とする時期と参加者が希望する訪問時期が合致した時にWHは取り組まれる。実施時期および受入人数を決定する際には、労力補完を必要とする受入側の都合が優先され、受入側が必要としない時期には参加者の受入を基本的に行わない。双方のマッチング作業は隼米良の庄が行っている。後述するように参加者を受け入れる農家等の数が限られていることから、参加希望の問い合わせ全てに応えきれない状況が続いており、全体のマッチング率は3割程度である。また、隼米良の庄や役場の職員は、参加者の送迎や昼食時の弁当配達も行っている⁹⁾。

第3に、参加者は農家ではなく村公設施設に宿泊し、自炊を基本とする。夏期に利用の



第3-2図 西米良村のワーキングホリデーの事業フロー

資料:西米良村資料およびヒアリングより筆者作成。

集中する村営キャンプ場のコテージの稼働率を上げることと、受入側の負担軽減を狙いと
している。宿泊料金は一部屋当たり一泊3,000円と、通常価格5,000～12,000円に比べて割
安となっている。朝晩の食事は基本的に自炊であり、昼食時には仕出し弁当（500
円程度）を利用する参加者が多い¹⁶⁾。

第4に、受入期間は原則として休暇を含めて3日間から1週間以内とする。導入当初は、
たとえば1週間の場合、4日間仕事を手伝い、残りの3日間は西米良の豊かな自然の中で休
暇を楽しむといったプログラムを組むことが予定されていた。しかし、大半の参加者は滞
在期間のほとんどを農業体験に費やし、作業そのものを休暇として楽しんでいる。

受入者と参加者は農作業や食事等を通じて交流を深め、受入先によっては歓迎会や送迎
会なども行われているようである。また、滞在中に村の行事へ加わる参加者も存在し、村
側も行事等への参加希望に対しては積極的に応えている。2000年度からはWH参加経験者
を対象にWH交流会を実施しており、毎年15人程度が訪れている。2001年度には「友の会」
が発足し（現在会員60人）、四半期に1回村広報を送付し、過去の参加者との関係継続に努
めている。

以上、西米良村のWHを事業フローとしてまとめたものが第3-2図である。

第3-4表 WH参加者数の推移
(単位:人, %, 日)

区分	参加者数		滞在日数
	うちリピーター		
1997年	29	-	153
1998年	44	3 (6.8)	177
1999年	26	4 (15.4)	130
2000年	46	10 (21.7)	227
2001年	44	11 (25.0)	226
2002年	53	7 (13.2)	519
2003年	47	8 (17.0)	179
2004年	24	-	-
累計	313	43 (13.7)	1,611

資料: 西米良村資料。

注: 2004年度の滞在日数とリピーターはデータなし。

第3-5表 西米良村におけるWH参加者の年齢・男女別累計
(単位:人, %)

区分	男	女	計
20歳未満	6 (1.9)	16 (5.1)	22 (7.1)
20～30歳	37 (11.9)	94 (30.1)	131 (42.0)
30～40歳	20 (6.4)	21 (6.7)	41 (13.1)
40～50歳	8 (2.6)	17 (5.4)	25 (8.0)
50～60歳	12 (3.8)	36 (11.5)	48 (15.4)
60～70歳	12 (3.8)	21 (6.7)	33 (10.6)
70歳以上	4 (1.3)	1 (0.3)	5 (1.6)
不明	4 (1.3)	3 (1.0)	7 (2.2)
計	103 (33.0)	209 (67.0)	312 (100.0)

資料: 西米良村資料。

注: 2005年3月現在。

第3-6表 地域別参加者数(累計)
(単位:人, %)

区 分	参加者数
宮崎県内	145 (46.5)
九州・沖縄	72 (23.1)
関東	37 (11.9)
近畿	29 (9.3)
北海道	8 (2.6)
中国・四国	8 (2.6)
東海	6 (1.9)
東北	4 (1.3)
甲信越	2 (0.6)
北陸	1 (0.3)
計	312 (100.0)

資料: 西米良村資料。

注: 2005年3月現在。

第3-7表 職業別参加者数
(単位:人, %)

区 分	参加者数
公務員	38 (13.1)
団体職員	7 (2.4)
会社員	57 (19.7)
自営業	7 (2.4)
教職	1 (0.3)
学生	65 (22.5)
主婦	35 (12.1)
フリーター	10 (3.5)
無職	69 (23.9)
計	289 (100.0)

資料: 西米良村資料。

注: 2004年3月現在。

第3-8表 受入農家別にみる受入人数

(単位:人, %)

区 分	1997年	1998年	1999年	2000年	2001年	2002年	2003年	2004年	総計
柚子加工会社(A社)	15	9	12	25	25	36	21	10	153 (43.6)
施設花き農家(B氏)	7	14	11	18	13	11	10	18	102 (29.1)
施設花き農家(C氏)		4	2	3		6	15		30 (8.5)
柚子農家(D氏)	4	13		5	3	2		2	29 (8.3)
施設花き農家(E氏)	1	3	1	4	4	6	5	1	25 (7.1)
施設花き農家(F氏)		1			3	2	2		8 (2.3)
施設花き農家(G氏)				1				2	3 (0.9)
柚子農家(H氏)	1								1 (0.3)
計	28	44	26	56	48	63	53	33	351 (100.0)

資料:西米良村資料。

注:2005年3月現在。

3) WHの実績

今日に至るまでの西米良村におけるWHの実績は、2004年度末時点で延べ参加者313名、平均滞在日数5.1日である(第3-4表)。1999年度と2004年度は台風の影響で参加が伸び悩んだが、それ以外の年は50人程度を受け入れている。参加者の男女比率は1:2と女性の割合が高く、実に全体の4割以上が30代以下の若い女性である(第3-5表)。地域別にみると、半数弱が宮崎県内から、7割が九州地域からの参加者である(第3-6表)。関東圏と近畿圏からの参加者もそれぞれ1割程度を占めている。リピーター数は延べ43人である。職業別にみると、定職に就いている人が4割弱、就いていない人(学生、主婦、フリーター、無職)が6割強を占める(第3-7表)。

WH受入者の状況をみると、今日までに計8カ所が参加者を受け入れてきた(第3-8表)。その内訳は、柚子加工会社A社、花き生産農家5戸、柚子生産農家2戸である。毎年コンスタントにWHを受け入れてきたのはA社、B氏、E氏の3カ所であるが、その中でも中心的な存在がA社とB氏であり、両者で参加者全体の7割を受け入れてきた。

4) 受入側のWHへの評価

以下では、受入者へのヒアリングを元に、受入農家等のWHへの評価について検討する。ヒアリング内容をまとめたものが第3-9表である。

(i) A社(柚子加工会社)

従来より西米良村では農家各戸に柚子の木が栽培されていた。それを村が地域の特産物として指定し、生産振興を始めたのが1971年である。当時役場に勤めていたX氏(現A社社長)が、それまで思い描いてきた商業活動への希望を胸に役場を退職し、柚子加工メーカーであるA社を立ち上げたのが75年のことである。加工、販売、営業などの経験は全くなかったものの、X氏は持ち前のバイタリティを生かして経営を展開し、A社を村有数の企業に育て上げた。現在、村内で生産される柚子は、生果用が農協に、加工用がA社にそれぞれ出荷されている。A社の農家からの買入価格は、村、農協、A社の協議により決定されており、2004年度は110円/kgであった。X氏によると、この価格は国内でも最高水準であるという。A社では村内産の加工用柚子を全量受け入れる体制を整備しており、原料

第3-9表 西米良村における受入農家の概況

区 分	A社	B氏	E氏	F氏	G氏
作目の構成	柚子加工会社	花き(パンジー、ビオラ)	稲+花き(パンジー、ビオラ、ルピナス)	花き(パンジー、ビオラ、ホオズキ)、デルフィニウム	花き(ラナンキュラス、パンジー、ビオラ、葉ボタン)
農地面積		ハウス25a	田24a、畑10a、柚子10a、ハウス28a	ハウス30a	ハウス20a
通常労働力(WH以外)	家族6人+常勤8人+臨時雇用(10人程度)	世帯主+祖母+常勤雇用(3, 4人)	夫婦+息子+臨時雇用(延べ30人)	夫婦+長男+臨時雇用(WHが確保できない場合)	夫婦+臨時雇用(2人)
WH受入延べ人数(2005年3月現在)	153人	102人	25人	8人	3人
WH参加者にさせる作業	皮むき、しぼり、商品へのシール貼り	農作業全般(土詰め、出荷作業など)	鉢あげ	植付・鉢あげ	鉢あげ
農作業で気をつけること	単純作業をさせる/製造面はさせない(衛生管理上)	特になし	特になし	農薬、機械作業はさせない	特になし
労働力としての評価	単純作業は任せられる/雇用労働力には及ばない	雇用ほどではないが、そこそこ役に立つ	十分役に立つ	雇用と遜色ない	雇用には劣る
WHの効果	交流面/参加者が喜んでくれる	交流によるリフレッシュ/結婚		リピーターが来る	労力補完/若い人との交流
WHの問題点	仕事を教える手間がかかる	特になし	受入を断る場合がある/同じ作業ばかりさせるのは気が引ける	時期が合わなくて断ることがある/仕事内容で断る場合もある	農作業スケジュールが直前にならないと決まらないので受入が困難
WHへの意見	教える手間がかかり本来会社がやるべき事業ではない/村全体への経済効果は微々たるもの/若い女性が参加する意義は大きい	民泊ない方が楽	民泊を希望する参加者は少ない/コテージが満員なら自宅に泊めてもよい/申し込みは多いが受入先は少ない	コテージに泊まる参加者が寂しそう/受入農家は皆既婚者のため嫁対策にはならない/民泊を希望する参加者は少ない	参加者をもてなせていない
今後のWH受入の意向	現状維持(頼まれれば受け入れる)	人数を増やしたい(新規作物導入のため)	人数を増やしたい(新規作物導入のため)	人数を増やしたい	時期さえ合えば年間10名程度受入可能
他の取組	来る人のためのWHとして割り切って受け入れている	特になし	体験学習受入	研修生受入	特になし

資料:ヒアリング調査より作成。

が不足する際には近隣の他地域から仕入れている。A社の生産する柚子加工品には、胡椒、味噌、ジャム、菓子類、茶などがある。

現在の労働力についてみると、X氏およびその家族(妻、息子2名、娘1名、長男妻)の6名が経営の中核を担い、その他に常勤で8名を雇用している。毎年8月から12月の繁忙期には10名程度をパートで雇用している。

A社では1997年のWH試行時から毎年コンスタントに参加者を受け入れており、今日までの延べ受入者は計153人である。これはWH参加者全体の4割強を占める。受入期間は主に8月から12月であり、手作業による柚子の皮むきやしぼり作業、製品へのシール貼り、キャップシールの取り付けなどを参加者に行わせている。

「柚子加工製品を生産するという性格上、素人にすぐに任せられる労働は少なく、単純作業とはいえ一定程度の技術をきちんと教える必要がある。それに費やされる時間やコストを考えると、労力補完という面を考慮しても、WHを受け入れる必要性はそれほど高くない。高齢の熟練労働力を雇用する方が経営にとってはプラスである。」とX氏は述べていた。にもかかわらず、多数のWH参加者を毎年受け入れる背景には、X氏およびA社の村内におけるポジションが関わっている。1997年当時、X氏は村商工会会長を務めており、

さらにA社は嵯米良の庄の出資者の1人でもあった。村活性化方策の切り札ともいえるWHに全面的に協力すべき立場にあったことが、A社がWH参加者を受け入れている最大の要因である。

もちろん、X氏個人はWHに対して一概に否定的な見方をしていない。村外からやって来る若者と交流することにより、村人も参加者も元気になるという効果はとても大きいと指摘している。単純作業面における労力補完としても一定の評価を与えている。

A社としての今後の受入方針は、「これまで通り無理をせず、自然体で受け入れる」というものであった。A社の経営にとってWH参加者はそれほど必要性は高くないが、村の重要な取組である以上、受入協力を維持するというスタンスである。ただ、これ以上受入人数を増やすことは難しいと思われた。

(ii) B氏(施設花き)

B氏は認定農業者であり、パンジーとピオラを主作目とする花き農家である。以前の主作目は柚子であったが、その後、椎茸、肉牛と変遷し、今日の花きに至っている。村の花き部会長の経験もある。農業労働力はB氏本人(40代)と祖母に加えて常勤雇用3~4名である。

前述のようにB氏はA社についてWHの受入人数が102人と多く、全体の3割を占める。B氏はWHに対してかなり好意的であり、試行時より毎年参加者を受け入れてきた。受入時期は労働力の不足する夏期が中心である。B氏がWHに取り組んだ理由は、労働力不足の解消と本人のリフレッシュを同時に図れることであった。参加者には鉢上げにおける土詰め作業、出荷作業などの作業を行わせている。WH参加者については、雇用に比較すれば労働力の質の面で若干劣るものの、その分を「交流の効果」が十分カバーしていると評価している。ちなみにB氏の妻は、WHを通じて西米良村に定住したIターン者である。

B氏は新規の作目展開としてカラーピーマンの導入を構想しており、新たに必要となる労働力をWHを通じて確保したいと考えている。WHは今日のB氏の経営に深くビルトインされているといえよう。

(iii) E氏(施設花き)

E氏は認定農業者であり、パンジー、ピオラ、ルピナスを主作目とする花き生産を行っている。農業労働力は、本人(50代)、妻、長男(20代)に加えパートを年間延べ30人・日雇っている。

A社、B氏ほどの人数ではないにせよ、E氏も毎年WH参加者を受け入れてきた。B氏と同様、夏期に多くの労働力を必要としており、最近では年に5人程度(1人当たり3日程度)をコンスタントに受け入れている。作業内容は、鉢上げ作業が中心である⁹⁾。

E氏の経営では、WHの受入と同時期にパートも雇っており、農繁期に不足する労働力をWHと臨時雇用によって補っている。WHについてE氏は「来てくれて助かっている」と評しており、WH参加者が補完労働力として十分役割を果たしていることが分かる。苗床

からポリポットに植え替える鉢上げ作業は、農作業の初心者でも簡単に覚えられる単純作業であり、補完労働力としてのWH参加者が行うには適当な作業といえる。ただ、作業の単純さゆえ、E氏は「同じ作業ばかりやらせて申し訳ない」と感じており、参加者に対して気を遣っている様子もうかがえる。このように単なる労働力の雇用とは異なる配慮が受入側に働いている。

高齢化によって雇用労働力確保が困難になりつつあることや、カラーピーマンの導入に伴って更に農繁期に作業が集中することなどから、B氏同様にE氏も受入人数を増やす予定である。また、夏期にキャンプ場のコテージが満室の際には自宅に参加者を宿泊させることもいとわないと述べていた。

(iv) F氏(施設花き)

F氏の経営では、パンジー、ビオラ、ホオズキといった苗物、デルフィニウム(切り花)を栽培している(認定農業者)。農業労働力は、本人(60代)、妻(50代)、長男(30代)であり、農繁期にWH参加者を確保できなかった場合にはパートを雇うことにしている。

ここ数年間は、年2~3人受け入れており、1人当たり2~3日働いてもらっている。労働内容はデルフィニウムの植え付け作業やパンジーの移植作業である。F氏は、WH参加者が労働の質の面で雇用と遜色なく、農作業を教える手間もほとんどかからないと積極的な評価を与えている。参加者の希望する訪問時期と農繁期が一致さえすればできるだけWHを受け入れるが、時期が合わない時には臨時雇用で対応している。時期が合わない場合には受入を断わらざるを得ず、心を痛めていた様子であった。また、「つまらない作業ばかりやらせるわけにはいかない」という理由から受入を断るケースもあるという。

農繁期に家族労働力だけでは足りなくなることから、F氏は今後もWHを積極的に受け入れたいとの意向を持っていた。農繁期におけるマッチング問題さえクリアできれば、今まで以上に受入人数を増やすことは可能とのことであった。

(v) G氏(施設花き)

G氏は、パンジー、ビオラ、ラナンキュラス等の苗物を主作目とする花き農家である(認定農業者)。農業労働力については、本人(50代)、妻(50代)、に加えパートを2名雇っており、この体制で労働力は十分間に合っている。

G氏はこれまでに3名のWH参加者を受け入れた。いずれのケースも(株)米良の庄からの依頼があって受け入れたものである。参加者には夏期農繁期の植え替え作業を手伝ってもらった。雇用に比べると若干劣るものの、一生懸命働く参加者は十分役に立つという。参加者とは楽しんで交流しており、WHそのものに対する評価は高い。また、参加者をもてなしたいとの気持ちを持っているが、実際にうまくもてなすことは難しく、参加者に対して申し訳ないと感じている面もある。

G氏は、時期さえ合えば参加者を積極的に受け入れていきたいと考えている。ただ、受入時期となる農繁期が流動的に変化するため、直前にならないと予定が立たないことが参

加者とのマッチングを難しくしている。

(vi) WH受入側の課題

以上を小括しよう。まず、調査対象の労働力についてみると、5カ所全てが雇用を導入している。このうち常勤で雇用しているのがA社とB氏、臨時で雇用しているのがE氏、F氏（WH参加者を確保できない場合）、G氏である。彼らが補完労働力としてWH参加者を受け入れる背景には、家族労働力だけでは経営が立ちゆかないという事情がある。今日の西米良村では雇用労働力給源すら枯渇しつつあり、その分をWHによってカバーしているともいえよう。

参加者に行わせる作業は鉢あげ作業等の単純軽作業が中心で、経営者が行う作業と作業内容を分けている経営もある。参加者に過重な負担をかけまいとする農家等の配慮がある一方で、短い受入期間内に参加者が熟練作業を習得するのは難しいという事情がある。受入者は単純軽作業をこなす労働力として一定の評価を参加者に対して与えているが、作業効率が雇用労働者に比べ劣ると評している受入者も存在する。農産加工を行うA社では、単純作業とはいえ一定の技術習得が必要であるため、技術を教えるのに手間を要する。そのためA社では労働力としての評価が他の受入先より低い。

一方、表には示していないが報酬金額については回答者全員が適当と答えており、WH受入に伴う経済負担は、受入側の大きな問題とはなっていなかった。報酬額が県の最低賃金をベースに算出されており、全くの素人が行う軽作業労働力の報酬額として必ずしも低い水準ではないものの、農家側がWH参加者の労働力に対して一定程度評価しているためと考えられる。

WHの問題点については、単調な作業を参加者にしてもらうのが心苦しいといった回答や、時期が合わずに受入を断ることがあるといった回答が寄せられた。WHの受入可否の決定に際しては受入側の都合が優先されているものの、一部には、参加希望者の期待に十分応えきれない現状について懸念する声も聞かれた。

今後の受入については、A社以外が積極的に増やすとしている。役場担当者の話によれば、西米良村におけるWH年間受入人数の上限は50人程度とのことであった。しかし、受入農家に対するヒアリングの結果から、参加希望者と受入側との的確なマッチングが行われれば、受入農家の数を増やさずとも1～2割程度の受入人数の拡大は可能との感触を得た。ただ、受入先最大手であるA社がやや懐疑的にWHを受け止めていること、受入人数第3位であったC氏が村外に移転したこと、花き生産農家の大半がすでにWHの受入先となっており新規の受入者発掘が見込めないこと等に鑑みると、今後劇的に受入人数が増えるとは考えにくい。

5) WHが地域に与えた影響

次に、西米良村のWHが地域に与えた影響を、①農業面、②地域経済面、③社会・生活面から考察しよう。

第1の農業面についてみると、参加者は受入先において補完労働力として一定の働きをしており、経営にビルトインされている農家も存在した。雇用労働力に若干劣るものの、WH参加者は西米良村の農業に対して少なからぬ貢献をしているといっていよい。ただ、WHの労働力を見込んで経営規模を拡大した農家はこれまでのところ存在していない。そうした意向を持っている農家もいるが、それが可能となるかどうかはマッチング問題の解決にかかっている。また、農繁期である夏期は一般旅行者によるキャンプ場利用が特に増える時期に重なり、参加者の受入を増やすためには宿泊場所の確保も課題となる。

第2に、地域経済面の影響はどうであろうか。参加者が宿泊することによってキャンプ場コテージの稼働率は確かに上がったものの、村全体に対する経済効果はそれほどないのが実情である。1997年のWH創設以来、全ての参加者がコテージに宿泊したと仮定しても、その額は7年間で500万円弱、1年間に換算すれば100万円にも満たない。しかし、①参加者は村内滞在中に様々な場面でお金を支払う機会があること（昼の弁当代、飲食代など）、②WH導入後半年でマスメディアに50回以上登場し、宣伝費用に換算すれば5,000万円以上に相当するとの試算があること[※]、③WH受入後農産物を購入してくれる参加者がかなり存在し新たな販路拡大に役立っていることを含めて考えれば、WH実施による地域経済への効果は決して小さくはない。

第3に、交流による社会・生活面への効果である。参加者と受入者との交流の深化がWHの大きな目的であり効果であることはいうまでもない。過疎化・高齢化が進み、山奥という立地条件も相まって西米良という地域に自信を持てなかった住民達が、自信と誇りを取り戻し「心の過疎」から解き放たれるための手段がこのWHである。村発行の冊子において関係者はいみじくも述べている。「本当に人が来たことに、驚き、参加者との、交流を深める中で、西米良の良さや誇りを実感し、西米良そのものが都会の人を惹き付ける魅力を持っていることを認識しました」と。ヒアリングで出会った役場関係者や受入農家は皆一様に「こんな不便な山奥に都会から人が来るとは思わなかった」と述べており、今でこそ全国的に有名な西米良村のWHは不安を抱えた中でスタートしたのである。農家にとってはただのルーチンワークであり必ずしも面白いばかりとはいえない農作業に対して参加者は興味を示し一生懸命働く。娯楽施設がほとんどない村での生活を満喫し、村の雄大な自然環境に感動を覚える参加者達。そして彼らの新鮮な振る舞いやもたらされる情報に刺激を受ける受入者達。WHを通して行われる交流は、参加者と受入者双方が「足りないモ

第3-10表 西米良村におけるWH関連の受賞歴

区 分	名 称	受賞対象
2000年度	過疎地域自立活性化優良事例国土庁長官賞	西米良村
	宮崎日々新聞社会賞	みどりグループ
2001年度	宮崎日々新聞農業技術賞	西米良村花き部会
	日本観光協会優秀観光地づくり賞	西米良村
2003年度	観光カリスマ百選に政府認定	西米良村長
	宮崎県地域づくり顕彰	A社
2004年度	第2回オーライ！ニッポン大賞審査委員長賞	西米良村

資料：西米良村資料。

ノ」を補完しあい絆を構築する過程とも言い換えることができる。その象徴として、受入農家の男性と参加者の女性との結婚を挙げることができる。

最後に、WHへの取組による受賞歴を掲げておく（第3-10表）。小さな山村が短期間でこれだけの賞をもらい高い評価を外部から受けたことが、村民に自信を与えたことは想像に難くない。

6) 今後の課題と展望

まず、(株)米良の庄や役場といったWHの運営者側の意向を確認する。彼らへのヒアリングによれば、当面は現状を維持したいとの回答であった。運営者側の考える村内の受入人数の上限は50人であり、ここ数年の参加者数はそのラインに達している。受入先に関わる問題とマッチングに関わる問題がこの上限を規定している。

前者は、WH参加者を受け入れたいあるいは受け入れる余裕のある農家等がそもそも少ないといった問題である。県の最低賃金水準とはいえ報酬を支払うタイプのWHを受け入れるには、①経営を維持する労力が自家労働力だけでは不足していること、②最低賃金を支払って人を雇うだけの経営余力があること、の2つを満たす必要がある。そうした要件を満たすのは比較的大規模な専門的経営、西米良村では一部の花き専門農家等に限られる。

続いて後者のマッチングに関わる問題について述べよう。西米良村では時期を限定してWHを募集するのではなく、参加者からの申し込みを待つという形をとっており、参加希望の連絡を受けてから受入先とのマッチング作業に入る。この場合、通年的に仕事を用意できるA社のような存在は別として、一般的な花き農家とのマッチングは極めて難しい。花き農家がWHによる単純作業を必要となる農繁期は限られており、またその時期も気候変動によって流動することが多いからである。

こうした問題点を多少なりとも解消するために、受入態勢の強化を目的として取り組まれているのが、近隣市町村と広域的に取り組んでいる「九州中央山地型ワーキングホリデー」である。西米良村の制度を九州中央山地の7ヵ町村で連携し広域で参加者の受入を行うもので、観光推進協議会でホームページを立ち上げPRを行っている。西米良村だけでは受入需要が足りない時期に他の町村で受入を肩代わりしてもらい、参加者の要望に応えやすくするための取組である。ただ、西米良村ほど積極的に取り組む町村は少なく、受入実績もそれほど伸びていないとの話であった。

(2)長野県飯田市における取組

筆者は2004年7月および2005年3月に飯田市を訪問し、市役所、受入農家5戸、WHがきっかけで飯田市への定住・就農を果たした3戸に対してヒアリング調査を行った。以下では、調査時に入手した資料、ヒアリング内容を元に、飯田市で取り組まれているWHについて検討を進める。

1)地域概況

長野県最南部下伊那郡の中心都市である人口約10万7千人の飯田市は、四季に富み、豊かな自然と優れた景観に恵まれた立地にある（第3-3図）。天竜川が市の中心を貫き、東に南アルプスと伊那山脈、西に中央アルプスがそびえている。天竜川沿いには水田、河岸段丘上には畑地や果樹園が散在し、周囲および南部高原地帯には山林が広がっている（耕地面積率9.7％，林野率71.4％）。飯田市は古くから商工業を中心に交易の面でも栄えた地域である。市内を通る現国道153号線は江戸時代より三州街道（飯田街道）と呼ばれ、信州と三河を結ぶ通商の道として盛んに利用された道であった。飯田市中心街をはじめ国道に面する地域は古くから宿場町として栄えていた。現在、市内には中央自動車道とJR飯田線が通っている。東京からは高速道路を利用し約3時間、名古屋からは1時間半程度である。

戦前より軍需産業が立地していた飯田市は、戦後特に精密電子工業をはじめとした製造業が発達し、農・工・商のバランスがとれた田園工業都市として発展した。農業については、ほぼ全ての農作物が栽培可能な気候を利用し多様な品目が生産されており、りんご、柿、なし、小梅、ブルーベリーなどの果樹、キュウリ、アスパラなどの野菜、シクラメンなどの花き、肉牛、酪農など畜産が盛んである。ただ、農家率、農業就業人口、経営耕地総面積等は軒並み減少傾向にあり（第3-11表）、これに伴って農業粗生産額も減少している。特に山間部を中心に過疎化・高齢化が進行しており、果樹部門を中心に農業労働力不足も深刻化している。



第 3-3 図 飯田市の位置

第3-11表 飯田市農業の概要

区 分	1985年	1990年	1995年	2000年
総人口	106,732	106,495	106,774	107,378
総世帯数	30,541	31,690	33,573	35,469
農家率(%)	23.2	19.6	17.0	14.6
農業就業人口(販売農家) ⁽¹⁾ (人)	12,321	8,676	7,307	6,370
農業就業人口／総人口(%)	11.5	8.1	6.8	5.9
基幹的農業従事者数 ⁽²⁾ (人)	7,788	6,901	6,318	4,456
農家				
総農家数(戸)	7,095	6,205	5,717	5,165
販売農家率(%)	-	67.4	63.9	60.8
専業農家率(販売農家) ⁽¹⁾ (%)	14.3	17.7	17.9	17.5
第1種兼業農家率(販売農家) ⁽¹⁾ (%)	18.5	22.3	24.1	18.7
第2種兼業農家率(販売農家) ⁽¹⁾ (%)	67.2	60.0	58.0	63.8
経営耕地規模別農家率(総農家) ⁽³⁾ (%)				
0.3ha未満(自給的農家)	35.4	33.4	37.4	40.4
0.3～0.5ha	21.3	23.4	21.1	21.7
0.5～1.0ha	31.1	31.2	29.7	27.0
1.0～1.5ha	9.5	9.6	8.3	7.7
1.5～2.0ha	1.7	1.9	2.1	1.9
2.0～3.0ha	0.7	0.5	0.9	1.0
3.0～5.0ha	0.1	0.2	0.4	0.3
5.0ha以上	0.1	0.0	0.1	0.1
経営耕地面積(販売農家) ⁽¹⁾				
経営耕地総面積(ha)	3,704	2,905	2,586	2,199
一戸当たり耕地面積(a)	52	69	71	70
水田率(%)	39.5	38.2	36.2	38.1
畑地率(%)	20.3	19.2	23.1	22.8
樹園地率(%)	40.3	42.6	40.8	39.1

資料：農(林)業センサス各年度版より作成。

注：1) 1985年は総農家ベース。

2) 2000年は販売農家ベース。

3) 1990年以降は分母の総農家戸数から例外農家を除く。

2) WHに取り組んだ背景と仕組み

(i) 背景

飯田市がWHに取り組む背景には、都市住民側の要因と農村側の要因の2つがある。前者についてみると、都市住民の田舎暮らし志向や就農志向の高まりから、市に相談に訪れる新規就農希望者の増加が見られた。希望者の中には憧れだけで訪れる者も多く、実際の農業を学んだり体験したりする機会が乏しい者も多く含まれていた。市としては、定住対策の一環として、彼らに対する農業研修の機会を用意する必要があった。一方後者については、担い手不足や離農者の急増に伴う地域農業の存続の危機、果樹農家を中心に深刻化しつつある季節的労働力不足といった事情があった。以上を背景に、観光目的ではなく、「田舎暮らしを経験したい」あるいは「就農の準備をしたい」といった、地域に深く関わりたいと望む人々をターゲットとした事業展開を目指すこととなった。これは、都市からいわゆる農業サポーターを募集することに他ならない。

(ii) WHの事業創設過程

1998年度に始まった飯田市のWHは、同市で取り組まれている滞在型GTの一環として位置づけられている。滞在型GTの取組の1つとして特に著名なのは、同市の南信州観光公社が企画運営する体験教育旅行である。これまでも山間部を中心に都市住民との盛んな交流

の経験を持つ同市では、昨今の「ホンモノ体験志向」⁷⁾の高まりを背景に、96年度より中高生を対象とした修学旅行、総合学習プログラム＝体験教育旅行に取り組んでいる。「人との交流」をキーワードにした200以上の体験プログラムの指導は、農家をはじめとする市民インストラクターが担い、「ホンモノ」の感動を参加者に与えることを目的としている。現在、参加者は年間2万人を優に超えている。様々な農業・農村体験メニューが組み込まれる中で、参加者側から農家への民泊希望が出されるようになってきたため、98年度より農家民泊を開始するに至った。現在の受入農家は南信州全域で約400戸に及ぶ。翌年に開始されたWHもその仕組みは異なるが、同様に農家民泊を採用している。

飯田市における農家民泊の取組は、観光分野への対応としての体験教育旅行と、農業分野への対応としてのWHの2つの事業の流れの中で、ほぼ同時期に導入されることになった。市役所は農家に対して選択可能な2つのメニューを同時に示した。用意された体験と宿泊・食事を参加者に提供し、それに対する対価を受け取る方式を望む農家は、体験教育旅行の受入を希望した。一方で参加者に農業労働力を提供してもらう代わりに宿泊や食事を提供する方式を望む農家はWHを選択した。当初はどちらか一方を行う農家が大半であったが、今日では農作業の進捗状況等によってフレキシブルにいずれも取り組む農家が多く、WHを実施する87戸のうち、60戸前後が体験教育旅行生も受け入れている。商業観光課ベースで取り組まれてきた体験教育旅行と農業課ベースで取り組まれてきたWHは、同じ農家民泊という仕組みを利用しながら、それぞれの目的が競合しない形で巧妙なすみ分けを実現しているといえよう。

ちなみに市役所は、WH計画段階で参加者の多くを年配者が占めると見込んでいた。もっと言えば、参加者が来ることについてささげ懐疑的であったが、西米良村のケースと同様、結果として多数の若年層がWHに参加した。この点は後に述べる。

なお、飯田市におけるGTの取組一覧を第3-12表に示した。

(iii) WHの仕組み

飯田市は、WHを【「農業や農村に関心を持ち真剣に農業に取り組みたい」、「就農を考えているが何も分からない」といった都市住民と、「農繁期の手助けをして欲しい」農家が結びつき、双方がお互いの足りないところを補い合う「パートナーシップ事業」】と位置付けている。この方針に基づき、市は、WHの主要目的が農家の労働力補完であり観光とは一線を画すことを、受入農家と参加者に対して明確に伝えている。WHのために農家に仕事を作らせることはせず、農家が補完労働力を必要としない時期はWHを実施しないことを基本としている。

パートナーシップという対等関係＝互いに持てるものを提供するという考え方から、飯田市のWHでは、農家は宿泊と食事を、参加者は労働力を提供することになっており、金銭の授受を行わない仕組みとなっている。参加者は農作業や農村生活を体験する中で、農業技術や就農、定住に関する情報等を農家から直接得ることができ、農家も参加者から様々な有益な情報を聞くことができる。参加者は「お客様」ではなく家族同様に位置づけら

第3-12表 長野県飯田市におけるGT事業の概要

						
農業・農村をベースに農山村地域の交流・半定住・定住人口増加、さらに波及効果を地域全体に広げていく『地域経済戦略』として位置づけ、中山間地域を逆手にとり産土(自然・人・文化)を活かしながら活力を増進させる多様な産業の振興を図り、複合的に健全な農業農村社会の構築を目指す農業・農村振興を目的とする						
基本的考え方		●都市と農村の自主的相互支援関係の確立を図る交流促進 ●地域オリジナルを守り、地域の再発見を促す関係構築 ●農産・農産物・知恵・温かい心をお裾分けする交流 ●都市と農村の対流・共生による人の循環促進				
事業名		各事業のねらいと目標				
主に対象		訪問客へのねらい				
推進主体		訪問客へのねらい				
体験教育旅行	中学生・高校生	南信州観光公社	総合的学習・環境学習の提案 ・子供たちの生きる力を育む旅の提案 ・第2のふるさとづくり ・次世代の消費者づくり ・次の旅の目的づくり	農家の誇り、生き様の再確認 ・様々な生命を育む農業の意義の再発見 ・農業の多角化(複合経営のすすめ) ・地域資源の再発掘と活用 ・農村地域の開放による担い手確保 ・山林・田畑の荒廃化防止 ・情報受発信による経営感覚向上 ・起業のすすめ(法人化) ・農業種連携による活性化	【体験メニュー】 約200プログラム 自然体験(5)・アドベンチャー(1)・環境学習(1)・味覚体験(1)・農山村交流(5) 農林業体験(10)・ボランティア(6)・スポーツ(10)・伝統・クラフト(16) 歴史探訪(17)・地産地消(17) ※滞在のホームステイ受入農家約400戸(内、郡内町村約100戸)	【体験メニュー】 約200プログラム 自然体験(5)・アドベンチャー(1)・環境学習(1)・味覚体験(1)・農山村交流(5) 農林業体験(10)・ボランティア(6)・スポーツ(10)・伝統・クラフト(16) 歴史探訪(17)・地産地消(17) ※滞在のホームステイ受入農家約400戸(内、郡内町村約100戸)
	小学生3年～	南信州観光公社	食と農の接近(農業・農村の理解) ・産直拡大、消費者づくり ・飯田ブランド産品啓蒙	農家の誇り、生き様の再確認 ・様々な生命を育む農業の意義の再発見 ・農業の多角化(複合経営のすすめ) ・地域資源の再発掘と活用 ・農村地域の開放による担い手確保 ・山林・田畑の荒廃化防止 ・情報受発信による経営感覚向上 ・起業のすすめ(法人化) ・農業種連携による活性化	【体験メニュー】 約200プログラム 自然体験(5)・アドベンチャー(1)・環境学習(1)・味覚体験(1)・農山村交流(5) 農林業体験(10)・ボランティア(6)・スポーツ(10)・伝統・クラフト(16) 歴史探訪(17)・地産地消(17) ※滞在のホームステイ受入農家約400戸(内、郡内町村約100戸)	【体験メニュー】 約200プログラム 自然体験(5)・アドベンチャー(1)・環境学習(1)・味覚体験(1)・農山村交流(5) 農林業体験(10)・ボランティア(6)・スポーツ(10)・伝統・クラフト(16) 歴史探訪(17)・地産地消(17) ※滞在のホームステイ受入農家約400戸(内、郡内町村約100戸)
	一般・親子・グループ等	農政・観光両課で実施 南信州観光公社	食と農の接近(農業・農村の理解) ・産直拡大、消費者づくり ・飯田ブランド産品啓蒙	農家の誇り、生き様の再確認 ・様々な生命を育む農業の意義の再発見 ・農業の多角化(複合経営のすすめ) ・地域資源の再発掘と活用 ・農村地域の開放による担い手確保 ・山林・田畑の荒廃化防止 ・情報受発信による経営感覚向上 ・起業のすすめ(法人化) ・農業種連携による活性化	【体験メニュー】 約200プログラム 自然体験(5)・アドベンチャー(1)・環境学習(1)・味覚体験(1)・農山村交流(5) 農林業体験(10)・ボランティア(6)・スポーツ(10)・伝統・クラフト(16) 歴史探訪(17)・地産地消(17) ※滞在のホームステイ受入農家約400戸(内、郡内町村約100戸)	【体験メニュー】 約200プログラム 自然体験(5)・アドベンチャー(1)・環境学習(1)・味覚体験(1)・農山村交流(5) 農林業体験(10)・ボランティア(6)・スポーツ(10)・伝統・クラフト(16) 歴史探訪(17)・地産地消(17) ※滞在のホームステイ受入農家約400戸(内、郡内町村約100戸)
	小学校	小学校	南信州観光公社	都市小学校の学友林づくり 自然・文化を活用した総合教育の実践	農家の誇り、生き様の再確認 ・様々な生命を育む農業の意義の再発見 ・農業の多角化(複合経営のすすめ) ・地域資源の再発掘と活用 ・農村地域の開放による担い手確保 ・山林・田畑の荒廃化防止 ・情報受発信による経営感覚向上 ・起業のすすめ(法人化) ・農業種連携による活性化	【体験メニュー】 約200プログラム 自然体験(5)・アドベンチャー(1)・環境学習(1)・味覚体験(1)・農山村交流(5) 農林業体験(10)・ボランティア(6)・スポーツ(10)・伝統・クラフト(16) 歴史探訪(17)・地産地消(17) ※滞在のホームステイ受入農家約400戸(内、郡内町村約100戸)
環境事業	一般16歳以上	農政課	新緑就農・田舎探訪(定住先) ・農作業を通じた「やゆよ体験」 ・食と農の接近(農業・農村の理解) ・産直拡大、消費者づくり ・飯田ブランド産品啓蒙 ・飯田ファンの創出	農家の誇り、生き様の再確認 ・様々な生命を育む農業の意義の再発見 ・農業の多角化(複合経営のすすめ) ・地域資源の再発掘と活用 ・農村地域の開放による担い手確保 ・山林・田畑の荒廃化防止 ・情報受発信による経営感覚向上 ・起業のすすめ(法人化) ・農業種連携による活性化	【体験メニュー】 約200プログラム 自然体験(5)・アドベンチャー(1)・環境学習(1)・味覚体験(1)・農山村交流(5) 農林業体験(10)・ボランティア(6)・スポーツ(10)・伝統・クラフト(16) 歴史探訪(17)・地産地消(17) ※滞在のホームステイ受入農家約400戸(内、郡内町村約100戸)	【体験メニュー】 約200プログラム 自然体験(5)・アドベンチャー(1)・環境学習(1)・味覚体験(1)・農山村交流(5) 農林業体験(10)・ボランティア(6)・スポーツ(10)・伝統・クラフト(16) 歴史探訪(17)・地産地消(17) ※滞在のホームステイ受入農家約400戸(内、郡内町村約100戸)
	教師・大中学生・一般社会人	農政課	総合的学習づくりの人材育成 ・体験活動指導者養成 ・地域づくりリーダー育成 ・ツーリズムコミュニケーションター養成	農家の誇り、生き様の再確認 ・様々な生命を育む農業の意義の再発見 ・農業の多角化(複合経営のすすめ) ・地域資源の再発掘と活用 ・農村地域の開放による担い手確保 ・山林・田畑の荒廃化防止 ・情報受発信による経営感覚向上 ・起業のすすめ(法人化) ・農業種連携による活性化	【体験メニュー】 約200プログラム 自然体験(5)・アドベンチャー(1)・環境学習(1)・味覚体験(1)・農山村交流(5) 農林業体験(10)・ボランティア(6)・スポーツ(10)・伝統・クラフト(16) 歴史探訪(17)・地産地消(17) ※滞在のホームステイ受入農家約400戸(内、郡内町村約100戸)	【体験メニュー】 約200プログラム 自然体験(5)・アドベンチャー(1)・環境学習(1)・味覚体験(1)・農山村交流(5) 農林業体験(10)・ボランティア(6)・スポーツ(10)・伝統・クラフト(16) 歴史探訪(17)・地産地消(17) ※滞在のホームステイ受入農家約400戸(内、郡内町村約100戸)

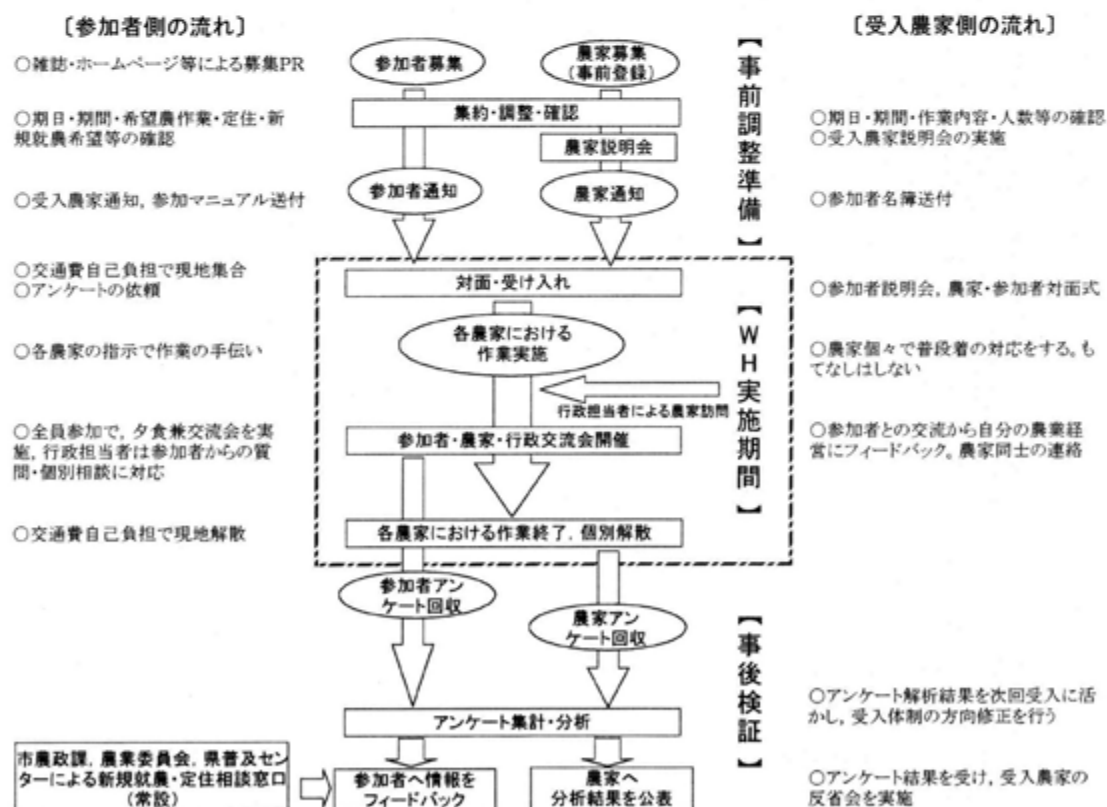
資料：飯田市農業課資料。

注：飯田市では2005年4月に組織再編があり、当時の農政課は農業課に改組された。表は2004年当時の資料のため、農政課と表記。

れており、受入農家はあえてもてなすことをせず、農家の日常生活を体験してもらう。滞在日数は3泊4日を標準としているが[※]、農家との個別調整により一定程度の長期滞在も可能である。全参加者にはボランティア保険（年間掛け金300円）への加入が義務づけられている。

飯田市のWHは、基本的に年間を通じて参加者を随時受け付ける一方、春（ゴールデンウィーク期間）と秋（文化の日、勤労感謝の日付近の連休）には、イベントとして多くの参加者を募集している。イベント時の事業フローについては第3-4図、参加者マニュアルについては第3-13表にそれぞれ示した。問い合わせには電話、メール、はがき等多様な手段で応じており、参加希望者には事前に登録してもらうことを原則としている。イベント以外の時期は、市役所の担当者が参加者と農家の希望をマッチングする作業を行う。参加希望の問い合わせがあれば受入農家から、受入農家の希望があれば参加登録者からそれぞれ候補を探し、双方に実施可能か確認をとっている。

また、農家がWHの受入希望を自ら持つようになるまで、市は「待ち」の姿勢を崩さない。市は各農家へトップダウン的にWHを広めず、受入農家と参加者との関係をコーディネートするのみで、WH事務局の体制も専任でない担当者が一名張りついているに過ぎない。担当者は受入農家の状況や性格、どのような人材を欲しているのかについて毎年チェックを行い、受入農家と参加者とのマッチングに大きな役割を果たしている。また、就農



第3-4図 飯田市のワーキングホリデーの事業フロー

資料：飯田市農業課資料。

第3-13表 飯田市WHの参加者マニュアル(抄)

- ◇参加資格
「南信州ワーキングホリデーいいだ」登録申込書に偽り無く記載し、誠意を持って農家の手助けをしてくれる方で、16歳以上の農作業ができる方なら、年齢・性別を問いません。
- ◇期間
○基本的に1年を通して受入をしています、農作業がない場合は受入できません。
○滞在日数はイベント開催(春・秋)の3泊4日を標準としています、農家との個別調整で変更可能です。
○長期滞在は、概ね1ヶ月を目途として更新をお願いします。
- ◇受入農家の様子
○普段の農家の生活に入りますので、農作業時間は各農家によって異なります。
○農作業は多種にわたり、いろいろな仕事がありますが、熟練しないとできない仕事が多く、お手伝いいただく内容が限られていますので、ご容赦ください。
○夜は大変静かで川音や動物、夜鳥の声しか聞こえない地区もあります。天気であれば夜の星空は大変きれいです。
- ◇持ち物
○農作業時は、動きやすく少々汚れてもかまわない服装を各自でご用意ください。
○タオル類、シャンプー、リンス、寝間着、帽子、洗面用具等をご持参ください。
○寒暖の差が激しく、夜になると冷え込みます。一枚余分に着るものをおすすめします。
○農作業に必要な用具(手袋、長靴等)は農家で用意します。
- ◇保険
○参加者全員分ボランティア保険(1年間有効)をかけさせていただきます。以降は参加時より保険をかけさせていただきます。多の市町村や様々なボランティアでも利用できます。旅行保険ではありませんのでお気を付けください。
- ◇その他留意点
○農家が忙しいときに来ていただく援農(農業サポーター)制度ではありませんので、お客様扱いいたしません。農作業のできない方は農家に滞在できません。
○農家の普段の私生活に入っていくわけですが、食べられない物や聞きたいことは言ってください。お互いに遠慮があると、本当の交流ができず、双方が不完全燃焼でよくありません。
○食事は各農家で一緒に用意し、食べることが原則ですが、場所により集落で交流会をする地域もあります。田舎の料理と一緒に作り、覚えることをおすすめします。
○公共交通機関でお越しの皆様は、農家が最寄りの駅またはバスターミナルまで送ります。
○車でお越しの皆様は、農家が飯田インターまで先導します。事前に帰りの計画を農家とご相談ください。
○春・秋のイベント開催時に限り、農家・参加者の交流会を行います。実費(安い会費でやります)をいただきます。
○定住・就農他どのようなご相談にも応じます。事務局にお気軽にお尋ねください。

資料: 飯田市農業課資料。

や定住希望を持つ参加者に対しては、空き家や農地などの情報を積極的に提供している。

WH運営に対する助成金は、国と市が50%ずつ分担する「新規就農総合対策事業」の106万円のみであり、これはWHの事務経費として活用されている。WHはほとんどコストがかからないソフト事業といえる。

3) WHの実績

2005年2月28日時点の登録者数は参加者が932人⁹⁾、受入農家が87戸(事業開始時点13戸)となっている。実際の参加人数は、WH開始以来増加傾向にあり、近年では毎年200人を超えている(第3-14表)。参加者の大半は春と秋のイベント時に訪れており、2004年度の実績では、春104人(受入農家38戸)、秋96人(受入農家33戸)、通年94人(受入農家19戸)、合計294人(受入農家50戸)となっている。毎回の参加者に占めるリピーター率は平均6割であり、これまでに10回以上参加した人もいる。しかも、これらは市役所が直接把握している数字であり、市役所がコーディネートしているWHとは別に、プライベートで毎年のように農家を訪れ、交流している元参加者¹⁰⁾も数十人程度いると見られている。

第3-14表 WH参加者数の推移
(単位:人,日)

区分	参加者数	延べ日数
1998年	32	96
1999年	187	888
2000年	219	909
2001年	151	618
2002年	243	980
2003年	291	1,409
2004年	294	1,352
計	1,417	6,252

資料:飯田市農業課資料。
注. 2005年2月28日現在。

第3-15表 地域別参加者数(累計)
(単位:人,%)

区分	累計人数
北海道	1 (0.1)
東北	7 (0.8)
関東	495 (58.3)
信越	21 (2.5)
北陸	1 (0.1)
東海	150 (17.7)
近畿	158 (18.6)
中国	7 (0.8)
四国	2 (0.2)
九州	6 (0.7)
沖縄	1 (0.1)
計	849 (100.0)

資料:飯田市農業課資料。
注. 2004年4月現在。

第3-16表 参加者の年齢・男女別累計

区分	男		女		計
20歳未満	12	(1.4)	6	(0.7)	18 (2.1)
20～30歳	95	(11.2)	226	(26.6)	321 (37.8)
30～40歳	137	(16.1)	96	(11.3)	233 (27.4)
40～50歳	53	(6.2)	26	(3.1)	79 (9.3)
50～60歳	67	(7.9)	59	(6.9)	126 (14.8)
60～70歳	50	(5.9)	17	(2.0)	67 (7.9)
70歳以上	2	(0.2)	3	(0.4)	5 (0.6)
総計	416	(49.0)	433	(51.0)	849 (100.0)

資料:飯田市農業課資料。
注. 2004年4月現在。

第3-17表 主な作業内容別受入農家数
(単位:戸,%)

区 分	農家数(率)
果樹(りんご・なし)	53 (70.7)
果樹(かき)	33 (44.0)
野菜	10 (13.3)
酪農	5 (6.7)
稲作	2 (2.7)
菌茸類	1 (1.3)
合計	75 (100.0)

資料:飯田市農業課資料。
注. 主な作業内容は複数カウント。

第3-18表 市役所の提示するモデル作業例

作業時期	作業内容
4月初旬～5月初旬	いちご収穫
4月末～5月初旬	りんご摘花, なし花粉付け
5月初旬～5月中旬	田植, 茸菌打ち
5月中旬～6月初旬	りんご摘果
6月初旬～6月中旬	なし袋がけ
8月下旬～9月下旬	葉摘み, なし収穫
9月中旬～9月下旬	なし, りんご収穫
10月初旬～10月中旬	りんご(ふじ)収穫
10月下旬～11月初旬	干し柿(収穫・皮むき・吊し)

資料:飯田市農業課資料。

続いて市役所が把握している参加者の属性についてみよう。参加者の6割は関東地域から訪問しており、東海・近畿地域を含めると実に95%が三大都市圏からの参加である。

(第3-15表)。男女割合はほぼ1:1となっており、30代以下が参加者全体の7割強を、20代の女性が全体の4分の1を占めている(第3-16表)。西米良村のケースと同様、参加者の多くが若年層である。受入農家数の多くを果樹部門が占めており(第3-17表)、この背景には春秋のイベント開催時期が果樹部門の農繁期と重なることがある(第3-18表)。

4) 受入側のWHへの評価

以下では、受入者へのヒアリングを元に、WHへの評価について検討する。ヒアリング内容をまとめたものが第3-19表である。

(i) H氏(果樹)

H氏はりんご、なし、すもも、市田柿等を主作目として栽培し、稲作も営んでいる。近年ではタラの芽、なめこ、ブルーベリーといった作物を導入している。農業労働力は本人(40代)、妻、母親で、それだけで賄えない農繁期にWHを受け入れている。

H氏の経営におけるWH受入は1998年度の2人からスタートし、現在では、春と秋に2~3人を受け入れている。1カ月以上の長期で受け入れるケースもある。並行して体験教育旅行による修学旅行生の受入も行っている。農家民泊という形態については、国土庁(現国

第3-19表 飯田市における受入農家の概況

区 分	H氏	I氏	J氏	K氏	L氏
作目構成	果樹(りんご、なし、すもも、柿)、養鶏、タラの芽、な	酪農中心(畑60a、水田40a、搾乳牛33頭)	果樹(りんご、なし、柿)+稲作	水稲、果樹(もも、りんご、なし、柿)	酪農5頭、果樹(なし、りんご、キウイ)、水稲
家族構成	夫婦+子2+母	夫婦+息子	夫婦	夫婦+次男+両親	夫婦+両親
農業労働力	夫婦+母	夫婦+息子	夫婦	夫婦+次男(手伝い)	妻のみ
WH受入人数	春秋に2、3人、それ以外にも長期受入	春秋に2人ずつ	春秋に2人ずつが基本	100人・日	春秋に2、3人ずつ
WH受入開始の時期とそのきっかけ	モニターツアー引き受け(事業初期1998年段階から受入)	2000年秋:役所のすすめ(それまで地区内に受入農家がいなかった)	友人から話を聞いて	1999年春(WH本格開始時):市の募集に対応	2000年春から
WH参加者にさせる作業	果樹作業中心	手はけ、仔牛への給餌、糞尿処理(普段はやらない細かい作業中心)	果樹作業(摘果、受粉、収穫)、家事作業(掃除など)、その他(草集め、手植え、選定、くず処理)	果樹作業(収穫・選果・摘果)、耕種機械作業 ※秋作業(もも収穫)がメイン	搾乳、堆肥掃除、給餌、果樹作業(摘果、収穫)
農作業で気をつけること	機械作業をさせない	機械作業をさせない	事前に仕事を準備/子どもに摘果作業をさせない/機械を極力使わせない	柿の袋詰め作業だけは自分たちでやる/きちんと教える	機械作業をさせない/危険作業にも気をつかう
労働力としての評価	かなり頼りになる	そこそそ役に立つ	かなり頼りになる(補完労働力は専らWHで賄う)	とても役に立つ	ある程度役に立つ/1人で世話するのが辛い
WHの効果	まじめな参加者が多い	交流できる	やる気がある		交流できる面
WHの問題点	特になし	特になし	妻:食事面と寝具がネック	受入当初は他人を家に泊めることに抵抗あった(特に両親)→今はそうでもない、最初は自由時間がとれなくて疲れた	癒しを目的に来る人もいる(そういう人は民泊にして欲しい)
WHへの要望・感想など	最初は誰も参加しないと思っていた/長期(通年)受入OK/きちんと働く若い人に来てもらいたい	インターネットを活用すべき	自分たちの時間がとれるので夫婦(カップル)に来て欲しい/受入人数を増やしたい		きちんと働く人に来て欲しい/リピーターからは金をとっている

資料:ヒアリング調査により作成。

土交通省) U・I ターン事業によるホームステイを受け入れた経験があったため、特に問題は生じなかった。当初は市で設定したスケジュールにならい3泊4日で参加する人が多かったが、最近は長期の参加者も目立っている¹⁰⁾。H氏の経営において、WH参加者の労働力は不可欠の存在となっており、長期かつ通年の受入を進める意向である。WH参加者には、春のりんご摘果作業、秋の柿収穫作業などを中心に作業をしてもらっているが、危険度の高い機械作業はさせない。受入当初は、参加者、受入側双方に「もてなさない」ことに対するごちなさがあったが、最近ではそれもなくなりつつあり、観光気分で訪れる参加者はほとんどいない。また、就農や定住を本気で考えている参加者については、そのための情報提供を惜しまず行っている。今後も積極的にWH参加者を受け入れたいと考えており、やる気のある若者に是非参加して欲しいとの意向である。

(ii) I氏(酪農+水稻)

酪農を主体として稲作も営んでいる。農業労働力は夫婦(共に60~70代)と息子(40代)である。

WHの受入は2000年秋から開始し、それ以降、春秋それぞれ2人ずつ受け入れている。また、体験教育旅行生も受け入れている。それまでI氏の住む地区にはWHの受入農家がなく、市役所からすすめられたことが受入のきっかけになった。I氏の経営では農業大学の生徒の実習を30年前から受け入れている経験があり、他者を自分の家に宿泊させることについては特に抵抗を感じなかった。参加者には機械作業以外の牛のブラッシング、給餌、清掃作業などをさせており、普段は手が回りにくい細かい作業を行わせている。労働力としては「そこそ役に立つ」といった程度で経営面の大きなプラスになるほどの効果はないが、「新しい親戚が増えた」との回答に見られるように交流面の効果を感じている。今後とも積極的にWHを受け入れたいと考えている。

(iii) J氏(果樹+水稻)

りんご、なし、柿を栽培する果樹農家で稲作も営んでいる。農業労働力は本人と妻(共に50~60代)である。

WHは春秋それぞれ2名程度受け入れている。父母が農業からリタイアし、農繁期の労働力不足が受入の契機となった。作業内容は、機械作業を除き、春はなしの受粉、りんごの摘果、秋はりんごや柿の収穫が基本である。さらに土手の草集めの他に、障子張り、家の掃除など、生活上の仕事をしてもらうこともある。受入当初、妻は参加者を台所に入れる(=台所を見られる)ことに抵抗を示すとともに、食事にも気を遣っていたが、「ありのままに農家の生活を体験してもらう」ことを念頭に取り組むうち、徐々に慣れた。労働力については家族労働力の不足分を十分に補っていると評価している。受入上の課題は、食事面で何を食べさせれば良いか迷うことと、寝具が重いため布団の上げ下げや日干しが体に負担だという生活上のものがあ、り、後者については乾燥を布団屋に外注することで解決している。

J氏の経営は農繁期に不足する労働力をWHに頼っており、今後もWHを受け入れたいと考えている。その際、単独での参加よりむしろ夫婦やカップルでの参加を希望している。単独の場合は、プライベートの時間にある程度参加者の相手をする必要があるが、二人連れの場合は特にその必要もなくなるからである。四六時中参加者の相手をするのは、時に疲れることもあるとのことであった。

(iv) K氏(果樹+水稲)

もも、りんご、なし、柿を主体とした果樹農家であり、稲作も経営している。農業労働力は夫婦二人である(共に50代)。

K氏は、1999年のWH本格施行時に地区に先駆けて受入を行った。現在、同地区にはK氏も含めて10戸の受入農家が存在し(地区内農家数239戸)、市内で最も受入農家が集中している。K氏宅では8畳のスペースに3名までを同時に受け入れることができ、近年は年間約100人・日の受入実績がある。春秋のイベント時の受入はもちろんのこと、中には1ヵ月以上長期で受け入れるケースもある。作業内容は、ももと柿の収穫、選果作業などであるが、時にはトラクターなどで作業してもらうこともある。ただし、柿の袋詰め作業などのデリケートな作業はWH参加者にはさせない。女性の参加者には炊事作業もしてもらっている。WH参加者の作業には若干のロスはあるものの、経営維持に不可欠な存在となっている。

受入当初は、他人を家に泊めることへの抵抗感を祖父母が示したり、参加者の相手を四六時中することで生活のリズムが崩れたり苦勞が絶えなかった。しかし、回を重ねるうちに、参加者から興味深い話が聞けることもあり、受入に対する祖父母の忌避感は薄れていき、最近では受入を楽しみにしている。また、参加者にフリーの時間を与えることで、参加者と向き合う時間を調節し、家族の自由時間を確保するよう心がけている。むしろ今日では、WH参加者がいることで気分的に楽になる面もある。また、K氏の経営では、長らく妻が経営主として専門的に農業に従事し、夫は農外で働いていたが、妻が楽しそうにWHに取り組む姿を見て、2年前に夫は退職し就農した。

K氏は、今後も受入を継続していく予定である。また、夫の就農を期に経営拡大を図るとともに、ミニライスセンターやコンバインを新たに整備し、新規に地域内の水稲作業受託を行おうと考えている。このため、WHの受入は増えこそすれ、減ることはないと思われる。

(v) L氏(果樹+酪農)

果樹(なし、りんご等)を主軸としており、酪農、稲作も経営している。経営主のL氏は妻である。

L氏の経営では2000年度よりWHの受入を開始した。例年、春秋に2~3人ずつ、3泊4日で受入を行っている。手伝ってもらう農作業は、機械作業は除き、酪農での搾乳、給餌、牛舎清掃、果樹の摘果や収穫、水田の耕起および代かきの手伝い、草刈りと多岐にわたっ

ている。

L氏はWHに対して一定の評価を与えているが、近年に至り参加者の労働の質に対して不満を感じ始めている。具体的には「十分に働かない（働けない）参加者に対して宿泊や食事を提供すること」への不満である。L氏は体験教育旅行受入や農家民泊も同時に行い、そこでは代金を受け取っており、自分の提供するサービス（宿泊、食事、世話など）への対価要求はWHのみ取り組んでいる農家より高い。さらに、農業労働力が女性1人であるL氏の経営では、参加者の相手を1人でしなくてはならず、WH受入に伴う負担がかなり大きくなっており不満が表面化している。

WHについては今後も受け入れる方針に変わりはないが、2005年度の春は体験教育旅行の受入準備のため、WH受入を行わない予定である。

(vi) WH受入側の課題

以上のヒアリングの内容をまとめよう。農業労働力についてみると、調査対象の農家全て家族労働力のみの経営であり、雇用労働力を導入していない。地域的に高齢化・過疎化が進行しているため、親戚の手伝いまたは雇用を頼ることが難しく、補完労働力としてWHを活用している。

WH参加者を農家に宿泊させる仕組みについては、これまで研修生などの受入の経験がある農家は特に問題なかったが、部外者の受入を初めて経験した農家は慣れるまでに時間がかかった。今日では、プライベートの時間を設定するなど、参加者への接し方を工夫することで、特に大きな問題は発生していない。

WH参加者に対する労働力としての評価は、一部の例外を除き果樹農家において高く、果樹作業における補完労働力として十分に機能しているようである。酪農を営むI氏は労働力としての評価はあまり高くないが、「交流の効用」を高く評価している。L氏については、何人かの参加者の資質に若干の問題があったことが影響したためか、WH受入そのものに対してあまり積極的な評価を示していない。

飯田市のWHは、参加者の労働提供に対して受入農家が宿泊や食事を提供するという形をとっている。両者の間に金銭授受は発生せず、「労働」と「宿泊および食事」の経済的価値が同じであるという前提に立っている。それに対して体験教育旅行の受入や民泊業は、農家側の宿泊、食事、農作業体験の提供に対して、あらかじめ設定されている対価を参加者が金銭で支払うという経済的関係が成立している。労働の質の問題に焦点を当てて考えると、WHの場合はその優劣が容易に経済的問題に転化しうるのに対して、体験教育旅行や民泊業を行う場合はそうはならない。WHにおいて不十分な労働が提供された際、宿泊と食事を提供する農家側が不均衡感を感じるのは当然の反応であるが、労働が参加側の交換要素に含まれない体験教育旅行や民宿において労働の質は問題とならない。こうした問題は全てのWH受入農家に生じる可能性があり、とりわけ体験教育旅行受入や民泊を行い経済的対価を常時受け取っているL氏のような農家では現れやすい。

なお、類似の問題はリピーター受入においても発生しうる。たとえばL氏は、WH受入

当初不十分な労働しか提供できないリピーターが訪問しても、交流面での効用を評価しWHの仕組みの中で積極的に対応していた。しかし、リピーターが増え世話や相手をするに心身的に疲れを感じるようになると、内部経済化することが難しい交流面での効用を評価し続けることが難しくなった。今日では、WHではなく民泊業の「お客様」としてリピーターを受け入れるケースもある。長期的に参加者と良好な関係を築くためには、WHと民泊業の2つのシステムをうまく使い分けることが重要であることを示す好例である。

5)WHから定住へ結びついた事例

前述のように、WH参加者の中には新規参入を希望する者は多い。これまでの実績を見ると、飯田市内でWHを通じて定住を果たしたのは、単身および夫婦家族を含め10組以上にのぼる。

飯田市側の定住者に対する考え方は次のようにまとめられる。まず、年齢的には年配者の方が定住しやすいようである。年金により家計を支えることができ、一定水準の日常生活を送る上で特に問題のないケースが多いからである。これに対して、若年層からの相談に対しては、まず地域における農業以外の定職探しをすすめている。新規就農希望者については、就農前の1年程度の研修が最低限必要とされたと考えている。また、独身よりは夫婦での参入をすすめている。

以下では、ヒアリングを行った3戸の新規参入者の動向をもとに、新規参入する過程でWHがどのような役割を果たしたのかについて、若干の検討を行いたい。

(i) M氏夫妻

2002年11月に飯田市へIターンしたM氏夫妻（共に30代）は、共に非農家出身でこれまで農業の経験はない。東京でサラリーマン生活を送っていた夫は、田舎での「自給自足」的暮らしに漠然とした憧れを抱いていた。都会での会社勤めに徐々に疑問を持ち始めた夫は、妻のすすめもあり、田舎暮らしのできる地域を探し始めた。

夫妻が飯田市のWHに初めて参加したのは2000年11月である。その際の受入農家（果樹農家：手伝った作業は干し柿の収穫と吊るし作業）や市担当者から、農業や農家生活等について様々なアドバイスを受け、本格的に飯田市への参入を考えるようになった。WH参加後、夫は神奈川県のある農家において月2回程度の農業研修を受け始めた。夫は2001年8月に会社を退職後、半年間は飯田市内の養鶏農家、その後1年間は神奈川県のある農家のもとで研修に励んだ。

市職員、農業委員の協力により農地を確保した夫妻は、2002年11月に飯田市へ転居した。転居にかかったコストは失業保険と貯金で対応した。現在、夫は露地野菜と鶏卵を中心に農業に専従し、妻は病院に勤めている。地域においては常会（自治会組織の1つ）に参加したり、草刈りを行ったりと、地域活動に積極的に関わっている。夫は公民館係を勤めている。

夫妻は飯田市について「人間関係が濃密である」との感想を抱いている。プライバシー

確保の面ではそれほど良くない慣習として理解されやすいが、新規参入者のM氏夫妻にとっては非常に利用価値が高かった。彼らは幾人かの地域住民に認められた後、その人を介して近隣の住民に紹介してもらったり、会合に出席したりと、地域にとけ込むことが比較的容易だった。また、他人の参入に対して寛大な飯田市の土地柄を高く評価していた。

(ii) N氏夫妻

2004年10月に飯田市へIターンしたN氏夫妻（共に30代）は、共に東京都の非農家出身である。大学時代から農業への憧れがあった夫は、大学卒業後農業関連の出版社に勤め、在職中は様々な農村地域を見てまわった。2000年に会社を退職し、2年間の青年海外協力隊を経験し、農業・農村への思いを強くしたN氏は、帰国後の2002年4月から新規就農に関する情報収集をスタートした。同年12月には、情報収集や視察の行いやすさを考慮して静岡県浜松市に住居を移し、毎週のように農村を巡った。

夫妻は飯田市のWHに2003年8月に初参加した。受入農家ではキュウリの収穫や管理作業を手伝った。農作業体験よりは、むしろ受入農家の人となりに感銘を受けたようである。その際に、市の担当者とも知り合い、Iターンの意志があることを伝え、住居や農地の探索への協力を仰いだ。WH参加後は、他地域への視察を継続しつつ、月1回のペースで飯田市に通い、農村生活のイメージを膨らませた。そして、飯田市への移住を決意したのが2004年春である。

幾多のIターンの候補地の中から、飯田市を選んだ決め手は、地域住民の人柄であった。Iターンに対して金銭的な助成措置を講ずる地域もあるが、飯田市からは「受け入れたい」という強い思いを感じたという。飯田市にはIターンに対する助成措置はないが、市の担当者、地域住民らは住居や農地の探索に積極的に協力してくれた。力まずに楽に新規参入できるオープンな雰囲気飯田市にあり、「ここでならやっていけそうだ」との認識に至ったとのことである。

現在N氏は農業の傍ら特産品の仕入・販売会社を2004年11月に設立し、その経営を行っている。会社事務所が東京にあるので、Iターン後も東京と飯田市を往復する生活を送っている。会社では地域の農家が生産した農産物（自家生産込み）の出荷・販売を手がけている。N氏は、単に自分が農村に移り住み農業を行うだけでなく、これまで自分が培ってきた様々な人間関係のつながりを有効活用して、地域の農産物を販売し、地域経済の発展に貢献したいと考えていた。

飯田市への評価としては、Iターンして間もないということもあり、まだ特に定まっていないということであったが、地域活動には積極的に参加している。

(iii) O氏夫妻

2005年2月に飯田市へIターンしたO氏夫妻（共に20代）は、共に東京都出身で、実家は非農家である。農学系の大学に通っていた夫は在学中も農業手伝いの経験があり、卒業後2000年から3年間、野菜技術普及のため青年海外協力隊として海外で過ごした。帰国後

は農業資材メーカに勤めた。その後、夫妻は新規就農を目的に様々な地域を視察した。飯田市への訪問のきっかけは前出N氏の薦めであった¹²⁾。2004年10月に夫は飯田市のWHに参加し、りんごの収穫作業を手伝った。翌11月には夫妻でWHに参加し、そこで飯田市に移住し新規就農する決心を固めた。その後はIターンに至るまで月に1回ずつ計6回訪問した。

Iターンを決心した背景には地域住民の魅力があった。受入農家は新規参入を希望する2人の相談に真剣に対応し、住居や農地の探索についても積極的に協力した。市担当者や農協支所長も協力を惜しまなかった。飯田市には、新規就農に対する金銭的な助成はないが、市職員や住民の協力は、飯田市を選択するに足るものであった。調査時に妻は以下のように語った。「飯田市ではIターン者をよそ者扱いしない。いろいろ手伝ってくれるし、お節を焼いてくれる」と。

これから専門的に農業を営む意向であるため、O氏は就農準備に忙しい。今後、栽培した農産物は道の駅やN氏の会社に出荷する予定である。飯田市への評価については、人柄が素晴らしい反面、高齢者の多い点が不安とのことである。また、教育・医療環境、道路の整備についても若干の不安材料はある。夫は直近の要望としてインターネット環境の整備を挙げていた。

以上、3戸のIターン者の事例を見てきた。3戸に共通しているのが、WHへの参加時点ですでに新規就農の意志が明確だったことである。彼らにとってWHへの参加は、単なる農作業体験ではなく、将来の農業への新規参入に向けた第一歩を意味した。期間中彼らは、農作業技術の習得のみならず、地域の雰囲気や農家の対応をチェックし、飯田市における農業経営と生活の成立の可否を総合的に吟味していた。しばしばIターン希望者がそうするように、紹介した3戸のIターン者も複数地域を視察したうえで飯田市を選択した。同市では新規参入に対して経済的な助成措置を特に講じていないが、それを差し引いても新規参入を希望する者にとって十分に魅力を有する地域なのであろう。その魅力はすなわち、WH受入農家や区長、役場職員といった関係者の相談や農地・家屋の探索への協力といった手厚いサポートと、「よそ者を温かく受け入れてくれる」という雰囲気に他ならない。こうした金銭には代え難い魅力が、多数の新規参入者をひきつける大きな要因である。

6) WHが地域に与えた影響

飯田市において、WHは地域にどのような影響を与えたであろうか。まず、WHのイベント開催時期と農繁期が重なる果樹農家においては、WH参加者を経営の補完的労力として活用することが比較的容易であった。そうした農家ではWHの直接的効果が現れているといえるが、WHの展開はこの他にも様々な副次的効果をもたらした。

市の担当者は、受入農家が都市住民との交流や交歓によって次第に元気を取り戻してきたという点を強調していた。これについては定量的把握こそ難しいものの、その一端は受入農家へのヒアリング結果からもうかがえた。新しい人間関係が生み出され、新鮮な都会

の話を開いたり、また田舎の話喜んで聞いてもらったりすることでこうした効果が生み出されてきた。これは、同市において全く異なる交流のコンセプトから展開した体験教育旅行の取組とも相まって、「開かれた」交流の場としての農家・農村の出現を促す原動力となっている。

また、受入農家の農産物をWH参加者が事後的に購入するケースも見られた。市役所の言う「飯田の応援団効果」とも表現できるWHを通じた産直は、「自分のお世話になった農家の作った農産物」という特別な思いを背景とした緊密な関係に基づく産直であり、経済的効果として無視し得ないものである。

さらに、WH参加者から何人かのIターン者が現れており、WHが地域参入へのワンステップとしての役割を担っている面も見逃せない。Iターンの意志のある参加者にとっては、WHは単なる農作業ではなく、実際の農村生活を本格的に体験できる貴重な機会となっている。また、WHを通じて何度か地域を訪れることは、受入農家や地域にとっても定住希望を持つ参加者の人となりを知る絶好の機会となる。そうした意味でWHは、参加者、受入農家（地域）双方にとって、Iターンの予行練習ともいえるのである。先に紹介したN氏は、自ら農産物の販売・加工会社を立ち上げ、地域農産物の取り扱いを開始しており、地域に更なる経済効果を生み出す好例となっている。

7) 今後の課題と展望

まず、運営面における課題について述べよう。前述のように、飯田市のWHをコーディネートするのは市の担当者1名である。担当者は受入農家と参加者とのマッチング作業をはじめ、受入農家の現状把握、新規参入希望者への情報提供など、様々な役割をこなす必要がある。ヒアリングにおいて担当者は、現在の100戸弱という受入農家数が1人で対応できる限界であると回答しており、現状の運営方式を続ける限り飯田市WHの受入人数拡大の余地は少ない。

受入拡大を制限するのは運営面の限界だけではない。受入農家の募集に際して自発的な参加を促し、トップダウン的な事業展開を図ってこなかった市役所には、そもそも受入農家をむやみに増やす考えはない。無理に増やそうとすれば、「WH参加者を迎え入れたい」と真剣に考える農家だけではなく、WHに対して熱意がそれほどない農家を取り込む恐れがあるからである。単なる受入先としての農家、単なる補完労働力としての参加者という位置づけであれば、WHは雇用となんら変わらない。WHをWHたらしめる重要な要素は、受入者と参加者との交流や交歓である。その部分に魅力を感じない農家を受入先としたところで、参加者に十分な満足感を与えることができないと市は考えている。

さらに、受入農家と参加者とのマッチングも課題である。申し込み段階では、「もてなしはしない」、「働くことが第一」というアナウンスを行っているものの、農家の労働力需要と参加者の希望がきちんと合致しているかは定かでない。事前の調整作業だけでは限界があり、L氏の事例のように受入農家の負担となっているケースもある。そうならないためにも、マッチング時における参加者の属性の見極めは、WH運営の鍵を握る重要な要

素である。

なお、飯田市のWHは主に口コミで広まっており、市内向けに特別なアナウンスを行っていない。そのせいもあり一般の飯田市民にWHはそれほど認知されておらず、「市民との交流」という点では、これもWHの課題といえるのかもしれない。

さて、今後のWHであるが、若い参加者が多数を占める現状をふまえれば、これらの参加者をより本格的な労働力として位置づけるオプションが用意されてもよい。農家の作業手伝い程度にとどまる現行のメニューに、機械作業等を含めた本格的労働が加われば、多少の安全面でのリスクは伴うものの、受入農家および参加者双方に対して、より高い効用をもたらすと考えられる。さらに、新規就農希望者の希望に応じて、就農相談窓口や情報交換会を徐々に拡充していくことを検討してもよいだろう。いずれにせよ、今後新規参入を視野に入れながらWHを継続していくためには、マッチング作業を行う市が受入農家、参加者双方の情報をどれだけ詳細に把握し、活用できるかが鍵になると思われる。

てもらい、WH導入に向けて話し合いが重ねられた。WH立ち上げに関しては、あくまで研究会ベースで話し合いが進められ、行政が積極的に介入することはなかった。

(ii) 仕組み

WHの仕組みについては飯田市の取組を参考にした。つまり、受入側と参加者が金銭授受を行わずに、「宿泊および食事」と「労働」を交換する関係である。飯田市と若干異なる点は、①WHの実施について敢えてルールを明文化していないこと¹⁵⁾、②実施主体が行政ではなく、遠野グリーンツーリズム研究会(当時)という任意団体であったことである。その後、この任意団体を母体にNPO法人「遠野山・里・暮らしネットワーク」が2003年6月に結成され、その事務局長であるT氏が「遠野ワーキングホリデー事務局」の長を兼ね、WHのマネジメントを行っている。NPOには遠野市から年間約300万円が助成されており、大部分がT氏の給料に充てられている。

農家は農業体験の受入や人相手のサービスはそもそも不得手であるという認識に基づき、WHを仕組むに当たって参加者を「お客様」ではなく「友人」、「家族」として扱うこととした。つまり、参加者に対しては「労働を含めて農家に暮らしに来てください」とアナウンスし、受入農家に対しては「友人、家族として参加者と接するように」と指導した。「接客」という上下関係ではなく、参加者と受入農家が一緒に働き、飯を食べ、酒を飲むという対等関係の構築を呼びかけた。農作業を体験させることだけをWHの目的とせず、農家と日常生活を一緒に送ることをその基本にすえた。生活を共にすることが主眼であり、農業体験は結果的に付随するという考え方である。双方が自己責任で取り組むという観点から、特に労災等の保険は用意しなかった。参加者の滞在日数は3～4日から1週間である。滞在を始めて2～3日で大半の参加者は農作業に慣れてくるとのことである。

「遠野ワーキングホリデー事務局」では、WHの外部への宣伝は積極的に行っておらず、情報発信はシンプルなつくりのウェブサイトとメールマガジンによるだけである。単発的には雑誌やテレビ等に紹介記事として取りあげられたこともある。WH実施の流れは、①参加希望者が参加希望時期の1ヵ月以上前に問い合わせ、申し込みを行う。②事務局から参加希望者に折り返し連絡し、希望内容確認を行う。③事務局が受入農家を選び、参加希望者に受入農家の連絡先を通知する。④参加希望者が受入農家に直接連絡をとり、詳しい条件について調整する。⑤調整終了後にWHが実施される。事務局の役割は、受入側と参加者をつなぐことで、その後の双方の調整作業については特に関与しない。

3)WHの実績

遠野市におけるWHは、2001年度から取り組まれている。これまで参加者を受け入れた経験のある農家は約15戸、その中でも中心的に受入を行っているのは5戸である。その内訳は、①りんご・ブルーベリー栽培の果樹農家、②稲作および馬生産を行いながら、炭焼きにも取り組む農家、③肉用牛繁殖の畜産農家(妻が1ターン)、④どぶろく特区に申請し農家民宿を営む農家、⑤稲作と葉たばこ栽培の農家、である。事務局長T氏によると、WH

第3-20表 遠野市におけるWH参加者数の推移
(単位:人日)

区分	参加者数	リピーター数	延べ日数
2002年	53	2	203
2003年	80	10	400
2004年	135	93	486
計	268	105	1,089

資料:遠野WH事務局におけるヒアリングにより作成。

注. 1)2005年3月現在。

2)2001年度のデータはなし。

参加者を「補助労働力として受け入れている」農家と「交流目的で受け入れている」農家に分かれているとのことである。

これまでの参加実績をみると(第3-20表)、参加人数、年間滞在日数が順調に伸びている点もさることながら、特筆すべき点はリピーターの数が多い点である⁽⁹⁾。これらの数字は事務局が把握している部分であり、事務局を通さない訪問者も含めると、かなりの人数が農家に訪問していると推察できる。参加者の過半は関東地域から訪れており、ついで仙台、岩手県内からの参加者が多い。参加者の男女比率は4:6で女性の参加者が多い。参加者の属性についてみると、学生が多い一方で、30~40代の社会人、年配者の参加も見られる。近年はWHに注目する大学の教員が、学生を引率して参加するケースも目立つ。

事務局がコーディネートするマッチング率は約8割と非常に高く、大半の参加希望者の受入が実現している。

4)WHが地域に与えた影響

遠野でのWHは必ずしも地域を挙げて実施している取組ではない。都市住民との交流を希望する農家が自主的に取り組んでおり、遠野におけるWHの実施効果は受入農家に限定される。その効果には、直接的な補完労働力としての効果の他にも、深い交流がもたらす参加者との友人関係の構築などがある。

WHの経済効果は必ずしも大きくないが、参加者から得られる様々な情報は、農業経営において大きな財産となるという。また、WH終了後も交流が継続し、参加者が信頼のおける顧客になり、口コミで遠野の農産物を周りに宣伝してくれるケースもあるという。さらに、リピーターとなった参加者が新たな参加者を遠野に連れて来ることもある。

5)今後の課題と展望

都市住民との交流を望み自主的な取組を行ってきた農家と農村生活の体験を希望する参加者をつなぎ、やや交流に重きをおく取組が遠野におけるWHである。マッチング率も高く、運営上の問題もほとんど顕在化していない。

WHのリピーターが増えれば、経営にとっても補完労働力としての有用性が増す。しかも、農家と懇意なリピーターの中には、農家の都合に合わせて来てくれる人も存在する。遠野における昨今の実績を見ると、初回参加者の満足度がかなり高く、リピーターとなる

人が多い。そして、そのリピーター率の高さが、農業経営の労働力需要に貢献するという良い循環を生み出していると考えられる。

最後に今後の展望について述べよう。事務局長T氏の話によれば、今後とも参加者の受入は増やす方向だが、そのためには受入農家の確保が不可欠となる。その方法としては、様々なネットワークをもつリーダー層に働きかけ、集落単位での受入体制の整備を展望している。当面の目標としては、受入農家50戸程度（全農家の1%）、参加者数150人程度を見込んでいる。WH以外にも様々なルートを通じ、多様なメニューを提示して都会の人を招き、来る者を拒まない「開かれた農家」を作りたいとのことである。

また、遠野のWHは農業分野の枠を超える取組になる可能性を有している。現在でも参加者の中には、農作業の傍ら農家の子息に勉強を教えたり、老人の話し相手になったりと、様々な役割をこなす者がいる。今後、遠野のWHは農村の教育や福祉に貢献する仕組みに発展するかもしれない。

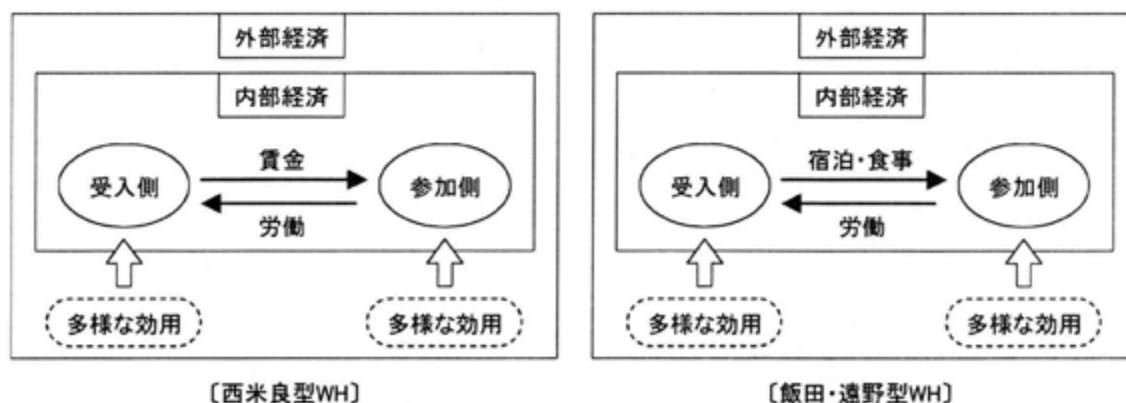
なお遠野では、WHと合宿免許をコラボレートした取組が始まろうとしている。市内にある唯一の自動車学校が、少子化等を背景とした入校生数の落ち込みによって2004年3月での閉鎖が余儀なくされた。市は県内の事業者を引き継ぎを依頼したが、当初は事業者側がそれほど乗り気ではなかった。そこで、市はWHを活用した形で農家に宿泊し、農業体験をしながら免許教習を受けるというユニークなアイデアを提案した。この提案を了承した事業者によって、WHと合宿免許のコラボレーションが実現することになり、2005年度夏から本格始動する予定である。この合宿免許とタイアップしたWHの取組は、すでに首都圏のコンビニエンスストアを介して募集が始まっており、遠野におけるWHの新たな展開としてその動向が注目される。

(4)農村型WHの普及拡大へ向けた課題

以上、わが国においてWHを先進的に取り組む3地域の事例を見てきた。これらの検討結果から、今後の農村型WHの普及拡大に向けた課題についてまとめたい。

第1に、WHにおける参加者と受入者の経済関係のバランス調整が課題となる。事例で取りあげた3つの農村型WHにおいては、参加者の労働提供に対して受入側からは財やサービスが提供されるという経済関係が成立している。西米良村の場合は労賃、飯田市・遠野市では宿泊と食事の提供が、参加者の労働提供の対価となっている（第3-6図）。WHではこうした経済関係の他にも、外部経済効果としての「多様な効用」が両者に多分に生じている。交流・交歓や情報交換が両者にとってWHの大きな効用であることに加え、農作業を行うこと自体が参加者にとって重要な効用でもある。こうした経済関係や外部経済効果が混在しているが故に、WHがベースとする経済関係に多少の不均衡が生じて、「労働力としては若干不十分だが、その分交流を楽しむ」と回答した西米良村のB氏のように、交流等による「外部効果」が不均衡をカバーするケースがでてくる。しかし、不均衡が解消されずに不満を表明している受入者も存在する。西米良村におけるA社、飯田市におけるL氏がそれに該当する。両者とも、自分達の支払っている対価に見合う働きを参加者がしていないと感じている。A社は村の地域振興への責任感から受入継続の意向を示しており、L氏はWHと民泊業を使い分けることでこの課題に対処しようとしているが、両者とも今後積極的に参加者を受け入れようとは考えていない。参加者の労働が不十分な場合、経済的不均衡が発生し、受入側の受入意欲減退につながる恐れがある。受入側が持続的かつ長期的にWHに取り組むためには、経済関係のバランスがとれていなければならない。

第2に、受入先の確保に向けた課題である。西米良村の場合には、認定農業者をはじめとした専門的農家が元々少なく、労賃を支払ってまでWHを導入する余裕のある農家が限られるという制約がある。一方、飯田市では、単なる受入農家数の増加は、WHの理念を十分理解しない農家の参入につながりかねない点を危惧していた。WH全体のレベルを維持するためにも、市役所は受入農家数の拙速な拡大を望んでおらず、WHの理念に十分賛同した意欲の高い農家を確保することを心がけている。遠野市では集落単位での受入態勢



第3-6図 WHの経済的な枠組み

整備を目指している。

第3に、参加者と受入先のマッチングの問題もWHの普及拡大を規定する大きな課題である。具体的には、参加希望者と受入先双方の作業時期や作業内容の希望が折り合うかどうかという形で問題が生ずる。WHは受入成立までに、①受入側の希望が示される宣伝アナウンス、②参加者側の希望が示される参加希望者からの問い合わせ、③両者の希望を調整するマッチング作業、④希望を勘案した上での受入決定、の4段階を経るが、中でも③はWH成立の正否を握る重要なプロセスである。コーディネーターが双方の希望を正確に把握することはもちろん必要だが、このプロセスが順調に処理されるためにはそれなりの数の参加希望者と受入希望者が存在しなくてはならない。受入側の希望時期を早めに把握できれば、参加希望者もプランを立てやすいが、農繁期は年毎に多少ぶれるため、事前に時期と作業内容を決めて募集をかけることは難しい。

第4に、コーディネート面での課題である。既存のWHの枠組みで十分な事前調整を行おうとすると、管理すべき参加者と受入先の情報量は極めて膨大となり、コーディネート面で限界に突き当たる。コーディネーターが扱う情報の中にはデータベース化できる事項もありうるが、調整作業はあくまで人の手、人の勘に頼っている面が大きいからである。特に受入農家については、その時々々の作目の生育状況や天候、経済情勢等により、受入の可否から必要とする労働力の質に至るまで取り扱うべき情報は多く、その処理に多大な時間がかかる。さらに、この作業量は受入先や参加者が増えるほど、マッチングを的確に行おうとするほど負担が増すのである。

以上を整理すれば、WHの普及拡大のためには、①経済的不均衡を受入先に感じさせないような十分な働き手としての参加者の確保、②新たな受入先の創出、③参加者および受入者のニーズの把握、④コーディネート体制の充実化、などが必要となる。とはいえ、これらは一朝一夕では解決が困難な問題ばかりである。ある程度経営に余裕のある農家がいなければ②はそもそも難しい。他業務に忙殺され、①や③の前提となる④にすら取り組みにくい市町村が大半である。その点では、コーディネートをNPOが行っている遠野市の取組は注目される。

WHの成功は、参加後も産直等を通じて関係が継続する参加者や、何度も地域を訪問してくれるリピーターをいかに創ることができるかにかかっており、初めて訪問した参加者が訪問時にどれだけの満足感を得られるかが鍵となる。とはいえ、訪問時に「至れり尽くせり」の対応をするだけでは、参加者も受入側も疲れるだけであり、双方に満足感が残らない。参加者が何を求めて農村・農家にやって来るのかを受入側がきちんと把握することはもちろん、WHを実施する地域が、「その地域にはどんな人材が必要で、地域として何を求めているか」というWHのコンセプトを積極的に発信する必要があるだろう。

注(1) ふるさと村民制度は、1973年に創設されたもので、2005年度で23年を迎えている。年会費12,000円で年4回西米良の特産品を送るもので、会員は全国各地に存在している。

(2) 当初は職業斡旋といった勘違いの問い合わせも多々あった。

(3) 2004年度時点で熊本良の庄では課長と女子職員2人の計3人がWHの担当となっている。年間の事務経費として

- 63 万円、交流経費として27万円、計90万円が役場から粥米良の庄に対して支出されている。
- (4) WH運営上問題点として指摘しておきたいのが、WH期間中の粥米良の庄および役場職員の負担量である。彼らは毎日の参加者の仕事場への送迎および昼食（弁当）配達を行っているが、これに費やす時間がかなり負担となっている。宿泊場所であるキャンプ場と農場との距離はかなりあり、自動車でも片道30分かかる。
 - (5) 2004年度は台風被害の影響でWH受入が減った。
 - (6) 出所は西米良村資料。
 - (7) リゾート・テーマパークといった「仮想空間体験」ではなく、その地域にしかない「文化」、「景観」、「人情」の体験を大切にする考え方を指す。
 - (8) 1998年度は2泊3日で試行的に開始されたが、WHの目的を達成するには期間が余りに短いという指摘があり、次年度より3泊4日で実施されることとなった。
 - (9) このうち、現在でもダイレクトメールを送付するなど、所在が明確に分かっている有効登録者数は、前章でアンケートの対象とした513名である
 - (10) 市役所では、農家とのプライベートな関係に基づいて非公式に参加している元WH参加者について、「卒業生」と呼んでいる。
 - (11) 年間200日も訪れている参加者もいるという。
 - (12) N氏（夫）とO氏（夫）は青年海外協力隊を通じた知人関係にある。
 - (13) ある農家の試算では800万円という数字が算出された。
 - (14) 今日岩手県においては、「指導料+食事代」程度の支払い額であれば、農家において簡易宿所に取り組むことが可能である。
 - (15) 飯田市では農家において夜間の飲酒行為は基本的に認めていないが、遠野市では積極的に杯を酌み交わした受入側と参加者との交流を推奨している。
 - (16) 2004年度のリピーター率は68.9%である。

第4章 大学における学外実習教育の現状と課題

明治大学農学部 竹本田持

(1) わが国における農村型WHと大学における実習教育の位置づけ

これまでみたように、農村におけるWHは、人々（多くの場合は都会で暮らす人々）が農村へ出かけ、農作業を手伝いながら平時とは異なった環境でリフレッシュすることで成立する。受け入れる農家側にとっては、農作業の補助的労働力を確保するという実質的なメリットとともに、多くの人々と交流することで満足感や充実感を得ることができるから、短期的視点で経済的バランス・シートがマイナスの場合でも、外部経済的な「交流の効果」を積極的に評価することで取り組まれることがある¹¹⁾。また、結果的にWHの受入が新規直販ルートの開拓に結びつくことも少なくない。

ところで、農村において農作業を手伝っている若者のなかには学生が少なからず存在する。彼らは、WHでの参加者もいるが、夏期休業など長期休暇中のアルバイト、交通費や宿泊滞在費などの費用を全額自己負担して農作業体験をしている人もいる。そして、大学農学部や農業大学校などの実習・研修科目として農作業を手伝っている学生も含まれている。農作業を手伝い、農家と交流するという点では、彼らとWH参加者との違いはそれほど大きくないだろう。

本稿では、明治大学農学部農業経済学科における学外実習の現状を紹介し、農家と学生の交流のあり方を考察する。また、農家側が主体的に学生に体験をさせようとしている事例についても補足的にふれる。なお、本稿の内容は明治大学とは一切関係なく、筆者の個人的な見解である。

(2) 大学における実習教育

大学農学部には付属農場が設置され、学生実習や実験・研究に使われている。農学部の学生といっても農家出身者は少なく、農家に生まれても農作業を手伝ったことのない者が多いので、全体としてみれば農作業経験のある学生は極めて少数派である。これからも「農学＝実学」というとらえ方を否定されることはないだろうが、入学前も卒業後も農業とは無縁に生きる者が多数派というのが明治大学農学部の実態である。

こうした現状から、学生に対して農業生産の現場を見せること、農作業を体験させることは極めて重要であり、付属農場の果たす役割はますます大きくなっている。一方、実験室における実験・研究の成果を圃場で検証する、あるいは圃場で得られたデータを実験室での実験・研究に反映するため、付属農場は農学部にとって不可欠の施設であり、農学部の存立基盤とでもいえるものである。

さらに、付属農場には生産農場としての機能も求められる。それは、農業生産の現場にできるだけ近い状況をつくるのが学生実習や実験・研究にとって有益であることにもよるが、大学の経営サイドから「広大な土地を利用する付属農場なのだから、黒字にはならないにせよ、ある程度の粗収益をあげるべきではないか」という要請が出されやすい背景もある。とはいえ、付属農場は、場所が中心キャンパスと隣接しているか離れているかに関わらず、学外から見れば同一組織内の施設であり、具体的な作付計画や販売計画、作業計画等に関する意思決定は現実の農業経営とは大きく異なる。また、農業経営の多くが「家族」を基礎に営まれているとすれば、「家族」という要素を付属農場に取り入れることは不可能である。

このように、付属農場での実習には限界があり、農業経営・農家生活の実態、農村の現状を学ぶという観点からは不十分であると言わざるを得ない。そもそも、そうした役割まで付属農場に求めるのは筋違いで、技術系の学科として考えれば、実験室レベルの技術を圃場に適用する場として必要不可欠であるとともに、学生実習としては圃場での個々の作業を体験する、あるいは機械や施設等を実際に目にしたり操作したりすることで目的を達することができよう¹³⁾。

ところが、同じ農学部でも農業問題や農村問題を社会科学的に学ぶ農業経済学科では、現場を「見て」「体験して」「考える」という機会が必須である。学生が農村に出かけ、農業経営・農家生活に入り込むことが極めて有効であり、そのことを通して講義やゼミでの学習に対する理解度が増し、問題意識も醸成されることになるからである。この点について、その効果を数量的に示すデータはないが、最近実施した学生に対するアンケート調査結果をみても、学外での実習や研修に対する満足度は極めて高く¹⁴⁾、農業経済学科の特徴の1つともなっている。

(3)カリキュラム上の実習・研修科目

明治大学農学部農業経済学科では、1年生に学部共通の「農場実習」、2年生に「ファームステイ研修(国内)」「ファームステイ研修(海外)」、そして3年生にゼミ単位に行う「農村調査実習」という3つの実習科目を設置している¹⁵⁾。

1)農場実習

「農場実習」は前期に行う教室での講義、夏期休業中に行う付属農場¹⁶⁾での2泊3日の宿泊実習により構成される¹⁷⁾。教室では各学科(農学科、農業経済学科、農芸化学科、生命科学科)教員が、各学科の教育・研究内容を反映した概論的な講義を行い、学生は3科目を任意選択して受講する。夏期休業中の宿泊実習は、予定された日程のうちから希望により抽選・調整して班を編成し、各学科数名の担当教員(前期の講義を担当した教員が中心となる)が、それぞれ1人1～2班を担当して付属農場へ引率する。

期間中の基本的な日程は以下の通りである。初日の昼前に付属農場に集合、昼食および

ミーティングを行って午後から農作業を開始する。具体的な作業の指導は農場職員が行い、引率教員は学生とともに作業に従事する。入浴・夕食後、作物や家畜を含む農場全体の概要把握、当日行った作業、翌日行う作業等に関する説明、そして各人の感想や反省を中心に担当教員によるミーティングを行う。農場実習は学科別の班編成ではないので、学生相互も教員も初めて顔を合わすメンバーが少なくない。そこで、とりわけ初日のミーティングは自己紹介等によって相互交流の契機とする大切な役割も有している。

2日目は朝食後から昼食時休憩を挟んで夕方まで農作業をし、入浴・夕食後にミーティングを行う。3日目は午前中のみ農作業を行い、昼食後に総括のミーティング、そして解散となる。以前は朝食前に飼養管理作業が組み込まれていたこともあるが、畜産部門の縮小等により中止された⁷⁾。

ところで、付属農場での作業実習は夏期休業中だけであるが、過去には前期ないし後期の授業期間中に1回、夏期休業中に1回の計2回の実習参加によって単位認定していた⁸⁾。しかし、学科混合で班を編制し、授業期間中に農場実習を実施すると、各学科の学生が毎週少しずつ実習に出かけていることになる。これでは、毎週行っている実験科目に全員が揃う機会をつくることができないといった問題点が実験科目担当者から提起された。

時間割の調整や弾力的運用などによる対応が困難な事情から、授業期間中の実習は中止されたが、このことは生産現場での実習のあり方を検討する材料の1つとなるのではないだろうか⁹⁾。後に述べるように本稿で取りあげる「ファームステイ研修」は農繁期に実施することにしているため、作物によっては授業期間中に設定せざるを得ないことが多い。四季豊かなわが国において学生に農業生産の実態を修得させようと考えれば、それが大学の学年歴からみて不都合となる事態が生じるのも当然である。

農学部は、社会科学系の農業経済学科を除いて実験室での実験科目が多い。実験は毎回の積み重ねが重要であることは間違いなく、とりわけ基礎を学ぶ1年生は欠かさず実験を行うことが不可欠であろう。しかし、それゆえに農場実習を夏期休業中だけに限るのでは、今度は農場実習という面では問題なしとは言えないと思う。

上述したように、援農や農作業体験、収穫アルバイトなど、学生が農村に出かけていく機会の実習・演習に限ったことではないが、授業期間と農繁期との関係については何らかの工夫が必要である。また、後述するように農繁期に実習や演習を行うことは、受入農家にとって負担になっている面があり、今後の検討課題となろう。

2) 農村調査実習

各ゼミ単位に行われる3年次の「農村調査実習」は、各ゼミの予定や都合、研究テーマによって内容、時期、場所が決定される。旅館等に合宿し、行政・農協等や各農家での聞き取り調査やアンケート調査を実施するゼミ、農家に分宿して農作業を手伝いながら経営や技術、生活に関連した聞き取り調査を実施するゼミなどがあり、海外調査を実施するところもある。海外調査の場合も基本的には国内調査と同じだが、後述する「ファームステイ研修（海外）」と同様に農家分宿等は難しいため、関係機関への訪問や聞き取り、農家

訪問などが中心となる⁽⁹⁾。期間は、多くのゼミが5泊前後である。

一例として筆者のゼミにおける農村調査実習について紹介しよう。他のゼミでは農村調査実習は基本的に年1回であるが、筆者のゼミでは年2回実施している。

夏期休業中に行う通常の農村調査実習は、1979年から同じ地域で実施している。内容は以下で紹介する「ファームステイ研修（国内）」とほぼ同じで、収穫最盛期の農家へ分宿し、農作業を手伝いながら事前に作成した調査表に基づいた調査を行う。調査内容は、農業経営の概要、農家生活の現状、および各学生が関心のある項目である。期間中の一晚、受入農家、農協担当者、学生が集まって交流会を行っている。また、農家分宿の前後に行政と農協の担当者からの聞き取り調査、農産物加工工場の見学などを行い、全体の期間は一週間強（8泊程度）である。

これとは別に、夏期休業中の実習地とは異なる場所へ行き、農業・農村の現状についての理解を深めるような試みを6年前から始めた。行政や農協での説明と質疑応答、農業関連施設の見学を主体にしたもので、宿泊（3泊程度）は合宿形式をとっている。ただし、現地との交渉で、うち1泊を学生数人ずつでの農家分宿に変更した。夕方、集落の公民館に受入農家、行政担当者、そして学生が集まって夕食を兼ねた交流会を行い、終了後に農家へ移動して農家と学生とが懇談する。翌日、朝食を各農家でいただいてから辞去し、調査・視察を続けるのである。1泊だけの宿泊であるが、いや1泊だけだからこそかもしれないが、学生にとっては夏期休業中の農村調査実習とは違った意味で印象深い交流体験ができるようである。

夏期休業中の約1週間の農家分宿と、前期に行う1泊だけの農家分宿は、かなり意味合いが異なる。その最大のものは宿泊費である。夏期休業中は「ファームステイ研修（国内）」と同じく受入農家に対して宿泊に関わる経費を支払っていない。これに対して、1泊だけの農家分宿では農作業の手伝い等は体験的なことを除いては行わないため、朝食代とシーツ洗濯代に相当する程度の僅少額を支払うこととしている。

3)ファームステイ研修(海外)

海外での「ファームステイ研修」は、理想的には名称通り農家分宿し、農作業を手伝うという国内と同じ形態で実施することである。しかし、農家が民宿経営しているところに「宿泊客」として滞在し、農場を案内してもらうことなら可能であろうが、家族の一員として滞在し、農作業を手伝うことは容易なことではない⁽¹⁰⁾。また、農家による民宿経営が一般的でない国では、「宿泊客」としての交流もできない。

現在、「ファームステイ研修（海外）」を実施しているのは台湾であり、明治大学の協定校である国立台湾大学の全面的協力によって、大学での講義、周辺農村の農家訪問や関連施設見学、そして全期間中にわたりサポーターとなって各学生についてくれる台湾大学農学部学生との交流を内容としている。実施は年末近くになってからなので、参加者が確定してから実施までの間、台湾農業についての知識やコミュニケーションをとるための語学など、定期的に集まって事前学習を繰り返す。「ファームステイ研修」ということでは

同じ科目であるが、海外に出て協定校の学生との交流もあることから、国内班と比較して事前学習に力を入れている。

ところで、このように外国の協定校の協力によって研修を行う場合、逆に相手側も日本に来てみたいという希望を持つのは当然である。高校の姉妹校交流などでは、ホームステイによる相互交流が行われていることが多い。ホームステイは行わないにしても、準備や案内等で担当教員の負担が大きくなることは避けられない。長期的に交流を深めていくと、受入という問題が発生することになる。

外国での研修は、オーストラリアやニュージーランド、カナダ等で募集しているWH⁽¹²⁾のうち、農場で受入があるものに参加し、その参加証明をもって体験実習の単位として認定するなど今後検討すべき課題ではないかと思う。その際、学外での語学研修経験、英語検定の級やTOEIC、TOEFLの点数による単位認定が行われるなど、学外での経験や資格を大学が活用するようになっていることも参考となろう。「ファームステイ研修（国内）」も同様であって、今後は国内のWH参加についても考慮することになるのではないだろうか。

(4)ファームステイ研修(国内)について

1)これまでの経緯

さて、以下では明治大学農学部農業経済学科における学外での農家宿泊実習「ファームステイ研修（国内）」について紹介する。筆者が把握しているのは1970年代半ば以降の実態についてである。

当時の実施地域は、静岡県榛原町（茶）、山梨県甲府市（もも）、長野県南牧村（高原野菜）の3カ所であった。作物から判断されるように、お茶は大型連休（ゴールデンウィーク）中、ももと高原野菜は夏期休業中に実施するもので、授業との競合がない時期・場所が選ばれていた。1学年の学生数は現在とほぼ同程度ないし若干多いくらいだったので、学生数に対する箇所数は相対的に少なかった。1カ所あたりの受入学生数は15～20名程度で現在よりも多かったが、それでも希望者の全員を受け入れることは難しく、説明会への欠席者や遅刻者を排除して調整をしていた。休暇中に行われる実習なので、参加申し込みをするのは積極的な学生が多かったはずであるが、こうした措置により、結果的にはさらに意識の高い、やる気のある学生が選抜されていたことになるのではないだろうか。

その後、長野県南牧村（野辺山地区）では以下のような問題が発生した。同地区では高原野菜の収穫最盛期と大学の夏期休業が一致するため、当時は隣接する川上村などとともに学生アルバイトを多く入れている地域の1つであった。実習として訪れる学生は、期間は短いものの同じ大学生であり、見方によっては無償労働力である。当時、アルバイト学生は各農家に宿泊して家族の一員として働いており、部屋さえ確保できれば学生が1～2名増えても大した負担ではない。つまり、受入農家には大きなメリットがあった。

しかし一方で、実習する学生の側からみれば3つの点で問題があった。第1は、学生は「実

習」，農家は「無償労働力」という意識で接することである。これでは，期間中ひたすら働く（働かされる）だけに終始してしまう可能性が否定できない。農家自身，この時期に1年分の農業粗収益をあげなければならないから，それこそ猫の手も借りたいくらいの忙しさであり，学生とゆっくり話すこともできない状況だった。第2に，一緒にいて同じことをしているアルバイト学生は賃金を受け取るのに，実習学生は単位にはなるにせよ「タダ働き」になってしまうことである。「実習とアルバイトは違う」と頭では理解していても，若い学生にとっては納得することは難しい。第3に「実習生だからといって“タダ”では可哀想」ということで，実習最終日に学生に対して現金を渡す農家があったことである。いくら「これは内緒だよ」と言い含めてみても，結局は明らかになってしまい，学生の間に不公平感が広がってしまった。

こうした問題を抱えたまま実習を継続することは困難であり，野辺山地区での実習は数年間で中止となった。以後，長野県長野市篠ノ井地区（りんご）が加わり，ももの収穫作業をしていた山梨県甲府市は，山梨市や勝沼市を経て現在の一宮町（現・笛吹市）に引き継がれてきた。また，①臨時定員増措置による学生数増，②実習参加希望者割合の向上，③一地域での受入学生数の減少，④現地の事情による受入中止などにより実施地域の増加，変更があった⁽¹³⁾。

現在の実施地域は，時期順に①静岡県榛原町（茶），②長野県松川村・池田町（花き，野菜等），③愛知県田原市（施設園芸＝花き・果菜類，養豚），④山形県天童市（さくらんぼ），⑤山梨県笛吹市（もも），⑥福島県喜多方市（野菜），⑦栃木県那須塩原市周辺（米，なし，野菜，花き，酪農）の7カ所である。このうち，静岡県榛原町は30年以上にわたって継続している。

2) 具体的内容－学生の選考，受入農家の選定，実施日程など－

実習参加学生の選考等は，以下のような方法で行う。

- ①全体説明会を実施し，各実習地担当教員が概要を説明。説明会までに各実習地へ連絡をとり，実施が可能であるかどうか，受入可能人数，時期等を確認する。
- ②学生より参加申込書を提出させる（新たな試みとして，紙ではなくEメールによる申し込み方法を実施した）－内容は，氏名，住所，希望地（海外か国内か，国内の場合は第一希望と第二希望を記入）。
- ③全体説明会において実習地を決定（第一希望で予定人数を上回ったところは積極的に第二希望に移る人を募り，それでも人数オーバーの場合は抽選）。海外については，費用の一部自己負担があり，外国での研修となるため，担当教員がひとりひとりを面接して意志確認を行う。
- ④以後，各実習地単位に何度かの説明会を行い，注意事項の伝達，現地についての概況説明，意志確認等をする。

こうした準備を経て実際の研修を迎えるが，実施までに開催する数度の説明会を欠席ないし遅刻した学生については参加を認めないなど，厳しく対応するようにしている。それ

でも、作業の辛さから荷物をまとめて夜中に徒歩で帰宅する（翌朝、農家の方が起きてこない学生の様子を見に行って初めて気づく）、期間中ずっと首を振って意思表示するだけで一言も口をきかない、極端な好き嫌いを主張して手作りの料理を全く食べない、酒を飲んで暴れる、近隣の農家で研修している学生と待ち合わせて夕食後に農家を抜け出し深夜まで帰らない、携帯電話で情報交換して他の農家との作業内容や待遇の違いについて文句を言うなど、常識では考えられないようなトラブルが発生する。こういうことが起こった地域の中には、翌年からの受入を断ってきたところもある。

受入農家の選定は、多くの場合は現地の農協（営農指導担当部署）に依頼している。力仕事が主となる作物をつくっている地域では女子学生を受け入れてもらうことが困難であり、逆に細かい仕事を中心の農家では女子学生の希望が多くなる。農作業の内容とともに問題となるのが、家族構成と家の設備や雰囲気である。男の子ばかりの家では、設備や雰囲気が女子学生向きではないと農家側が判断して男子学生を望むし、逆に女の子ばかりの家では話し相手にもなるので女子学生を望むことが多い。子供たちが成長してすでに他出してしまった家では、男女の差はあまり気にしないようで、むしろ女の子だけだった農家が「うちのお父さんは男の子と一緒に働きたかった」ということで男子学生を望むこともある。子供の小さい家では、女子学生を望むことが多いようである。また、極めて少ない事例ではあるが、後継者のお嫁さん候補の一人として女子学生を望む農家もあり、実際に卒業後に実習した農家へ嫁いだ者もいる（この場合、実習受入時に「お嫁さん候補」として意識していたかどうかは不明である）。

どんな場合にせよ、学生の受入可否は農家側の女性の意向に強く左右される。これは通常の家事役割分担関係からみて当然のことで、他人を家に泊め、食事はもちろんのこと衣類の洗濯までお願いすることを考えれば、家事のほとんどを担う女性が賛成しなければ受入は不可能だからであり、宿泊実習の最大のポイントであるといえよう。

実施中の日程は各地域によって若干異なるが、現地の農協会議室ないし役場会議室等に集合し、昼食を食べて担当教員や現地担当者（多くの場合は農協営農指導担当者）より注意事項等の説明を行う。受入農家が集合と、開会式（顔合わせ式）を行い、各農家が学生を連れて自宅に戻って午後から農作業に従事する。

担当教員は翌日から各農家を巡回し、農家への御礼や学生への激励、健康状態についての質問等をする。期間中に全体で集まって受入農家との懇親会を開いてくれたり、そば打ちなどの農産物加工体験などをさせてくれる地域もある。

最終日には初日と同じように集まって閉会式を行い、受入農家と学生双方が感想やお礼を述べて解散する。終了後、学生は研修中の体験や聞き取った話をもとにレポートを提出する。基本的にはこのような日程で約1週間の研修を行っている。

3) 受入農家による評価

ある研修実施地域における学生受入農家の評価（感想）を第4-1表にまとめた。多くの農家は学生に対して良い評価をしているが、No.19のように極めて厳しく評価している農

第4-1表 ある実施地域での受け入れ農家による評価(感想)－2003年度、2004年度－

No.	研修学生について		感想	研修学生の受け入れに 農家側が期待すること
	良かった点	悪かった点		
1	女子学生だったため、わが家に花が 咲いたようだった。農作業の繁忙期と 重なったために大いに助かった。	なし	家族同様の生活で、別れがづらい。 農繁期と研修期間がピッタリ合ったの で、忙しさのあまり学生との会話が不 十分だった。	今の若者の考えが理解できること。
2	人柄が素直で仕事に集中してよく やった。	特になし	小規模農家だったので、せっかくの費 重な研修が実のあるものだったか心 配。	何事にも集中することの出来る人でな いと事故になる。気さくで何でも話の できる人間。
3	家族、地域の人々と明るく積極的に接 する態度に感心させられた。作業の 手伝い等についても快くやってくれて 大変助かった。	特になし	初めて受け入れてみて、食事、生活 サイクル等の不安があったが、わが家 の生活にとけ込んでくれて、特別扱い もせずに済んでホッとしている。	受け入れ先の家庭にとけ込もうとする 気持ち。
4	どんな仕事でも非常に興味をもち、一 所懸命働いてくれた。何よりもさわや かでハキハキしていて、何を言っても 「ハイ」と返事をしてくれ、挨拶の出来 る素晴らしい学生だった。	特になし	娘と同じ年頃の子を受け入れるのに 当たって、最初はやはり仕事を与える のに戸惑いも感じた。しかし約1週間 の研修が終わってしまうと思うと楽しさ だけが残っている自分にビックリして いる。	農家の仕事に触れて学生が逆に何か を感じてくれれば良いと思う。
5	一生懸命に仕事をしていて。	特になし	仕事が慣れた頃に研修終了なので、 1週間はあっという間だった。	自己主張が出来る学生。明るい人。
6	とても真面目で素直に何でもよく聞き 入れ、仕事に対しても意欲的だった。	特になし	家の中にとけこみ、家庭的なお付き合 いをした。このような学生なら、今後も ファームステイ研修を続けても良いか なと思った。	
7	一生懸命に仕事をしていて。	特になし	少し短い。	もう少し積極的だと良い。
8	良く気がつき、丁寧に仕事をしてくれ た。家の中のことも積極的に手伝って くれ、とても助かった。	特になし	自分の子どもたちのこれからの進路の 話なども聞くことができ、私たちにも子 どもたちにも良い刺激になり参考にな った。	これからの農業、食の大切さを考えた 社会人になってほしい。
9	イヤな顔もせずニコニコと作業してく れた。挨拶などの点でもさわやかで何 も言うことはない。何事にも一生懸命 取り組む姿が素敵だった。	なし	幼い頃からの教育(生きる力)が良 かったと見えて、人間的にも働くという 点からも100点満点をあげたい。	人間としての心が備わっているか、自 立しているか、責任感があるかなどの 点を見させてもらった。働かせようと して受け入れているわけではないので …。
10	素直で明るい。作業態度も良くできて いた。	なし	初めて受け入れたが、作業態度も良く 生活面もしっかりしていたので、わが 家としても良い経験をさせてもらった。	学生に農業を理解してもらうこと。
11	明るく勤勉な学生だと感心した。明大 生の心意気も感じた。家族の一員に なってもらい、一人娘の妹ができたよ うだった。	なし	年間通して忙しい時に大助かりした。 わが家としても有意義な1週間を体験 できた。	農業に関心を持ってもらい、農業関 係で活躍してくれることを期待してい る。
12	何事にも前向きに「次は何をします か?」「明日はどのような仕事です か?」など、積極的に仕事をしてくれ た。	なし	農家の仕事は思っていたより力を使 い、また機械に使われ、終わった時は 腰や腕が疲れていたようだった。	疲れた。でも良い思い出になる。若い 人の考えも素直に聞け、自分や家族 にとって刺激となった。仕事はか どった。
13	明るく、社交的。思っていたよりマジ メ。将来性が豊かそう?	少々	1年中で1番忙しい時に研修に来ても らい、大変助かった。	出身地、家庭の特性が異文化交流と なり、新しい将来の農業を少々学べ た。
14	何事にも素直に頑張ってくれた。	タバコの吸い過ぎに気を 付けて下さい。	自分の子どもたちも、今回の学生によ うな頑張り屋であってくれたらと思っ た。	夜、世間話も良いが、農業や社会に ついて話し合う課題があっても良いの ではないか。
15	疑問がある場合は積極的に質問する など、常に学ぶという意識が強かつ たように思う。	早朝の仕事は少し苦手 だったようだ。	あつという間だったな…ということ。	若い人が農業の実態を知って、少し でも感心を持っていたらいいことを期 待する。
16	すべてが初体験にもかかわらず、積 極的かつニコニコと笑顔で作業に取り 組んでいる態度は良かった。	声が小さい。はっきりと返 事をしないことがあった。 自分から質問することが 少なかった。	農繁期と受け入れが本当に重なって しまっ、正直なところ少し疲れた。学 生に対してのケアが十分だったか心 配。	明るく、楽しく研修をやっていること する意志を持って研修に望んでくれ れば良い。そして、作業で少しでも手助 けになれば…。
17	農業、農政に興味をもち、疑問のある ことは質問し、とても積極的だった。	体調を崩してしまっ たが残念だった。健康には 十分に注意してほしい。	農業を理解しようとする前向きさがあ る学生で将来を期待している。	農政や農業関連の業務に携わる時 に、常に農家の目線忘れずに取り 組んで欲しい。
18	作業に対し積極的に行動し、また作 業内容に対する理解も早く、的確で 非常に助かった。	研修後半、少し注意す るとヤケになって作業に当 たるような面が少し見受 けられた。	受け入れ農家に「すべて普段通り」と 言われるが、やはり他人が入ること でそういうわけにはいかない。結構、疲 れる。	労働の助けになり、また農業の良さ理 解者となってくれることを期待する。
19	特になし	日常生活がなってい ない。	何を目的に参加しているかわからな かった。	研修の趣旨をもっと理解して、目標を もって参加してほしい。

資料:研修初日に各農家へ配布し、最終日に回収したアンケート調査結果より。

家もいる。これは農家の問題ではなく、参加した学生の資質に起因するものであり、それを担当教員がどのように見抜くかは今後の課題であろう。

また、この評価からわかることは、農繁期に受け入れることの是非である。「忙しい時に大助かりした (No.11)」、「一番忙しい時期に来てもらい、大変助かった (No.13)」という作業面での積極的な評価の一方で、「正直なところ少し疲れた (No.16)」、「結構、疲れる (No.18)」という精神面・肉体面での消極的な評価、そして「忙しさのあまり学生との会話が不十分だった (No.1)」、「学生に対してのケアが十分だったか心配 (No.16)」という農繁期ゆえの課題があげられている。上述した高原野菜産地における学生アルバイトとの共存状態ほどではないにしても、農繁期にゆっくりと話すことは難しい。

また、各農家は「学生を育てる」、「若い人たちに農業を理解してもらおう」という姿勢で学生を受け入れていることにも注目すべきであろう。「学生が何かを感じてくれれば良い (No.4)」、「学生に農業を理解してもらおう (No.10)」、「農業に関心を持っていただけることを期待する (No.15)」、「農業の良き理解者となってくれることを期待する (No.18)」という意見は、大学側としては頭の下がる思いである。「働かせようとして受け入れているわけではない (No.9)」との意見は、書いてはいなくても他の農家も考えていることであり、人づくりに大きな貢献をしているととらえて良いのではないだろうか。

4) 参加学生の感想

ファームステイ研修に参加した学生は、終了後に作業日誌（毎日の作業内容と簡単な感想を記したA3版用紙1枚）と感想文（2,000字程度）を提出する。受入農家のようにアンケート形式で感想等を調べたことはないので、感想文の中から文章を抜粋して、参加学生の感想についても触れておく。

第4-2表は、前掲の第4-1表に示した農家19戸へ入った学生感想文からの抜粋である。なお、表の脚注にも示したように、各農家No.と学生は同じ順序で並んでいる訳ではないことに留意されたい。多少乱暴ではあるが、「全体の感想」「家族についての感想」「不安や課題」という3項目に分けて整理した。ただし、最後の学生は全体の感想が家族について述べているので、2つの項目を合わせた形にしてある。家族についての感想には、地域について述べているものを含んでいる。

学生感想文は、当然のことながら氏名が明記され、内容は成績とも関連するのではないかと考えて書いているはずである。また、受入農家にも配付することを事前に学生に伝えてあるため、無記名アンケートによる率直な感想とは異なることは避けられない。こうした限界を念頭に置きながら、感想を見ることにする。

全体の感想はおおむね高評価で、現場に触れることによって教室での講義内容を具体的に理解できるようになった、あるいは以後の講義に対する前向きな姿勢につながるというような「農学部学生」という立場からの感想がある。また、スーパー等で普段目にする農畜産物に対する見方が変わるという「消費者」の立場からの感想がある。逆に、農家出身者として将来の方向性が見えてきたというような「生産者」の立場からの感想、そして

第4-2表 ある実施地域での参加学生の感想—2003年度、2004年度—

No.	全体の感想	家族についての感想	不安や課題
1	黒板を使った授業より実際に農作業をすることで得ることは大きいんだなと思った。農業というものはどういふ産業かということ考えたときに、自然の生命活動を利用して生命に不可欠な食料を生産する、生命産業であることを直に感じることができた。	家族のつながりの強さに感動した。都会に比べ時間がゆとりを持って感じられ、家族1人1人が自由というか、自分達のペースで生活を楽しんでいるという、そんな感じがした。農家の方々にはとても優しくしていただき、人の心温かいうか温かさをすごく感じた。	実際に経営している農家にお世話になることで、農家の方たちの僕達に対する対応にとても不安があった。また、農家の一人として仕事に従事できるか？しかもお米の収穫の最盛期ということもあり不安は大きかった。
2	今の農政がどういふものではなく、現実が厳しいならその中で農家も努力しなければいけないという言葉が印象的だった。現実の農業の姿を目の当たりにして、教室で勉強していたことが現実味を帯び、またこれからの勉強にも生かしていけることばかりだった。	勉強の面だけでなく、家族の暖かさや絆を垣間見られて、たくさん大事なことを学び、有意義な時間を過ごすことができた。	倉庫には初めて見る機械がずらりと並んでいて、本当にここは農家なのかと心配になったが、倉庫に積んである袋詰にされたお米の量も半端なくあり、私は一瞬にして農家のイメージが変わった。
3	ここまで来るのには大変な苦労があったと思う。その苦労を少し知っただけで終わってしまったが、とても勉強になった実習だった。	ナシや梨、夕飯などいろいろごちそうになりました。おばあちゃんはおやつをくれたり、奥さんは10時くらいまで仕事をしてくれていての2人飯の用意をしてくれ、いい家にお世話になってよかった。	手の皮がむけたり、筋肉痛になったり大変だったが、その中でも結構楽しかったのは、作業中にすぐほりこぎが舞い、それを吸ってしまい風邪をひいてしまったことだ。その時、何十年も農業をやっていることの大変さが少しわかった気がした。
4	これからの世代の人たちの目を農業にむけるのは簡単なことではないが、しかし、農業がこのまま衰退してしまうことは本当に恐ろしい。とにかく農業に触れる機会を増やすべきだと思う。都会の小学校でも農業体験というのをどんどんやるべきだと思う。		僕の実家は農家だが、ほとんど農業、農作業に触れることがなかった。正直農業に対してあまりいい考えを持っていないが、今回ファームステイをしてみても、農業の楽しさが少しだけわかったと思う。
5	今後の農業、特に家族経営をよりよいものにしていくためには、私たち非農業従事者の理解と、JAや企業の今以上の今後を見据えた活動が必要である。それと同時に農業に対する意識改革も必要になってくるだろう。	どの作物の作業を見てても家族の重要性がうかがえる。長年一緒にやっていけるからこそ培える技術と信頼があるだろう。誰か一人で欠けたらこの連携は生まれないだろう。ここに家族経営の重要性がある。	農業を農業としてとらえるのではなく、1つの経営産業というように、今あるイメージを変えなければ農業が今以上になることはないのではないだろうか。失敗な言い方になるかもしれないが、お金を得る(儲ける)手段の1つとしてとらえなければいけない時代なのかもしれない。
6	ファームステイ研修を終えて、自分の人生の中でかなり意味のある何かを得た気がする。農作業は初体験だったので、かなり心配したが、丁寧に教えてもらい、一生懸命にできたと思う。	自分にとって第2の家族ができたようで、この上ない喜びが味わえた。いっしょで遊びにおいでという言葉はとても嬉しかった。機会があればまた必ず行きたい。	5泊6日ということでは長いかなと思ったが、あつというまに過ぎてしまい、自分としてはもう少し居たかった。
7	私は、マスコミの偏った情報に惑わされることなく、正しい判断ができる一消費者でありたいと強く思った。おじいちゃんやおばあちゃんまでもが腰を曲げて一生懸命作ってくれていること、作物ができてからには、私のしたような小さな作業など道が及ばないほどの作業がいくつも積み重なっていること、天候など自然に左右され、全く思い通りに行かないのだということを知ることができた。	みんな、とても明るくて優しく、テレビをみるよりも1日のことを話さず、吉きき物を大切に、嫌な事は一切口にしない、とても温かい家庭だった。また、親戚や近所の人とも本当に仲が良く、おすそ分けが当然の事のように行われていたことも素敵だった。	農業に携わる人には高齢者が多いのに、30kgもある米を運んだり、腰を曲げっぱなしで、稲を刈ったりという重労働が多々ある。このように、生産者が弱体化していること、さらに農業は太陽の恵みであるということ、私たち消費者は忘れてしまっているのではないかな。
8	実習4日間ほどの研修であったが、とても楽しく感じた。稲の様々な側面を、ほんの一部ではあるだろうが、見て触って体験して……これへ来なければどれも一生知らないままだった。自分自身一度味わったような、そんな満足感を得ている。	ちよろちよろしてばかりで、ご家族の皆様と年様たちには、多々ご迷惑をかけたしまったが、私は感謝の気持ちでいっぱいである。	名簿を見て、私は笑ってしまった。と言うより笑うしかなかった。「稲穂……?ウシ……?」水稲農家に決まった2人の親友が稲穂に話している様で、正直気が重くなった。慣性の欠けりも無いこの私が1週間も耐えられるはずがない。
9	僕の方では大変な体験ができた。	家族の皆さんに優しく接していただき、楽しい毎日を過ごせた。	最初は牛の大きさに圧倒され、作業もスムーズに行えず、迷惑をかけたと思う。
10	研修で初めて意識してわかったことは、生産者が絶えずビビリながら天候と戦い、農薬や肥料の問題と常日頃から向かい合っている農作物を育てていることだ。	人生の中で確実にいい経験をして、為になったと思う。このような研修ができたのも、農家の皆さんが熱心に親切にいろいろのことを教えてくれたからだと思う。	確か4日間のことばかりではなく、ドジもたくさんしたり、農作物に対して気をつかったりして慣れなくて辛かった部分もあった。
11	何気なくスーパーに並んでいる野菜や果物のひとつひとつが、生産者の皆さんが丹念に心を込め、自然と息を吐きながら育った「商品」であることを再認識させられた。	後継者不足、食料自給率低下が叫ばれているが、基幹産業としての農業の醍醐味や充実感を若者に何となく広めようとしている意気込みに感動した。	秋田と台風が重なり、冷たい雨が降り続く中での農作業は、思うようにはかどらず意外と重労働だった。建物の中での機具や箱詰めの出荷作業は神経を使う必要があったので気疲れした。
12	この実習を受けて良かったと思ったことは、大学入学以前より農業関係の仕事に就きたいと思うようになったことである。		田植え、稲刈り、乾燥、精米すべて機械でやっけり。手作業でできるとは思っていたけれど、期待はずれだった。
13	経済的にもとても豊かで、毎日ストレスを感じながら働いている都会のサラリーマンとはまるで逆で、農家の仕事をとても楽しんでやっていたのだと実感した。また、今の状況に満足せずには、どんどん新しいことに挑戦していくことが大切だと思った。	毎日規則正しく、しかも家族みんながとても仲が良く、とても楽しい生活だった。私の家は両親ともサラリーマンで帰宅が遅く、家族みんなで夕食を食べることが少なく、それが当たり前の生活になっていた。	ファームステイをする以前の農家に対するイメージは、労働が大変で、生活も大変なものとただ漠然と思っていた。
14	今回の研修は、これからの大学生活、何を目的に、何を目標にして毎日を送るかについて考えさせられた。	農業における家族や地域の重要性も見えた。家族だからこそ重要な仕事を任せることができ、そして家族だからこそ問題を解決できる。この農家には、しっかりとその仕組みがあったように感じた。	今回の研修は残念ながらイザゴも米も触れることができなかった。少々残念な部分があったが、「施設の手入れの面で例年できないことができて良かった」というご主人の言葉が嬉しかった。
15	私がファームステイに参加した理由は、私には田舎がないからである。「ここを田舎だ」と言ってくれたご主人のあたたかい心に応えるべく、今週末「帰郷」しようと思っている。	ご主人は近隣2,000人の顔を知っていると言っていた。私はここでは誰もが向き合っている、そう感じた。向き合っているからこそ思慮もなく、子供も非行に走らない、2,000人が大きな家族のようで、この環境を羨ましく思った。	農業を種としている人の中で1週間暮らしということが全く想像できなかったが、山間地はとても静かで穏やかで、時間がゆとりと、そして速く流れていた。
16	今まで将来農業をやることにどこか不安感をもてなっていた自分だが、研修を通して不安が持たずにワクワクしている。農業は厳しい時代だが、大学の中でも外でも勉強し、失敗を繰り返しながら、将来の夢を叶えるように努力したい。	実家の農業が知らない私にとって、他の農家の仕事や家族に初めて触れることができたのは貴重な経験になった。	私がお世話になった時は、稲刈りはほとんど終わりで、アスパラの出荷も少ない時で、私ができる仕事がいらないようだったが、勉強になる仕事をいろいろ探してくれてとても感謝している。
17	1週間を通して、家族のように受け入れてくれた農家の皆さんに感謝の気持ちで一杯である。農業経済学科という環境を最大限に生かし、精一杯勉強に励むことが最大の恩返しであると信じて頑張っていく。	毎日家族団らんの時間に作業についての話し合いをしたり、休日をきっちりとしてプライベートの時間をつくるなど、無理せず、健康で明るい家庭生活を築くことに努めているとのこと、ご家族が本当にみんな仲が良く、とてもいい家庭だなと思った。	ちよろちよろのお米の収穫が終わってしまい、仕事がいらないことでは残念だったが、そんな中でも模索しながら様々な仕事を覚えてもらった。
18	ファームステイで農家の生活に入ることにより、農業を農家の視点からみることで、非常に貴重な経験になった。	親戚だけでなく地域のつながりが太く、仲がよい地域の人たちも頻りに出入りし、お茶をしながら世間話をしたり、日々の悩みを相談したりする。とても開放的で深い信頼で地域が結ばれていると思った。	
19	お世話になった農家は成功者であると思う。なぜ成功したか。その大きな要因は家族の関係だと感じた。経営者だけが目標を立て経営向上を目指していても、そこに気持ちよく働いてくれるパートナーと家族の協力がなければ実現は難しい。家族で苦も楽も分かち合い、生活の内容をしっかりと把握し、各自責任を持ち、意欲的に活動できるのが最高である。農業において教育問題、後継者育成、男女共同参画の実現のために最も大切なのは「家族の絆」ではないか。そう考えさせられたファームステイだった。		

注: 1) 学生が提出した感想文からの抜粋。
2) 第4-1表に示した各農家で研修した学生。ただし、農家No.とは対応していない。
3) 「家族についての感想」には、地域に関する事項を含む。

研修を契機に“いなか”を持ちたい、あるいは第2のふるさとにしたいというような感想もある。このように、どのようなスタンスで感想を述べるかによって内容が異なるが、これは体験学習をする場合の意識の多様性としてとらえるべきではないだろうか。

さらに、あえて「家族についての感想」という項目を加えたのは、それだけ多くの学生が家族について、あるいは地域について感想文の中に盛り込んでいたからである。これは当然といえば当然である。本学における「ファームステイ研修（国内）」とは農場に滞在するのであり、農場と農家が不可分であるわが国では「ファームステイ＝ホームステイ」だから、感想の中に家族が多く出てくることになる。第2のふるさとと同じ「第2の家族」という表現、家族の絆に対する感動、一家団欒への羨望などが述べられており、都市（型）生活の中で失われた人と人とのつながりについて多くの学生が何かを感じていることがわかる。このように、「ファームステイ研修（国内）」は、一方で農業・農村そして食料について学ぶのであるが、それと並んで農家のみならず、家族のあり方、生き方を学ぶ場ともなっているのである。だからといって、農家の感想にあったように「日常生活がなくていい」学生について、それを教育するものではなく、むしろ農家生活にとけ込み、家族ときちんと付き合えてこそ学べるものであろう。

最後に、必ずしも十分ではないが、参加学生が事前の不安や事後の不満などについて整理した。農家の経営内容や作業内容で、果たして自分は手伝うことができるのだろうか、生活にとけ込むことができるのだろうかというのが事前に感じる不安である。見ず知らずの家で寝泊まりをするのだから、当然の不安であろう。また、農家のイメージを自分なりに描いている、実家が農家の場合にはそれを基準に想像して不安を感じる学生もいる。事後の不満が目立つのは作業内容についてであって、収穫ピーク時にフィットしなかった学生のなかに、収穫作業以外の作業をしたことを残念がっている者がいる。農家によって、作物によって、忙しい時期は異なるし、日程や受け入れ農家を決定した後の天候で最盛期が若干前後することもある。そのため、こうしたズレは不可避であるが、感想文にはこうした事態に各農家が工夫して対応してくれていることも記されている。

(5) 農家主導による学生受入事例－「農業体験ふれあい交流会」－

こうした受入農家の評価（感想）と関連して、茨城県女性農業士会下館支部が実施している「農業体験ふれあい交流会」について補足的に触れておく。同交流会は、女性農業士会下館支部が主催し、下館地域農業改良普及センター（現・筑西地域農業改良普及センター）が協力する形で2001年の夏から始められた。女性農業士会下館支部は、筑西市（下館市・関城町・明野町・協和町が2005年3月に合併）、下妻市、真壁町、大和村をエリアとし、2004年8月現在22名の女性農業士がいる。ふれあい体験交流会は茨城県内結城地域でも親子を対象に「ふれあい体験交流会」を開催しているが、下館支部では若い女性に限定していることが特徴である。

目的は「専業農家の主婦であり担い手である女性農業士自らが、短期ファームステイを

通して若い女性の農業・農村への関心を醸成するとともに、環境変化にたくましく対応している農業と農家生活の現状の理解促進を図ること」（開催要領による）であり、受入対象は「若い元気な女性（20名）」としていて多くは大学生である。明治大学の女子学生も、第1回から毎回数名が参加している⁽¹⁴⁾。

内容は「女性農業士宅へのファームステイと農家生活体験」が基本で、期間は宿泊としては最短の1泊2日となっている。初日の昼過ぎに集合し、女性農業士会員農家の畑での農作業体験や、郷土料理づくり、農産物加工体験などを全員で行って夕食をともにする。その後、各農家（農家1戸当たり1～2名）に分宿、翌日午前中は各戸で農作業体験、昼に再び全員で集まって昼食を食べながら感想を述べて交流をする。初日に行う会員農家での農作業体験や加工体験などは、毎年相談して違うメニューになっている⁽¹⁵⁾。

この取組を関連事例として取りあげたのは、大学生が参加者の主体であることと、農家側の考え方に共通点があるように思われるからである。交流会の参加費用は「1,000円（交通費自己負担）」である。日帰りの芋掘り体験のようなものであれば1,000円くらいが適当かも知れないが、全員での農作業体験・農産物加工体験・夕食、各戸での宿泊・朝食・農作業体験、そして全員での昼食（弁当）と意見交流会というメニュー全てを含んで1,000円なのである⁽¹⁶⁾。こうした農業体験の「相場」というようなものがあるとは思えないが、1,000円は最後の昼食（弁当）代程度であろう。

参加する学生から考えてみよう。東京から下館駅までは在来線で約2時間、電車賃は往復で3,200円余りかかる。参加費や初日の昼食代、小遣いを考えると、2日間で計5,000円弱の負担になるが、農業体験をしてみたいと思う学生にとって、交通費と1泊2食を含んでの費用としては相当リーズナブルである。現在のところ、知名度がそれほど高くないことは参加を希望する側にとってはありがたいことで、宣伝PRを積極的に行うことになれば、かなりの希望者が集まるのではないだろうか。

一方、受入側からみると、この交流会は自宅に参加者を宿泊させるのであるから、女性農業士とその家族の協力がなければ成功しない。1,000円という参加費用から考えてみてもビジネスとして交流会を行っているのではないことは確かであり、これで儲けようということはない。かといって、農作業体験はいわゆる「援農」とは違い、受入側にとって実質的なメリットがある訳ではない。また、交流会の前後に参加者が地元農産物や加工品の購入をすることもない。つまり、この交流会は「若い女性の農業・農村への関心を醸成」し「農業と農家生活の現状の理解促進を図る」という女性農業士会としての人づくりを通じた社会貢献、準備期間を含めた活動そのものから得られる精神的充実感、そして若い女性との意見交換から受ける元気や発想などが女性農業士にとって大きなプラスになるからこそ続いているのだと思われる。

こうした考え方、姿勢は、ファームステイ研修学生を無償で受け入れてくれている農家と共通するものがあるのではないだろうか。交流会は1泊2日と短期間で、会員農家の経営内容が多様であるため農繁期に当たる農家は宿泊受入をせずに2日目の昼食・意見交流会のみ参加するなど、ファームステイ研修とは異なる面もある。しかし、若者のためなら、

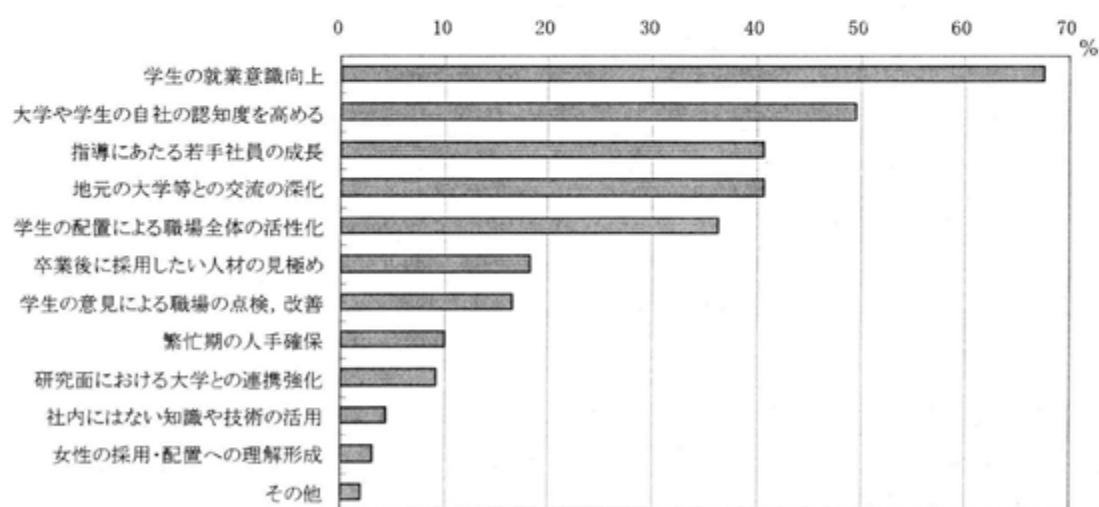
若者と交流できるなら、そして将来の農業・農村の理解者を育てるということを考えるなら、ボランティア的負担をしても協力したいと思う農家が少なくないのである。

(6) 大学生によるインターンシップの現状

教育という観点から、もう1つふれておかねばならないのは「ジョブ・インターンシップ」についてである。インターンシップとは「企業が学生を一定期間受け入れ、仕事を体験させる仕組み（アルバイトなど雇用によるものを除く。）」「学生が在学中に自らの専攻、将来のキャリアに関連した就業体験を行うこと」である¹⁷⁾。本稿で触れたファームステイ研修は、まさにインターンシップの範疇に属するものである。

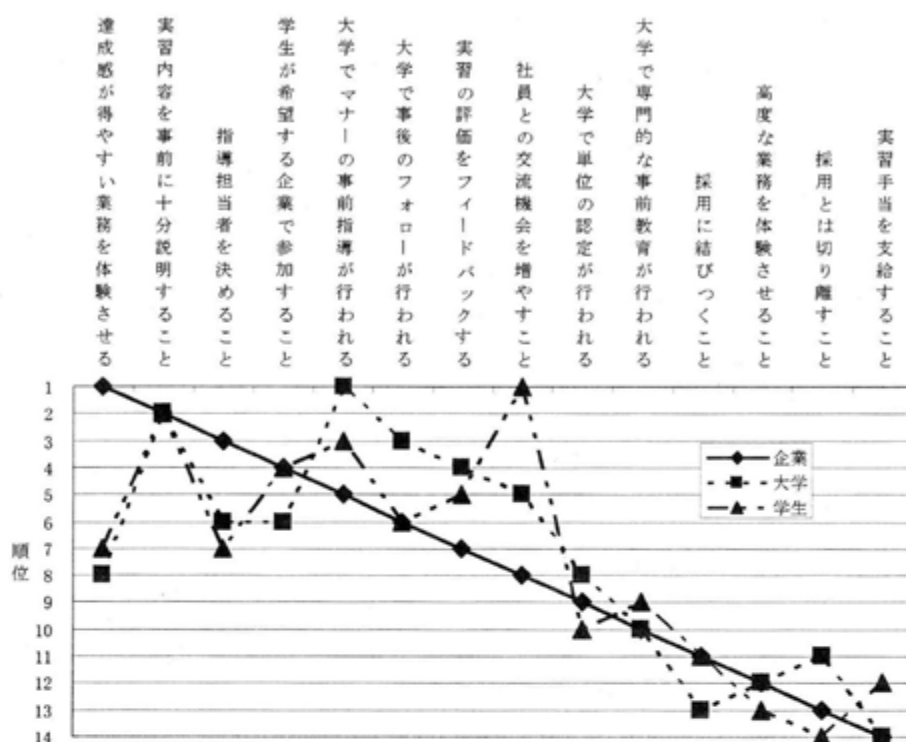
近年、各大学ではインターンシップを積極的に導入し、それを単位認定するようになってきており、厚生労働省でも研究会を組織して実態を整理している。それによると、企業が大学生を受け入れる目的は第4-1図の通りで、「学生の就業意識向上」、「自社の認知度向上」、「若手社員の教育」、「大学との交流深化」、「学生が入ることによる職場の活性化」が上位を占めている。これに対して「繁忙期の人手確保」という目的は低く、実習学生を無償アルバイトとして位置づけるようなことにはなっていない。研究会報告書では、学生からすればアルバイトやパート業務の一部などの軽易な業務体験での満足度は低く、インターンシップで行う仕事は「達成感を感じられるものにする工夫が望まれる」と指摘している¹⁸⁾。

この点に関して、インターンシップの効果を高めるためのポイントについての回答結果をみよう。第4-2図は、受入企業、大学、そして参加学生に同じ質問をしたものを、順位で区分して示したものである。これによれば、企業は「達成感が得やすい業務を体験させる」が1位となっていて、企業は研究会報告書の指摘通りに対応していることになるが、



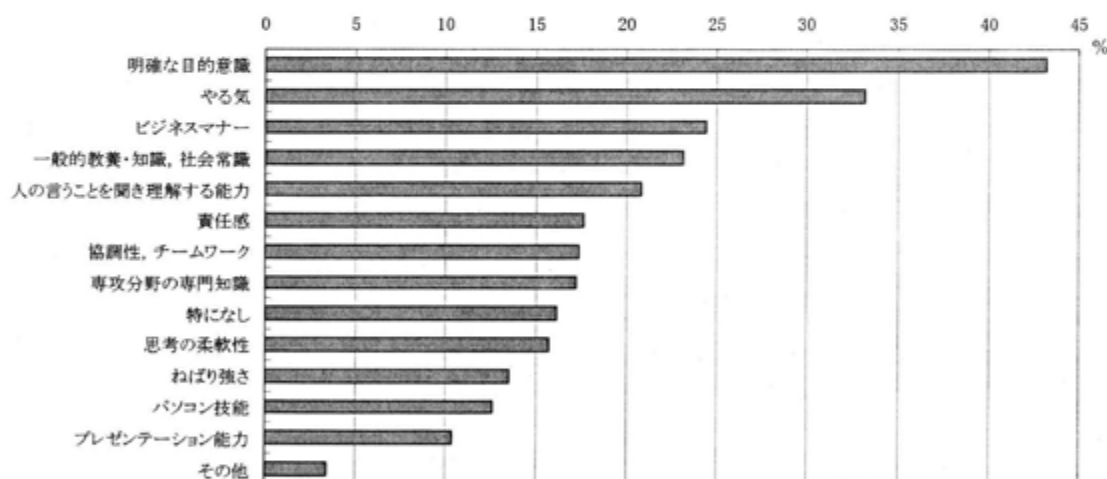
第4-1図 大学生を受け入れるにあたっての目的(企業調査、複数回答)

資料:厚生労働省、「インターンシップ推進のための調査研究委員会報告書(別冊「図表」)」2005年。



第4-2図 インターンシップの効果をもつために有効なこと(回答率順位)

資料:厚生労働省、「インターンシップ推進のための調査研究委員会報告書(別冊「図表」)」2005年。
注:選択肢は「その他」を除いてある。



第4-3図 学生に備えてほしい能力・資質(企業調査、複数回答)

資料:厚生労働省、「インターンシップ推進のための調査研究委員会報告書(別冊「図表」)」2005年。

学生の回答1位は「社員との交流機会を増やすこと」であって、仕事の内容以上に人間的なつながりを求めているのではないかと推察される。ただし、「指導担当者を決めること」が若干低い順位になっているので、少し矛盾した結果ではある。さらに、実習内容やマナーについての事前学習へのニーズが高くなっていることも特徴であろう。学生を送り出す大学は、「マナーの事前指導」を1位に挙げているが、学外研修を一度でも担当した教員

なら納得できる結果ではないかと思う。なお、受入企業からみた学生に求める能力・資質は第4-3図の通りである。マナーが大切であることももちろんであるが、やはり最も重要なのは目的意識とやる気であって、逆に言えば高い意識をもって研修する学生は、それなりのマナーで対応できるということなのかも知れない。

(7)問題点の整理

本稿では、「ファームステイ研修（国内）」を手がかりに、学生と農家との接点について実態を紹介した。若干重複することもあるが、これまで実施してきた中で感じられる問題点をいくつか指摘しておこう。

第1に、「猫の手も借りたいほど忙しい」農繁期に大学生という若い労働力が入ることは作業面で助かる面もあるだろうが、農作業だけでも手一杯の家族（特に女性）に大きな負担となる。さらに、学生の個人差がかなり大きいことも問題となる。前掲第4-1表にあるように、人間的にも、働くという点からも100点満点という学生もいれば、日常生活さえきちんとできない学生がいる。ところが、これは受け入れて初めてわかることで、期間中に病気になったり怪我をする学生とともに、農家にとって極めて大きな負担となる。とりわけ生活面の問題は、「ふれあい交流会」のように1泊2日程度のものや、宿泊を伴わないインターンシップの場合には表面化しにくいだろう。参加学生を見分けるチェックシートのようなものがあると良い。仕事上のビジネスマナーとともに、事前学習でどこまで意識を高められるかにかかっているといえよう。

第2に、アルバイト学生との関係とともに外国人研修生などの存在も影響するようになってきたことである。近年、アジア等からの外国人研修生（実態としては補助的農業労働力）の受入に積極的なところがあり、こうした地域では学生を受け入れてくれるような規模の農家に外国人研修生が入ることが多い。すると、たった1週間しか研修しない学生より長期間にわたって滞在する外国人研修生の方が仕事も覚えてくれるし、何より働く意欲が違っているから、大学生の受入継続が困難になってしまう。「教育の一環として実施されるインターンシップは、企業側が受入体制・カリキュラムを整えた上で実施される実務体験であり、アルバイトなどフルに正常の労働力として活用するケースとは異なることを明確化する必要がある」との指摘がある⁽¹⁹⁾。今後、比較的規模の大きな雇用型経営での受入が主体になるようであれば、アルバイトや外国人研修生と競合するのではなく、上手に融合できる研修体制をつくる必要があるように思う。

これと関連して第3に、学生の労働に対する見方である。「ふれあい交流会」のようにボランティア的に協力しようという意識の強い農家は、実のところ継続して受け入れてもらうことは難しい。むしろ学生受入の継続性という点で見れば、学生を補助労働力と割り切って働かせてくれる農家は、受入に積極的になってくれる。もちろん、そういうところではアルバイトや外国人研修生という第2の問題が発生しやすいのであるが、若い学生に農業・農村を理解してもらおう、いろいろなことを体験させてあげようと頑張ってくれる

農家は、受入の主体となる女性が疲れてしまって継続することが難しいのである。大学側は「家族と同様に」とはお願いしているが、No.18の農家が回答しているように「言うは易く行うは難し」であろう。食事にしても「普段よりは一品多く」ということになってしまふのが常である。

また第4に、学生が期待する作業内容と実際に行う作業内容の違いである。学生の感想文にあったように、収穫作業ではなく管理作業だけに終わってしまう場合の不満もその1つである。また、農産物直売や観光的要素を有した農園経営をしている農家では、農作業よりも販売・サービス労働が主になってしまうことがあり、期間中1度も農作業をせずに観光農園でお茶のサービスだけをしていた事例もあった。農業とは収穫という結果だけではなく、むしろそこに至る作業が大切であるし、これからの農業経営を考えれば、消費者と接することも重要な仕事である。しかし、期待したものと違う研修内容であった学生が不満を表明することも少なくない。ファームステイ研修とは何かということを改めて考える必要があるだろう。

そして第5に、受入農家および実質的な調整をしてくれる農協担当者の協力なしには決して実現できないのが「ファームステイ研修」だということを改めて指摘しなければならない。学生に大きな満足感を与え、その後の学習、いや人生にさえ大きな影響を与えてくれる研修は、キャンパスでの講義やゼミと同等の重要性を有しているが、それは受入農家の献身的な好意の上で行われているのである。現在は無償で学生受入をお願いしているが、この形態のままで継続可能かどうかについて今後検討する必要性が出てくるかもしれない。

なお、今後は海外での研修を含め、大学側のプログラムだけではなく、すでにインターンシップで行われているような受入側が主体性をもった対応も必要になるかもしれない。厚生労働省の報告書は「大学が直接関与しない企業主導のインターンシップも増加しており、その場合、学生自らが主体的に選択、参加の意思表示を行うことから、一段と明確な目的意識をもって臨むケースが多いと考えられ、学生の満足度や効果は、大学が関与するものと同程度かそれ以上となっている場合もある⁽²⁾」と指摘している。

いずれにしても、現在の農村には若い学生に農業を理解してもらおう、彼ら彼女らを育てよう、あるいは交流しようと考え、家族をあげて受け入れてくれる農家が数多く存在する。これらの農家の経営が今後も維持・発展し、継続的に多くの学生に経験を積ませることができると期待するとともに、こうした活動・交流は必ず日本農業にとってもプラスになると信じている。

注(1) ここで想定しているWHは、参加者は農業労働力を提供し、受入農家が宿泊・食事の一部または全部を提供することである。本来的な意味は「二国間の協定に基づいて、最長1年間 異なった文化の中で休暇を楽しみながら、その間の滞在資金を補うために付随的に就労することを認める特別な制度」(社団法人日本WH協会資料)とされている。

(2) 筆者自身が、農業経済学科以外の学科の実習内容について論ずることはできないことはいうまでもない。あえて付言するなら、可能であれば技術系の学科においても現実の農業経営で実習することが望ましいことは間違いな

いと思われる。

- (3) 明治大学農学部では、学部の将来構想を策定する過程で、2004年度卒業生（2005年3月卒業）に対するアンケート調査を実施し、そこでの結果でファームステイ研修に対する満足度が高くなっていた。
- (4) 「ファームステイ研修（国内）」、「ファームステイ研修（海外）」はカリキュラムでは同じ科目として扱い、運用上2つに分けているだけなので、科目数としては「農場実習」、「農村調査実習」と合わせて3つとなる。なお、以前は付属農場での実習が「農場実習Ⅰ」、学外での農家宿泊実習が「農場実習Ⅱ」という科目名だった。2000年度より海外での実施が始まり、「農場実習Ⅱ」を「ファームステイ研修」に変更、「農場実習Ⅰ」については2004年度より「農場実習」に改称した。なお、ここに掲げた研修、実習は全て選択科目である。
- (5) 明治大学農学部の付属農場は、2004年度末までは千葉市緑区の誉田農場、山梨県富士吉田市の富士吉田農場があったが、富士吉田農場については売却が決定した。現在、キャンパスに近い川崎市麻生区に統合した農場を設置する計画が進行しており、完成後は誉田農場の機能も新農場に移行する。
- (6) 誉田農場、富士吉田農場には、それぞれ誉田寮、富士吉田寮という学生厚生施設が付属しており、実習期間中は寮において合宿する。なお、実習期間中を除けば、両厚生施設ともに他の厚生施設と同様にゼミ合宿や課外活動に利用されている。
- (7) 畜産部門は富士吉田農場のみ。
- (8) 上述したように、付属農場は誉田農場、富士吉田農場の2農場あったので、学生は両方の農場で1回ずつの実習を行うようになっていた。
- (9) 明治大学農学部付属農場での農場実習については、若干古いものであるが、牧野玄之助「農業経営からみた大学附属農場に関する研究—その1—」『明治大学農学部研究報告』第43号、1978年所収、51～59ページに経緯が紹介されており、農場の位置づけの難しさがわかる。
- (10) 農村調査実習は多くのゼミが夏期休業中に実施しているが、海外に出かける場合は夏期休業中の交通費が極めて割高になってしまうため、前期ないし後期の授業期間中に実施することになる。
- (11) 筆者は英国でゼミ学生を農家民宿に泊めた経験があるが、農家は親切に対応してくれて、民宿経営には携わっていないご主人が宿泊の翌日に農場を案内・説明してくれた。もちろん無料であったが、このような形の交流なら可能かもしれない。竹本田持『泊まりある記・英国農家民宿』三嶺書房、1998年、116～118ページ参照。
- (12) わが国はオーストラリア（1980年～）、ニュージーランド（85年～）、カナダ（86年～）、韓国（99年～）、フランス（99年～）、ドイツ（2000年～）、イギリス（2001年～）との間でWHについての協定を結んでいる（社団法人日本WH協会資料）。一例として、オーストラリア政府でWHを担当する移民多文化先住民問題省（Department of Immigration and Multicultural and Indigenous Affairs）は、Working Holiday Maker Programとして取り組んでいる。<http://www.immi.gov.au/facts/49whm.htm>参照。
- (13) 現在の実施地域以外に、これまで新潟県羽茂町（現・佐渡市、柿）、新潟県中之島町（現・長岡市、米）、山形県寒河江市（さくらんぼ）、群馬県嬬恋村（高原野菜）、長野県中野市（きのこ、りんご）、茨城県鉾田町（メロン）、千葉県白子町（施設園芸等）、千葉県内各地（千葉県農業法人協会＝現・千葉県農業協会の会員農家）などでも実施した。
- (14) 筆者は第1、2、4回目の交流会で、2日目の意見交流会に参加させていただいている。
- (15) 日程は試行錯誤的に毎回リニューアルされており、当初の頃は全員での加工体験は2日目午前中であって、そのまま昼食・意見交流会というものだった。
- (16) 2001年の第1回目は参加費無料で行われ、さすがに参加した学生からは「無料というのでは申し訳ない」という意見もあった。その後、メンバーで相談した結果、第2回目から1,000円になった。なお、結城地域で行われている親子対象の「ふれあい交流会」は参加者1人500円での芋掘りで、掘った芋は持ち帰ることができる。
- (17) 厚生労働省職業安定局若年者雇用対策室「インターンシップ推進のための調査研究委員会報告書」2005年、2ページ
- (18) 同上書、17ページ。
- (19) 「日経連インターンシップ推進研究会報告書」2001年参照。
- (20) 同上書、18ページ。

第5章 わが国の農村におけるWHの課題と展望

農林水産政策研究所 鈴木源太郎

これまで、長野県飯田市におけるアンケート調査および宮崎県西米良村と長野県飯田市、岩手県遠野市における事例調査をもとに、WHの展開をみてきた。冒頭にも記したように、WHはわが国におけるGTの中でも農業・農村に相当程度「深く接する」機会を与え得る仕組みである。それは、単なる観光農業でもなければ、その場限りの「ふれあい」を提供する取組でもない。GTをあくまでツーリズムの一環として狭義にとらえるなら、WHはGTの枠に収まる取組ではないという認識も示した。今日のWHの展開を考えると、「体験」がキーワードとなることはいうまでもないが、これまでの分析で明らかのように、WHにおける体験は単なる農（作）業体験にとどまらず、農業経営、農村生活全般を「丸ごと」体験し得る取組として評価することができよう。

現在、わが国の農村型WHは、地域振興に向けた主要な取組の1つとして注目を浴びているが、本報告書の検討は、これにどんな示唆を与えることができたのだろうか。本報告書の構成を振り返りながら、各章を要約しておこう。

まず、第1章では、わが国における農村型WHの定義と成立過程、その位置づけについて解説を行った。農村型WHは、地域定住に結びつく可能性を内包していることなどについて説明を加えた。

第2章では、長野県飯田市におけるWH参加者アンケート調査結果をもとに、参加者の属性、参加理由、WHへの満足度と評価、再参加意志、定住意志について分析した。参加者の属性（年齢・性別、家族パターン、農家との関わり等）によって、参加理由や満足する点が異なっているものの、飯田市のWHに対して参加者はおおむね高い評価を与えており、そのことが再参加意志の高さにも表れていた。また参加者の多くが農村への定住意志を示しており、WHは農村定住へのワンステップとして位置づけられることを確認した。

続く第3章では、西米良村、飯田市、遠野市の3事例の実態分析を行った。各地における取り組み姿勢の異同や実績の分析を通じて、現状の農村型WHの課題と今後の展開方向を検討した。検討の結果、農村型WHは、①参加者と受入者の経済関係の不均衡問題、②受入先確保の問題、③参加者と受入先のマッチング問題、④コーディネートの問題、の4つの課題を抱えていることが明らかとなった。

第4章では、WHに関連して、大学における学外実習の実態を報告した。大学における学外実習（農家宿泊実習）は、その根底に流れる考え方がWHのそれと相当程度共通している。ここでは、実習の効果を維持しながら受入農家における負担をいかに軽減するかという問題、アルバイトや外国人研修生との競合問題、農家側の受入姿勢に関する問題、農作業以外の作業時に従事した場合の問題、受入側のコーディネート体制の問題などが整理された。

このように、本報告書では農村型WHに関連する今日的課題を、多様な角度から分析してきた。本章では最後に、わが国における体験型GTとWHの関係について整理を行う。そのことを通じて、WHが受入主体や地域社会に与える影響を明らかにし、報告を締めくくりたい。

(1)わが国における体験型GTとWHの位置づけ

本報告書で取りあげたWHが、わが国で受け入れられるようになった背景には、体験型GTの興隆がある。元来、ツーリズムとしてのGTは、農村への単なる日帰り観光旅行に端を発したと考えられるが、今日では、そこへ宿泊、とりわけ農家民泊を加えた形態が出現するとともに、農家レストランなど農村独自の「食」を提供する取組や「農に関わる体験」をサービスとして付加する取組へと展開している。特に後者の「農に関わる体験」をサービスとして提供するGTは、体験型GTとして近年特に注目を集めている。しかし、今日全国で行われている体験型GTの多くは、簡便さや安全性を重視するあまり、安易な「うわべだけの体験」や「お膳立てされた体験」になってしまっているのも事実である。こうした現状への反省から、農業現場で、その時、その場でしか為し得ない「ホンモノ体験」を提供する動きが生じてきた。本報告書で取りあげたWHが、都市農村交流の一形態として広がりつつある背景には、こうした「ホンモノ体験」を提供するGTの取組が存在しているのである。

また、WHの生まれた背景を考える上で、GTの諸形態を都市の参加者側の関わりから分析した宮崎〔8〕の分類は興味深い。氏の分類によれば、わが国のGTは、①あちこちの農村を広く浅く回る「ビジター型」、②特定の農村にこだわりを持って年間に何回も訪れる「リピーター型」、③特定の農村の応援団となり、特定の農村を応援しながらアグリライフを完成させようとする「サポーター型」、④農村移住によりアグリライフを完成させようとする段階の「農村移住希望者」の4つのタイプに分かれる。本報告書で明らかのように、WH参加者は、このうち③「サポーター型」を中心に、若干の②「リピーター型」と④「農村移住希望者」を含む人々と考えられる。

ところで、WHは以上述べた体験型GTの一形態としては異質な面が多い。体験型GTは旅行としてのツーリズムが主軸となった取組であり、「体験」はそこに付加されたオプションである。そこでは、あたかも旅行会社が企画するオプションツアーに料金が課金されるように体験料がかかる。体験は商品であり、それに対する対価を参加者が払うべきものである。一方、WHはこうした構造に基づかない。WH参加者が提供するのは「労働」であり、それに対して受入農家側は労賃または宿泊や食事といった労働対価を支払う。WHにおける「参加者はお客様ではない」という発想はまさにここを出発点としている。つまり経済的な支払い関係からするとWHは明らかにGTとは異質である。

しかし、全面的にGTと異なるかという点、そう言い切れない部分が多いのも事実である。受入農家側も参加者側も、WHを「住み込みの農業アルバイト」と混同したりしない

ように、双方の交流面の意義を少なからず認識しているはずである。これはツーリズムの持つ「人と人とのふれあい」的な要素をWHが持っていることの表れであり、GTとWHの結節点である。

いずれにしても、WHは、GTの諸形態の中でより農業・農村との関連が深い形態である。ただし、WHの特徴である農家の「労働力補完」は、それ自体に強い目的意識が働いているため、WHをツーリズムとしての余暇の過ごし方の一手段と位置づけ、GTの枠の中で議論すべき取組かどうかやや疑問もある。1つの考え方として、前述の宮崎〔8〕のようにGTを広義にとらえ、労働力補完的な取組まで含める考え方もできようが、GTの定義を「農山漁村における滞在型の余暇活動」と厳密に解するなら、本論で取りあげるWHはGTの枠組みから外れるのかもしれない。実際のところ、前述のアンケート結果にも明らかなように、WHを単なる余暇活動ととらえている参加者は極めて少ないのである。

いずれの地域も参加者を増加させるためには制度的・物理的な制約があるとはいえ、このWHを契機として、地域社会との交流を深め、参加者、受入農家、地域それぞれの満足度を総合的に高めるために、これから為すべきことは多い。

(2)WHが個別農業経営に与える影響と課題

さて最後に、WHに関する報告の締めくくりとして、WHが個別農業経営に与える影響および課題と地域農業や集落等の活性化への貢献に着目して、若干のまとめをしておこう。

まず、WHが個別農業経営に与える影響と課題について述べよう。これについては、農家労働力の補完や労働面からみた農業経営の効率化といった「農業経営への影響」という側面と、WH参加者との交流による「農家生活への影響」という側面とに分けて考察する必要がある。

現在のWHは、農家労働力の補完や労働面からみた農業経営の効率化にどの程度寄与しているであろうか。本論の事例分析ではこの点について詳細に検討を行った。そこでは、単純作業の補完労働力として、受入者は参加者に対して一定の評価を与えていた。西米良村では花き部門、飯田市では果樹部門を中心に補完労働力としての役割を果たしていた。とはいえ、参加者の労働が農業経営の効率化に寄与していたかという点では、いささか疑問が残ったのも事実である。新規作物導入等、経営の拡大を目的に今後受入人数を増やす意向を持つ受入者も若干見受けられたものの、今回調査した限りでは、WH導入によって経営規模を拡大した受入農家は存在しなかった。大部分の受入者は現状の農業経営の維持を目的にWHを実施していた。

また、数が少ないとはいえ、労働力補完面における経営貢献の課題が浮上したケースもあった。受入者が最低賃金を参加者に支払う形式のWHを実施する西米良村において最大の受入先となっていたA社は、農産加工の作業補助として多くのWH参加者を受け入れている。しかし、作業効率の面から経営者の反応は必ずしも芳しくなかった。その理由として、仕事を十分に覚えるには期間が短すぎることで、非熟練作業とはいえスタッフが作業手

順を教える手間がかかることなどが挙げられている。こうした問題は、賃金支払いの仕組みを持たない飯田方式においても顕在化する可能性がある。飯田のWH受入農家の多くは、同市が実施している体験教育旅行の受入先ともなっていたが、こうした受入先におけるWHでは、体験教育旅行の際に受領可能な体験収入がない分、受入農家に対する労働力としての貢献度が問われることになるからである。その適例であるL氏は、自分の支払っている対価（＝宿泊、食事等のサービス）に見合う働きをWH参加者に十分してもらえていないと感じていた。

一方WHにおける交流は、農家生活に対して少なからぬ好影響を与えている。実態調査から浮かび上がる受入農家の反応は、肯定的評価が基調となっている。普段目にすることのない様々な職業や経歴を持った参加者と一緒に農作業に携わる経験は、受入農家にとって新鮮なものとして映っているといつてよい。「高齢専業農家の生き甲斐を生み出した」、「毎年新たな参加者と会えるのが楽しみ」といった感想は、いずれの地域でもしばしば聞かれた。反面、特に飯田方式についてみれば、3度の食事の準備が負担であるとか、受入初期には民泊への抵抗感があったという意見も一定程度存在していた。

以上総じてみれば、WHは、個別農業経営に対して農業経営・農家生活両面においてプラスの影響を与えていると評価できる。ただ、補完労働力としての働きについて疑問視する経営も存在しており、参加者の労働力の質の向上が課題となる。

(3)WHを通じた地域農業、集落の活性化への貢献

WHが地域農業や集落にどの程度関わり、地域組織、集落の活性化に結びついているのかという点については、評価が難しい。個別農業経営に生き甲斐や楽しみを提供するWHが実施されることで、確かに受入農家の経営が発展する可能性もある。そのことが地域農業に間接的に良い効果をもたらすことはあろう。しかし、地域社会とWH参加者との関わりが薄いという状況は、いずれの地域でもほぼ同様であった。

飯田市の場合は、市内のWH受入農家が特定の数集落に集中しており、受入登録農家の拡大には集落内農家同士の口コミが大きく影響している。特に市内T地区は、集落内でWHの認知率が高く、WHを応援していこうとする雰囲気づくりに成功している。また、西米良村では、村を挙げてWHを支援する体制を作ることが、WH発足当初より目標として掲げられている。村の商店街を散歩するWH参加者がいれば、必ず声をかけ、一言会話を交わすといった具合である。

しかし、西米良村のように人口の少ない地域においても、全ての村民にWHをバックアップする姿勢がみられるところまでは達していないように感じた。まして、多くの都市人口を抱える飯田市では、「未だにWHの存在すら知らない市民がいる」（市役所担当者の話）状況である。参加者と受入者との関係に限定されがちな現行のWHの仕組みから、いかに広く地域農業全体に及ぶ効果を見いだすか。この点は、今後の取組に向けた課題であろう。

今回、我々が課題としたWHは、都市農村交流の新しい形の1つとして、各方面から大変注目されている取組である。バブル時代にはリゾート開発に翻弄され、取ってつけたように農村への回帰が謳われた。こうしたかつてのGTの流れと明確に一線を画すWHは、農村独自の営農システムの中に労働力として都市住民を組み込むという大胆な発想から生まれ、都市住民に「ホンモノ」の農業に接する貴重な機会を与えた。その結果、WHを通じて農業に接した参加者が、一部といえども農村の熱心な支持者となり、中には農村定住を果たした者さえ生まれている。また、飯田市へのアンケート調査結果が示唆するように、WH参加者の中には多くの農村定住希望者が含まれている。彼らにとってWHは農家や地域社会に接することのできる貴重な機会であり、定住に向けたワンステップにもなっている。

WHが新たな都市農村交流の流れの1つとして認められ、全国に普及し始めている現状に関係各者は自信を持ってよい。さらに付け加えるなら、現状の仕組みに甘んじず、特に交流側面の充実と改善を一層進めれば、参加者、受入農家のみならず地域農業の発展にも寄与する取組となるに違いない。

今後のWHの展開に期待したい。

参考文献

- [1] 青木辰司（2004）『グリーン・ツーリズム実践の社会学』、丸善。
- [2] 井上和衛（2002）『ライフスタイルの変化とグリーン・ツーリズム』、筑波書房。
- [3] 井上弘司（2002）「食農教育で農都両棲の地域づくりー女性と高齢者が輝く飯田市の都市農村交流事業ー」、『自然と人間を結ぶ164』、農文協。
- [4] 井上弘司（2004）「地域の環境・文化を学びあい高めあう、ツーリズムは地域づくりー飯田市型ツーリズムの取り組みと向かう先ー」、『自然と人間を結ぶ173 特集「地域づくり」と「ほんもの体験」』、農文協。
- [5] シンクタンク宮崎（1998）『総合研究開発機構（NIRA）報告書・成熟社会の地域間交流ー国内版ワーキングホリデーの導入へ向けてー』、（株）シンクタンク宮崎。
- [6] 多方一成（2000）『文化経済学ライブラリー7 グリーン・ツーリズムの文化経済学』、芙蓉書房出版。
- [7] 前田豪（2004）『西米良村の挑戦ーワーキングホリデービレッジー』、勉脈社。
- [8] 宮崎猛（2002）『これからのグリーン・ツーリズムーヨーロッパ型から東アジア型へー』、家の光協会。
- [9] 山崎光博・小山善彦・大島順子（1993）『グリーン・ツーリズム』、家の光協会。

巻末附表1 飯田市WHアンケートにおける自由回答

1. WHに対する要望等について(Q21)

区分	地域 ブロック	年齢	性別	参加理由1位	Q21WHに対する要望等について
実施時期 に関する 要望	関東	20歳代	女	農業・農作業に対する関心	5月、11月のWH募集以外の時期で、桃や梨などにも参加したいです。インターネットに、この月にはこういう作業をやるといった例を載せていただきたいです。HPを介すると市役所の方にもTELLやすくなります。
	関東	60歳代 以上	男	農業・農作業に対する関心	春と秋の農繁期(年2回の定期WH)でのWH案内の他にも援農できる作業はあるはず。情報提供(HP上で良い)の拡大を図って欲しい。四季に渡るWHができれば種々の作業が体験でき、満足度も向上すると考える。
	関東	20歳代	男	農業・農作業に対する関心	日帰り型WHの導入(民宿をあつせん)。作業別に区分けし、インターネットで予約できるようにし、時間の空いた土日などにも気軽に参加できるようにしてはいいかなと思う。
	近畿	40歳代	女	農業・農作業に対する関心	通年に渡ってボランティアのニーズがあるのであれば、半年ごと程度に「何月のいつ頃、〇〇で忙しい」といった目安を教えてもらえると良い。現地の状況がわかれば「この時期なら行ける」と思えるような気がします。
	東海	40歳代	男	都会生活のリフレッシュ	リピーターは年間を通じた農業作業カリキュラムの提示に対して、選択する方法も検討してほしい。
	北陸	50歳代	男	農業・農作業に対する関心	春の企画はGW期間中ですが、公共交通機関等を利用して参加の場合は、手配等困難な場合もあるので、時期を多少ずらしてほしい。
	関東	20歳代	女	農業・農作業に対する関心	年2回ではなく、例えば6月や7月にも実施して欲しい。
	関東	40歳代	女	農業・農作業に対する関心	会社を休まずに参加できる日程を組んで欲しい。初めて飯田に行く人には、観光の時間も欲しい。
	関東	20歳代	女	農業・農作業に対する関心	土日や祝日にあわせた開催が多いようですが、平日にもあれば行きやすいかなと思います。
実施期間 に関する 要望	九州・ 沖縄	60歳代 以上	女	農業・農作業に対する関心	雨天の場合、実質働ける期間が短くなる。せめて一週間くらいのWHにしたらどうでしょう。
	関東	50歳代	男	農業・農作業に対する関心	3泊4日→6泊7日程度の期間にできないでしょうか。もちろん受け入れていただく農家が希望するんですが。
	関東	60歳代 以上	男	農業・農作業に対する関心	WH募集期間の制約のため利用しにくい。もう少し短期間のお手伝い感覚で採用することを希望。
	近畿	30歳代	男	農家生活・コミュニケーションへの関心	日程の選択幅を広げて欲しい。3泊4日を日程指定されるのは会社員として難しい。1泊2日や2泊3日などの短期型なら、年に数回通えると思う。
	東海	40歳代	男	-	1泊、2泊のコースがあれば、参加者が多くなる。私も行きたいけど、忙しくてなかなか行けないです。
交通費に に関する 要望	関東	60歳代 以上	男	農業・農作業に対する関心	農業支援の目的で年間を通じて参加したいと思いますが、東京からは交通費が負担になります。いくらかでも補助があればより気軽に参加できると考えます。
	近畿	30歳代	男	農家生活・コミュニケーションへの関心	交通費援助をご検討ください。
	関東	60歳代 以上	女	農業・農作業に対する関心	交通費を負担していただけるよう、お願いいたします。
	関東	60歳代 以上	男	農業・農作業に対する関心	最近、往復の交通費が負担で、参加していません。ご検討願えればありがたいです。基礎的費用(食事・宿泊等)は現状でも負担せず済んでいます。
	関東	30歳代	女	都会生活のリフレッシュ	同地域から同時期に参加する人が多い時には、都内からマイクロバスを出して欲しい。車で行くのは運転が疲れるし、高速代も高いから。
交通の便 に関する 要望	近畿	60歳代 以上	女	農家生活・コミュニケーションへの関心	高速バスで上飯田に着後、集合場所までの交通の便が悪い。
	関東	30歳代	男	農業・農作業に対する関心	集合時間にちょうど良い電車がありません。車での参加者はどうにでも時間調整できますが、電車組は「きついです」。
農家の負担軽減、 参加者の 気兼ねに に関する 要望	関東	50歳代	女	農業・農作業に対する関心	他の施設へ宿泊して、昼食、10時、15時のお茶だけ農家でお世話になることはできないか？農繁期は受け入れ農家の女性が大変です。仕事をしながら5回の食事の支度は大変だと思います。農家の負担が軽減されれば、参加者も気を遣わずに仕事に専念できる。
	東海	40歳代	女	農業・農作業に対する関心	無料または安い価格で宿泊施設に泊まり、そこから農家へ通うという選択もあるといいと思う。農家の方は、自分たちがボランティアをしているという意識をお持ちでしたが、せめて食住分くらいは働かせて欲しいと思いました。
	関東	50歳代	女	農業・農作業に対する関心	農家への民泊は、交流もあり、楽しくもありましたが、やはり心苦しいです。公民館のようなところの方が、泊まる側としては気楽です。
	関東	40歳代	女	農業・農作業に対する関心	受入農家の負担が大きいうちに感じた。もう少しラフにしても良いように思う。
	関東	30歳代	女	農業・農作業に対する関心	食事の支度が負担になるという話を聞き、「わざわざ大変なのに受け入れてもらっている」、「迷惑なのでは」という気持ちになりました。2～3戸の農家で共同で食事をするなど、何か負担を軽くする方法があればと思いました。
	関東	60歳代 以上	男	農家生活・コミュニケーションへの関心	民泊無料を有料にした方が気楽に参加できると思う。
	関東	40歳代	男	農業・農作業に対する関心	受入農家の意見を反映し、農家、事務局とも無理のない継続的な運営を心がけて欲しい。GWや秋の連休は農家も家族と時間を過ごしたいのではないかなと思うので、うまくローテーションできればと思います。
	近畿	30歳代	男	-	どちらかが負担になる関係ではなく、お互いにハッピーな関係を作りたい(今のところは、そうなっていると思います)。
事務手続き、WHの 仕組みに に関する 要望	関東	30歳代	男	農業・農作業に対する関心	インターネット上で参加受付が可能になったら便利だと思う。
	関東	30歳代	男	農業・農作業に対する関心	応募をした後、できれば早めに参加可否の返事が欲しい。
	近畿	30歳代	男	農業・農作業に対する関心	早い段階(時期)で参加申込書を送付しても、受入の直前2～3週前にならないと受入決定通知が来ないので、予定を立てにくい。もう少し早めに返事をいただけたらありがたい。
	関東	20歳代	女	農家生活・コミュニケーションへの関心	WH前に農家の方とのやりとりができれば良かったと思う。何の事前連絡もなく不安だった。
	東海	30歳代	男	農業・農作業に対する関心	WH終了日にアンケートなど調査した方がよいと思います。
	関東	50歳代	女	農業・農作業に対する関心	受け入れ農家の家族構成を知らせて欲しいです。

区分	地域 ブロック	年齢	性別	参加理由1位	Q21WHに対する要望等について
事務手続き、WHの仕組みに関する要望(続き)	関東	60歳代以上	男	農業・農作業に対する関心	農家の家族構成、作業内容の詳細が事前に分かった方がよい。
	関東	60歳代以上	男	農業・農作業に対する関心	各農家の具体的な農作業の見学(研修)会のあとに、各自の希望を加味して、各農家へ配属した方がよいと思う。
	関東	30歳代	女	農業・農作業に対する関心	WH登録申込書の応募動機が、受入農家に伝達されていなかったもので、きちんと伝えてほしい。
	東北	50歳代	男	農業・農作業に対する関心	潜在中に一度様子を見に来て欲しい。
	東海	40歳代	男	農業・農作業に対する関心	農作業の中でも、せん定や摘果はかなり難しい作業で、ほとんど協力できませんでした。私のような素人でも参加できるように、あらかじめ作業内容を予習していけるような配慮があれば良かったかも知れません。
	近畿	30歳代	男	農業・農作業に対する関心	飯田市のWHの受け入れ農家がたくさんあるということは存じています。本来なら、いろいろな農家へお手伝いに伺うべきと思いますが、1戸の農家が担っている作業は多岐に渡っているため、数回参加しただけでは、なかなか戦力になっていないのでは？と感じています。参加者が同じ農家で受入を希望した場合は、できるだけ希望に沿うよう調整していただきたいと思っています。同じ農家で何度もお手伝いすることで、より深く農業を理解することに繋がると考えます。
	関東	30歳代	女	農業・農作業に対する関心	参加申込書に参加者の参加目的を書かせる欄を作った方がよいと思う。同じ農家に全く目的意識の違う人が配属されると、ちょっとやりにくいような気がする。
交流のあり方に関する要望	関東	40歳代	男	農家生活・コミュニケーションへの関心	交流の時間を増やしてほしい。
	関東	30歳代	男	農家生活・コミュニケーションへの関心	いろんな農家を経験したいが、ある農家と付き合いが始まると、他の農家を指名するのに気が引ける。また、リピーターの多い農家には入ることは難しそう。結果、なかなか広く交流ができない。
	関東	60歳代以上	女	農業・農作業に対する関心	WHでは、いろいろな農作業を通じて交流をしたい。民泊は気を遣わないで、普段の生活にとけ込みたい。
	関東	50歳代	男	農業・農作業に対する関心	交流に関しては移住者の先輩の話だけでなく、実際の生活ぶりが見学できる時間があればもっと実感できるといった。
	関東	60歳代以上	男	農業・農作業に対する関心	交流については、時間的に少なすぎると感じている。交流とは何か、何を伝えたいのか、何を知って欲しいのか、何が問題なのか、WHに参加した意志はあるが実行されないのは、等々について交流しあう時間・場所があればと思います。
	東北	50歳代	男	農業・農作業に対する関心	食事にあまり気を遣って欲しくない。
	東海	60歳代以上	男	農業・農作業に対する関心	お客様扱いでなく、家族として受け入れてほしい。
交流会に関する要望	関東	50歳代	女	農業・農作業に対する関心	交流会が何か1つのテーマを持って話しをするとか、皆で一緒に農作業等のビデオを見たりとかも良いと思います。
	関東	30歳代	女	農家生活・コミュニケーションへの関心	交流会では、もっと皆と知り合いになれるような工夫があると良いと思います。多くの人と知り合いたいので。
	関東	50歳代	女	農家生活・コミュニケーションへの関心	WH参加者同士の交流はそんなに魅力あるものではなかったです。もう少し参加者に興味のあるテーマを企画して欲しいです。
	関東	30歳代	女	農業・農作業に対する関心	交流会だけでは魅力を感じることができませんでした。席の配置や進行にももう少し工夫をしてもらって、参加者同士や他の農家の人たちと気軽に話せる雰囲気を作ってもらえたら、また参加したいと思っています。残念ながら、今までの交流会は費用に見合う価値は感じられませんでした。
	近畿	40歳代	男	都会生活のリフレッシュ	最終日前の交流会は別にいらないのでは？あくまでそれぞれの受入農家での交流を重視した方がよいのでは。
	関東	30歳代	男	農業・農作業に対する関心	参加者の交流会は、あまり必要性を感じません。受け入れ側の人たちに負担をかけているように思います。
	中国	20歳代	男	農業・農作業に対する関心	交流会は特に必要と思わない。(参加側の意見として)。受入側としては、おそらく参加者のことをより知りたいのだと思うが。
	近畿	40歳代	男	農業・農作業に対する関心	WH発足後2年目くらいの頃は、交流会にかなり意気込みが感じられたが、その数回あとの時は、マンネリ化した印象を受けた。
	近畿	40歳代	女	農業・農作業に対する関心	他のWH参加者には興味がないので、交流会への参加が選択制になったのは良いことです。
	-	-	-	農業・農作業に対する関心	交流には興味がない。交流会はやめても良いのでは。
	関東	50歳代	女	農業・農作業に対する関心	交流会には一考の余地があると思います。
	関東	50歳代	男	農業・農作業に対する関心	交流会がつまらなかった。定住を本当に望んでいるのかと疑問に思った。
	関東	20歳代	女	農業・農作業に対する関心	交流会の際、出していたいただいた食事ですが、添加物や農薬の有無が気になり、手を付けられませんでした。
	関東	50歳代	女	農業・農作業に対する関心	交流会の費用を安くしてほしい。
	甲信	50歳代	男	農業・農作業に対する関心	交流会の費用と食事の内容がアンバランスと思われる。他で夕食を取った方がよいのでは？
WHのPRに関する要望	関東	30歳代	男	農業・農作業に対する関心	飯田市のWHのような制度への参加を希望している人は、たくさんいると思います。自分は飯田市のHPで知りましたが、HPだけでなく、もっといろいろな手段、媒体を活用してPRして良いのではと思います。
	関東	30歳代	男	農業・農作業に対する関心	飯田WH通信のようなものを、郵送やHPに載せてもらえるとうれしいです。
	甲信	30歳代	男	農業・農作業に対する関心	各受入農家で記入する参加者の体験日記を、例えばWHのHPなどに載せれば、具体的だし、良いPRになると思います。
	関東	50歳代	男	農業・農作業に対する関心	春と秋のイベント時の結果を男女別、年齢別などで紹介いただければ、次に別の作業をしたい人にも、選択の幅が出ると思う。
	東海	40歳代	男	-	県や市のHPの連携が悪いと思うので改善してほしい。
	関東	50歳代	女	農業・農作業に対する関心	とても良い制度だと思うので、マスメディア等を使って、広報を充実し、都市部の人にも記事として紹介してみてもどうですか。
	近畿	60歳代以上	男	農業・農作業に対する関心	情報はたくさん欲しい。農家には満足しています。
観光に対する要望	関東	30歳代	男	農業・農作業に対する関心	1日市内見学などがあると、もっと良かったと思います。
	近畿	30歳代	男	農家生活・コミュニケーションへの関心	飯田市を知るためにも、1日くらい観光があっても良いと思います。

区分	地域 ブロック	年齢	性別	参加理由1位	Q21WHに対する要望等について
観光に対する要望 (続き)	近畿	40歳代	男	都会生活のリフレッシュ	飯田の名所、観光地を訪ねるといっても1つの手かも知れない。作業の合間を縫ってということになるが、是非一考を。
	関東	20歳代	女	農業・農作業に対する関心	WHの開会式の際、農作業の手伝いは「観光や遊び気分で行わないで下さい」とおっしゃっています。でも、その場で観光のパンフレットをいただきますよね。私は毎回農作業の手伝いのみをして帰ります。もし、飯田の良いところや簡単な観光案内をしていただけたらとより飯田のことが分かり、「楽しめるところだ」とか「また、来たいなあ」と思う方が増えるのではないのでしょうか。
子連れ (障害者) 参加に対する要望	関東	30歳代	男	農家生活・コミュニケーションへの関心	今年は子供ができたので、WHに参加できそうにありません。小さな子供がいても参加できるようにになればよいと思うのですが。
	関東	40歳代	男	農業・農作業に対する関心	農作業優先で家族の同行(特に子供)は認めていなかったと記憶している。30歳代後半～40歳代半ば頃の父親単独での参加は困難。子供にも飯田の良さを体験させたい。
	関東	50歳代	男	農業・農作業に対する関心	家族での農作業体験参加を受け入れてほしい。
	関東	50歳代	女	都会生活のリフレッシュ	この事業に障害者の方が参加できるようにになれば、もっと良いかと思う。
その他	近畿	50歳代	男	農家生活・コミュニケーションへの関心	農作業がしたいときと、単に農家の人たちとふれ合いたいときがあります。どちらも経験したいです。
	東海	20歳代	女	農業・農作業に対する関心	未婚の人たちのためのお見合いイベントのようになって欲しくない。また、それを目的として参加していると思われたくない。
	近畿	30歳代	男	-	生産現場だけでなく、販売、流通現場も見たい。例えば、農協内の仕分けなど。
	関東	30歳代	男	農業・農作業に対する関心	もう少し多岐に渡る農作業を体験できると良いと思います。
	関東	60歳代以上	男	農業・農作業に対する関心	もっと幅広く飯田市のこと(文化など)、農業、農作業のことが知りたいと思います。これまでお世話になった農家の方に配慮しながら、もう少し広い範囲で農業実習をしてみたい。
	関東	30歳代	男	農業・農作業に対する関心	将来的に農業を目指そうとしている人と、ただの手伝いをしたいという人を初めから分けた方が良いと思う。農業を「体験」したいと思っているのに、お客様扱いされているような感じが嫌だ。
	関東	50歳代	女	農業・農作業に対する関心	個々の受入農家の受け入れ姿勢に、温度差を感じる。また、希望した作業が全くできなかったのも、改善してもらいたい。また、お客様扱いしませんというのはやめて欲しい。交通費をかけ、ボランティアとして働く意味をもう一度しっかり担当者で考えてもらいたい。

2. 受入農家に対するメッセージについて(Q22(1))

区分	地域 ブロック	年齢	性別	参加理由1位	Q22(1)受入農家に対するメッセージ
感謝の気持ち	関東	50歳代	男	農業・農作業に対する関心	見ず知らずの私たちを快く受け入れてくれる農家の皆さんの心の深さをありがたく思っています。
	近畿	30歳代	女	農業・農作業に対する関心	お客様扱いせず、労力を提供するのが目的とされていますが、全く見ず知らずの私たちを快く迎えて、親切にいただいたことをとてもうれしく思い、感謝の気持ちで一杯です。
	関東	50歳代	女	農業・農作業に対する関心	受入農家の方々には、気を遣っていただき、ありがとうございました。人の情に触れ、心温まる思いをしました。感謝しています。
	関東	50歳代	女	農業・農作業に対する関心	いつも温かく持たせて頂き、ありがとうございました。農作業もいろいろな事を教えて下さって感謝しています。今後ともよろしくお願いします。
	関東	30歳代	男	農業・農作業に対する関心	大した作業もしていないのに食事などの身の回りのことを心を込めて対応していただけるのには、とてもありがたく感じました。
	関東	50歳代	男	農業・農作業に対する関心	温かく迎えていただき感謝しています。自然の中で良い経験ができました。スーパーの店頭で市田柿を見つけると飯田を思い出します。
	関東	60歳代以上	男	農業・農作業に対する関心	朝昼晩の食事、大変気を遣っていただきありがとうございます。3度の食事の準備は大変なことだと思っています。
	近畿	20歳代	女	農業・農作業に対する関心	当時結婚前の主人と2人で体験させていただきました。つたないお手伝いしかできませんでしたが、とても良い時間と経験をさせていただきました。今でも良く思い出します。ありがとうございました。
	近畿	60歳代以上	女	農業・農作業に対する関心	Mさん方に、5～7回くらい行かせていただきました。ご家族の方がとても親身になってくださり、いろいろ話ができました。親戚の家に行ったようでした。ふるさとができたような気持ちです。感謝しています。
	関東	40歳代	男	農業・農作業に対する関心	S様、就農について真剣に考えていただき、ありがとうございました。休暇の折は、福井の妻の実家で農作業をするので、なかなか飯田へは伺えませんが、機会があれば是非参加したいと思っていますので、その時はよろしくお願いします。
	関東	40歳代	女	農業・農作業に対する関心	大変温かい対応をしていただき、感謝しています。農業を「見学」に来ただけなのに、こんなにさせていただいて良いものかと、恐縮しました。
	東海	30歳代	男	-	約5年程、春と秋に受け入れてもらっており、大変ありがたく思っています。私の中では、かなり大きな割合を占めている交流です。今後も変わらぬおつきあい、よろしくお願いします。
	関東	60歳代以上	男	農業・農作業に対する関心	農家の人々の人柄の良さに惹かれました。ありがとうございました。
	甲信	30歳代	男	農業・農作業に対する関心	過去3回参加しましたが、3戸とも全て温かく迎えていただき大変感謝しています。
	関東	30歳代	女	農業・農作業に対する関心	農村の生活のすばらしさがよく分かりました。ありがとうございました。
	関東	20歳代	男	農業・農作業に対する関心	本当に最高の体験でした！一生忘れません！温かい家族に囲まれ、たくさんの花に囲まれ、私はおそらく世界で1番幸せでした。是非またおじゃましたいです。ありがとうございました！
	関東	20歳代	女	農家生活・コミュニケーションへの関心	都会でのせかせかした生活を忘れさせてくださる温かな人柄に感謝しています。
	関東	30歳代	女	農業・農作業に対する関心	朝から晩までとても忙しい時期に本当に良くしてくださり、感謝しています。ご家族全員が健康で毎日過ごされておりますことを祈っています。また機会があれば、是非行きたいです。

区分	地域 ブロック	年齢	性別	参加理由1位	Q22(1)受入農家に対するメッセージ
肯定的な 感想	関東	50歳代	女	農家生活・コミュニケーションへの関心	おもてなしの心遣いがある受け入れ農家の対応は良かったです。
	関東	20歳代	女	農家生活・コミュニケーションへの関心	久しぶりに温かい家庭を見て心が和みました。私はこれから8年は仕事に生きますが、家族との生活は何にも勝るパワーとなることを知りました。いつか同じような家庭を持ちたいとあこがれています。
	近畿	30歳代	男	農業・農作業に対する関心	これといったいい仕事もできないのに、寝る場所や手作りのおいしくてたくさんのお食事、お風呂など用意いただきまして、本当にありがたかったです。本当の農業は自然(天候や害虫)との戦いであり、販売ルートの確保であり、大変な使う作業の連続とお察しします。私は春の5月の3日間、太陽の下で健康的に緑に向かって無邪気に時を過ごす場をくださったことをありがたく思っています。作業とは関係ありませんが、どのお宅も私たちのような都市郊外の住宅地にある家よりもご立派で、かつ長年生活されている風格があり、うらやましく思いました。
	関東	30歳代	女	農業・農作業に対する関心	初めて参加の時は不安がありましたが、家族の一員のように温かく、自然体で受け入れてくれたこと、大変うれしかったです。
	関東	20歳代	女	農業・農作業に対する関心	1さんご一家でお世話になりました。今もふと思い出すことがあり、とても懐かしいです。全く申し分なくすてきな時間を過ごせました。
	関東	40歳代	男	都会生活のリフレッシュ	家族のように、温かくしていただいたので、とても懐かしい思い出のようになっていいます。
	関東	30歳代	女	農業・農作業に対する関心	私がお世話になった農家さんは、Mさんの家でした。Mさんは女性としての立場を活かしながら、立派ですてきな考え方をもち、前向きな農業をしていて、女性として、目標としたい方でした。
	近畿	20歳代	女	農業・農作業に対する関心	受入農家の方がとても良い方で、どちらも気を遣うことなく、リラックスした雰囲気の中で生活が送れました。今では直接農家の方と連絡を取り、時間があれば作業のお手伝いをさせていただいています。
	東海	60歳代以上	男	農業・農作業に対する関心	T家、O家ともインターネットや情報社会の先端を行っていると感じました。名古屋へお越しの際は是非お立ち寄りください。
	東海	40歳代	男	農業・農作業に対する関心	ご飯おいしかったです。地酒のどぶろくは、結構きつかったです。お酒に適した果樹が収穫できないせいか、地ワインはどうやら無いようですね。きちんと貢献できた作業は、肥料散布ともや拾いだけだったようです。どうも失礼しました。
	関東	60歳代以上	女	農業・農作業に対する関心	都市と農村の生活の違いから、WHへ参加してみても感じること、普段の暮らしの中でお世話になるので、信頼感とコミュニケーションをぶつけ合いたいということです。
	関東	40歳代	男	農業・農作業に対する関心	もっと若ければ、入り婿ならいい、かつ新種のうまいリンゴを作りたいぞ！家族総出で働けるって、最高だね。
	東海	30歳代	男	農業・農作業に対する関心	WHに参加した人に対して、お客様扱いしないところが大変良いと思います。農業の厳しさ、失敗談を多く語って欲しいと思います。
	関東	50歳代	男	農業・農作業に対する関心	お客様扱いがないのが良いので、私は今のままでよいと思います。
	関東	40歳代	女	農業・農作業に対する関心	毎年、温かく迎えてくださるので、早6年も通ってしまいました。飯田の土を踏むこと、農家の方に出会うこと、柿の収穫に携われることが、1年のうちで1番の楽しみになっています。この日を楽しみに働いているといっても良いくらいです。これからも長くおつきあいいただけますよう、よろしく願いいたします。
	関東	30歳代	女	農業・農作業に対する関心	飯田市のWHには2回参加しましたが、良い思い出となっています。受入農家の家族の方には、本当に良くしていただいたと思います。ギブアンドテイク以上に大事にもらえ、逆に恐縮するほどだった。適度な距離感は難しい事だと思うが、参加する側としては居心地良かったです。
	東海	20歳代	女	農家生活・コミュニケーションへの関心	皆さん良い方ばかりで、飯田に親戚ができたような気がします。
	関東	60歳代以上	女	農業・農作業に対する関心	参加できたのは春と秋の2回だけでしたが、楽しかった。もう少し若いときにWHを知っていたら良かったのと思います。
	関東	40歳代	男	都会生活のリフレッシュ	知らない他人を家に寝泊りさせることは、気も遣いますし、苦労があるかと思えます。途中で帰ってしまうような勝手な人もいたと聞きます。飯田の方は、皆さん心が広く、すぐ打ち解けられたので、安心して過ごせました。
	関東	20歳代	女	農業・農作業に対する関心	体に気をつけて、おいしい作物を作ってください。飯田の干し柿が東京で売っていた際にはうれしかったです。
	近畿	20歳代	女	都会生活のリフレッシュ	家族のように気さくに受け入れていただいて、とてもうれしいです。これからも飯田のこと、農業のこと、いろいろ教えて下さい。
	関東	50歳代	女	農業・農作業に対する関心	農業未経験者ですが、一生懸命やらせていただきました。多少でもお役に立ったでしょうか。農家の仕事の大変さがよくわかりました。他人の家に泊めていただける機会がないので、貴重な体験ができ、人と関わり、楽しく過ごさせてもらいました。新しい親戚ができたようです。
	関東	50歳代	女	農業・農作業に対する関心	飯田での体験はとても貴重でした。水田の風景の美しさも忘れられないものでした。農作業の合間に畑で参加者(3名)と農家のご夫婦とで遠くの山を見ながらお茶のみをした楽しさは忘れられません。
	関東	20歳代	女	農業・農作業に対する関心	1さんご一家でお世話になりました。今もふと思い出すことがあり、とても懐かしいです。全く申し分なくすてきな時間を過ごせました。
	関東	30歳代	男	農業・農作業に対する関心	他人を受け入れることはしんどいことと思いますが、とても評価されるべき行為だと思います。
	関東	30歳代	女	農業・農作業に対する関心	おいしい野菜をいただき、楽しく過ごせました。今の農業は科学的なんだと思いました。
	関東	30歳代	女	農業・農作業に対する関心	今まで、2カ所の農家さんに滞在させてもらいましたが、どちらも大変心地よく過ごすことができました。飯田の農家さんは、受け入れ、交流が大変上手だと思います。また、何度でも行きたいくらいです。
	関東	20歳代	女	農業・農作業に対する関心	都会から飯田へ行って、まず最初に思うのは、「空気がきれい」だということです。その次には「人が優しい」ということです。飯田へ行くたび、癒されています。

区分	地域 ブロック	年齢	性別	参加理由1位	Q22(1)受入農家に対するメッセージ
再参加の 希望	近畿	50歳代	男	農家生活・コミュニケーションへの関心	お父さん、お母さんお元気ですか。今年も行きたかったけど、上記の理由で行けず、すみません。透き通ったりんご畑の中でのりんごの花の香り、お母さんが作ってくれたご飯、みんなうまかった。機会があればまた遊びに行かせてください。ありがとうございます。
	東海	40歳代	男	農業・農作業に対する関心	M様、お世話になりました。人事異動でしばらくは見通しが立ちませんが、また伺いたいと思っています。また、よろしく願いいたします。
	東海	20歳代	女	農業・農作業に対する関心	本当に感謝している。大学生の時、2度ほどお世話になり、また伺いたいが、社会人となり忙しくなって、なかなかその機会が得られず残念だが、電話などで連絡をしている。
	関東	40歳代	男	農業・農作業に対する関心	いつも家族同様に扱っていただき、ありがとうございます。最近ようやく自分も「戦力」になってきたなと思うようになりました。できれば年間を通じて、毎日作物とふれ合って、責任と自信を深めたいです。
	近畿	30歳代	男	農業・農作業に対する関心	過去に参加した2回とも、期待以上に温かく受入していただいたことに感謝しています。飯田の穏やかな時の流れが、都会で疲れた私の心を癒してくれています。今後も、できるだけ多く参加したいです。その節はよろしくご指導下さい。
	関東	20歳代	男	農業・農作業に対する関心	その折は大変お世話になりました。最近、公私ともに忙しく、参加していませんが、また機会がありましたらよろしく願いいたします。
	東北	20歳代	女	農家生活・コミュニケーションへの関心	T様、その節は大変お世話になり、ありがとうございます。あの時の体験がとても楽しく、今でも時々思い出しては懐かしい気分になっています。機会を見つけて、またきつと伺います。それまで、お体にお気を付けて、お過ごしください。
	関東	30歳代	男	農業・農作業に対する関心	大変有意義な時間を過ごさせていただきました。また、機会があれば参加させていただきたいと思っております。
	関東	30歳代	男	農家生活・コミュニケーションへの関心	今年のGWは行けませんが、また必ずお伺いします。WHの受け入れは、負担も大きいと思いますが、とても素晴らしい取組だと思いますので、頑張ってください。
	関東	60歳代以上	男	農家生活・コミュニケーションへの関心	計4回ほどWHに参加しましたが、現在は会社勤めに入ったためWHを休ませていただいています。また、機会をみて再び参加するつもりです。体力は十分です。
	関東	40歳代	男	農業・農作業に対する関心	転職後、飯田から遠ざかってしまっていますが、次回訪問する機会にはこれまで通り接してください。
WHの継続希望	関東	50歳代	男	農業・農作業に対する関心	WHに毎回参加したいと思っているが、仕事が変わり休みが取れない状況にある。定年(60歳)になったら、また行きたいと思っている。
	関東	30歳代	女	農業・農作業に対する関心	本業の向上及びWH受け入れの継続を希望します。
	関東	50歳代	男	農業・農作業に対する関心	未経験の私たちですが、本当に役に立っているのでしょうか？少し心配ですが、一生懸命作業させていただきました。今後も継続して受入よろしく願いいたします。
	近畿	30歳代	男	農業・農作業に対する関心	このような社会情勢の中、農業を続けていくのは極めて難しいと思います。しかし、このような社会だからこそとても価値のあることです。それを次世代に健全な形で継続していくことを共に考え、実行していきましょう。応援しています。
	関東	60歳代以上	男	-	なかなか忙しくて参加できませんが、WHは今後も継続してください。
	関東	30歳代	男	農業・農作業に対する関心	農業は大変重要な職業です。日本の農業生産を増やせるよう、頑張ってください。リンゴも重要な果物なので、続けていって欲しい。
農業のあり方について	九州・沖縄	60歳代以上	女	農業・農作業に対する関心	参加する人が皆、常識があれば良いのですが、そうでない人を受け入れた時の苦労は大変かと思われます。でも、WHという企画はすばらしいと思いますので、できる限り続けて欲しいです。
	関東	60歳代以上	男	農業・農作業に対する関心	農業は自然に左右されたいへんな職業です。でも人間が生きていくための大切な職業ですから、いつまでも元気で続けていって欲しいです。
定住の希望	関東	60歳代以上	男	農業・農作業に対する関心	大変苦勞の多い仕事「農業」は、全ての人が豊かに生きていくための基本です。もっとも尊敬できる仕事です。自然豊かな環境に恵まれた飯田市の農家の皆さん、これからも農業発展のために頑張ってください。
	関東	20歳代	男	農家生活・コミュニケーションへの関心	平成15年に2回、Mさん一家にお世話になったSと申します。自分は、自然と身近になれる仕事をしたかったので、1次産業(農業・林業)を体験し、林業に就きたいと思っていましたが、今の仕事で、主任となってしまう、仕事を変えるどころの話ではなくなってしまいました。ですが、自分に与えられている仕事をこなし、本当に自分が何をしたいのかを見極めることができれば、自然の近くで暮らしたいと思っています。
意見・感想	関東	60歳代以上	男	農業・農作業に対する関心	果樹園、農作物のオーナー募集をしてはいかがでしょうか。
	関東	30歳代	男	農業・農作業に対する関心	無理をして良いところを見せようと思わず、普段通りの作業、生活の中に招き入れることはできないでしょうか。難しいかも知れませんが、「農家というのはこういうものだ」というようなものをお見せいただくと、とてもうれしいです。
	東海	40歳代	女	農業・農作業に対する関心	働かせるのはかわいそうだと思うかもしれませんが、働いてみたい人がいるようですが、働いてみたくて参加している人がいることを知っておいて下さい。
	関東	30歳代	男	農業・農作業に対する関心	いろいろとお世話いただき、感謝しています。ただ、夕食後、農作業でお疲れなのかすぐ就寝されてしまい、いろいろとお話を聞きたいと思っていたので、その点で少し残念でした。
	関東	50歳代	女	農業・農作業に対する関心	受け入れ農家の方へは食事などについてとても気を遣ってしまいます。他の施設で朝、晩を過ごして、昼だけ受け入れ農家でお世話になるような施設があると良いと思いますが、受け入れ農家が忙しいときは、主婦に負担が大きすぎると思います(他に何か妙案はないでしょうか)。
WHへの不満	近畿	40歳代	男	都会生活のリフレッシュ	WH後、その時その年のりんごの収穫物をいただいた以外、こちらから何度か郵便によるアプローチするも、一切音沙汰がない。寂しいです。
	近畿	50歳代	女	農業・農作業に対する関心	ご馳走や豪華な食事ではなくかまわないので、農家手作りの料理が食べたかった。WHの参加者が持ち込む料理は断ってください。毎日、参加者が作る豪華でたくさんの食べきれない料理がテーブル一杯に並べられていた。大きな買い物袋に入れて参加者が東京から持ってきていた。見返り目当ての作戦のようにも映った。
	近畿	40歳代	女	農業・農作業に対する関心	ボランティアとして参加するので、お客様扱いされたいとは思いません。しかし、いかにも「タダ(無料)の労働力だから」といった感じで、使えるうちに使おうといわんばかりに、あれもこれも雑用をさせられると、気持ちが冷めてしまいます。生活面でもお忙しいのはわかりますが、農作業に的を絞って集中的に作業させて欲しいです。
	関東	60歳代以上	女	農業・農作業に対する関心	折々の野菜作りをみたり、手伝ったり、指導してほしかったのに、草むしりと石掘りで何の喜びもなかった。家の庭でしていることと同じだった。しかも膝を痛めた。

区分	地域 ブロック	年齢	性別	参加理由1位	Q22(1)受入農家に対するメッセージ
WHへの 不満(続き)	関東	50歳代	女	農業・農作業に対する関心	食事内容をもう少し考えて欲しい。2軒ともかなり質素で、飯田の農家の食事はこんなものかと思った。農家の主婦は忙しすぎて食事の支度に負担を感じていると思う。
	関東	60歳代 以上	女	農業・農作業に対する関心	日常忙しいとは思いますが、お風呂など気持ちよく入れるようにしてもらいたい。また、食事についても少なすぎた。
	近畿	50歳代	男	農家生活・コミュニケーションへの関心	受入農家のインフラが整っていないのに受け入れられていたので、困ったことがありました。市役所で各農家のチェックをしてほしい。泊まって寝られなかった。人間の住む環境ではなかった。
農家子弟 への不満	関東	60歳代 以上	男	農業・農作業に対する関心	受入農家の子息たちの多くが都会に働きに出ている様子が、夕方または週末に帰宅したときに挨拶を交わしても、家業である農作業についてはあまり関心を示さない人が多い。WH制度についても、あまり話題にしないので、将来に不安を感じる。次世代への継承は順調にできるのだろうか。
	関東	50歳代	女	農業・農作業に対する関心	農家の子弟の農作業への取組があまりに低すぎる。私達をあたかも暇つぶしにきているかのような見方は絶対にやめて欲しい。子供はもっと農作業を手伝うべきです。
	関東	60歳代 以上	男	-	WHが本当に農家の自立に役立つなら、もっと力を入れて参加したい。しかし、どうも甘えに繋がるのではないかと感じる場合があります。子供たちはサラリーマンになって、休日でも手伝わぬ中で、私たちが手伝ってよいのかと感じます。

3. 市役所担当者に対するメッセージについて(Q22(2))

区分	地域 ブロック	年齢	性別	参加理由1位	Q22(2)市役所担当者に対するメッセージ
感謝の気持ち	関東	30歳代	男	農業・農作業に対する関心	なかなか時間がとれずに参加できませんが、その都度お手紙をいただき、ありがたく思っています。
	関東	30歳代	男	都会生活のリフレッシュ	お疲れ様です。受入農家の方と同様に温かい対応をありがとうございます。
	関東	20歳代	男	農家生活・コミュニケーションへの関心	自分みたいで都会暮らしでストレスが溜まっている人間にとって、こういう企画は本当にありがたいです。本当に今年も参加したいと思っているのですが、仕事が忙しく参加できません。しかし、仕事が大変なときでも、飯田市とMさんの家で過ごしたことを思い出すと、「頑張らねば」と思えます。ありがとうございます。
	近畿	30歳代	男	農業・農作業に対する関心	とても温かく受け入れていただき、大変感謝しております。また、このような縁を持つことができたこともありがたく思っています。
	関東	40歳代	女	農業・農作業に対する関心	りんご収穫のWHに参加したとき、本当に温かくしていただき、ありがとうございます。私は今、仕事を頑張っています。
	東海	30歳代	男	農業・農作業に対する関心	ありがとうございます。参加した期間中はできるだけ働こうと思います。
	近畿	40歳代	女	農業・農作業に対する関心	毎年、WHの季節にご連絡をいただき、ありがとうございます。「また参加しようかな」という気持ちになります。
	近畿	20歳代	女	農業・農作業に対する関心	飯田WHは大変良い機会です。将来的な参考にもなりました。温かみのある対応ありがとうございます。
	関東	40歳代	男	農業・農作業に対する関心	いろいろとコーディネートしていただき、ありがとうございます。今後とも農業の裾野を広げていく絶好の制度だと思いますので、ますますのご発展を期待しております。
	関東	40歳代	女	農業・農作業に対する関心	「交流」が目的のことで、気軽に参加することができました。どうもありがとうございます。
	東北	20歳代	女	農家生活・コミュニケーションへの関心	WHのお世話、本当にありがとうございます。細やかな心配りのおかげで、とても楽しく充実した体験ができました。また、お世話になることもあるかと思いますが、そのときはよろしく願います。
	関東	30歳代	女	農業・農作業に対する関心	飯田市役所の方々には皆さん親切で、とても気持ちよくWHすることができました。ありがとうございます。
	近畿	50歳代	男	農家生活・コミュニケーションへの関心	毎回ご迷惑ばかりおかけしてすみませんでした。担当者の方には毎回農家まで連れて行ってもらいました。ご親切に感謝です。同時に女性のたくましさ、飯田の女性の強さに驚き、感動しました。いろいろ大変なこともあろうかと思いますが、元気に頑張ってください。飯田の明日はあなた方若い人にかかっていますよ。
	関東	20歳代	女	農家生活・コミュニケーションへの関心	良い機会を与えていただき、感謝しています。ありがとうございます。
	東海	20歳代	女	農業・農作業に対する関心	大変良い農家を紹介してくださったこと、このような機会を与えてくださったことに、とても感謝しています。
	関東	60歳代 以上	女	農業・農作業に対する関心	希望を申込に書き込んだら、よく聞いていただき感謝しています。
	東海	20歳代	女	農家生活・コミュニケーションへの関心	いつも丁寧に対応してくださり、感謝しています。
	近畿	30歳代	男	農業・農作業に対する関心	とても温かく受け入れていただき、大変感謝しております。また、このような縁を持つことができたこともありがたく思っています。
	関東	20歳代	女	農業・農作業に対する関心	職員の方々にもご配慮いただき、とても感謝しております。また、封筒一つとっても資源を大事にされているように思えます。長野県はあこがれの地です。田中知事にも共感しているところです。確か平成14年か15年に、市役所の担当者の方が環境問題や自然食に詳しく、「レインボープラン」、「肉食の害」についてよくご存じの方がいらしたのので感激しました。私は自然食志向ですので、国産のものをを選び、投資しております。
肯定的な感想	関東	20歳代	女	農業・農作業に対する関心	WHを企画してくださり、感謝しています。都会ではできない体験をたくさんさせていただきました。また、多くの人々と知り合うことで、自分は大きく成長したと常々思っています。
	関東	20歳代	男	農業・農作業に対する関心	申込からすぐに手配していただいただけでなく、あのような素晴らしい農家を選んでいただき、本当に感謝しています。それに加えて保険まで…。感謝は尽きません。
	関東	30歳代	女	農業・農作業に対する関心	2回目の参加の時、バスで行ったのですが、渋滞に巻き込まれたため、時間にだいぶ遅れて、途中まで迎えに来て頂きました。ずいぶんご迷惑をおかけしたにも関わらず、車中も気遣っていただいて、すごく感激しました。その節はお世話になりました。
	東海	40歳代	男	農業・農作業に対する関心	単独で2回WHに参加しました。農について学んでいる現在、種々の体験は大変役立っています。

区分	地域 ブロック	年齢	性別	参加理由1位	Q22(2)市役所担当者に対するメッセージ
肯定的な 感想(続き)	関東	40歳代	男	農業・農作業に対する関心	市役所の担当者の方が受入農家へ巡回することは良いと思う。お客様でもなく、使用人でもない。農家と我々、お互いの立場を再認識する上で必要ですね。
	関東	60歳代 以上	男	農業・農作業に対する関心	大変心遣いをしていたいです。昨年から妻の病気のため、お手伝いに行けない旨、連絡したところ、丁寧なお手紙を頂き感激しました。
	関東	40歳代	男	-	大変なご苦労があると思います。参加する側の意識が多様で、難しいのではと感じます。
	北陸	50歳代	男	農業・農作業に対する関心	良い企画であり、非常に親切な対応をされていると思います。
	関東	60歳代 以上	女	農業・農作業に対する関心	15年度の書類に比べ、16年度は改善されており、努力が見えました。皆様が健康的なので、充実した気持ちで過ごさせてください。
	関東	60歳代 以上	男	農業・農作業に対する関心	定期的に書類を発送して下さるのは助かります(うっかり忘れてしまうことがあるので)。
	関東	20歳代	女	農業・農作業に対する関心	飯田は本当にすばらしいところ。これからも飯田らしさを守ってってください。
	東海	20歳代	女	農業・農作業に対する関心	参加者の目的は様々だけど、作業する中でコミュニケーションを取るには絶対良い。この制度は、なかなかできるものではありません。
	関東	30歳代	女	農業・農作業に対する関心	一生懸命に取り組んでいると思う。これからも頑張ってください。
	関東	30歳代	女	農家生活・コミュニケーションへの関心	丁寧な対応で安心して参加できます。
	関東	30歳代	男	農業・農作業に対する関心	都市部に暮らし、農業や農村部に興味がある人と、実際に農業に携わる人とを橋渡しすることは、容易ならざることと思いますが、よく頑張っていると思います。尊い行為であると思います。
	東海	30歳代	男	-	WHの企画をしていただき、大変うれしく思います。農業の活性化に向け、頑張ってください。
	関東	20歳代	男	-	市役所の方が、農家で作業する姿を見に来てくださる、心配をしてくださって良かったです。
WHの継続 希望	関東	50歳代	男	農業・農作業に対する関心	このような交流事業をまとめて進めていくことは大変だと思いますが、今後とも是非継続してほしいと思います。
	関東	30歳代	女	農業・農作業に対する関心	WH参加者と受入農家をつなぐ要と考えます。向上と継続を希望します。
	関東	30歳代	男	農業・農作業に対する関心	世話役としての活動は簡単にはいかないと思いますが、WHを長く続けてください。
	関東	40歳代	女	農業・農作業に対する関心	いつもお世話になっております。私たちWH参加者と受入農家の方々の間に入って、両者が気持ちよく交流できるようにしていただいていること、とても感謝しております。これからもこのWHが続くことを願っています。
	近畿	30歳代	男	農業・農作業に対する関心	事務局の方々のご苦労は計り知れないものがあります。今後も、飯田市のWHが継続されますことを強く希望します。事務局の方々には、本当に感謝の気持ちでいっぱい。こちらからも、多くの出会いをサポートしてください。
	近畿	20歳代	女	都会生活のリフレッシュ	毎回、たくさんの参加者がいて準備等大変だと思いますが、これからもずっと続けて下さい。
	近畿	30歳代	男	農業・農作業に対する関心	大変だと思いますが、続けていただきたい。
	関東	50歳代	女	農業・農作業に対する関心	大変熱心に取り組まれていると思います。参加してその熱意が伝わってきました。農業を体験したい人はまだまだたくさんいると思います。私は、たまたま見たNHKのTVで知ったのですが、広く知らせてもっと盛んになればいいと思います。
WHに対する 意見・要望	関東	30歳代	女	農業・農作業に対する関心	こんな素晴らしい機会を作ってください、ありがとうございます。間に立つということは、本当に大変なこともたくさんあると思いますが、どうか少しでも長く、続けていていただけたらと思います。頑張ってください。
	関東	50歳代	女	農家生活・コミュニケーションへの関心	良い情報(飯田の中身が伝わる)をたくさん提供して欲しいです。
	近畿	60歳代 以上	男	農業・農作業に対する関心	農業政策に関して、将来は農家の経営安定化の観点から、WHの依存度をどの程度見込むのか、青年の都会流出にどう歯止めをかけるのか、WHとの関連から分析する必要があると思う。
	関東	30歳代	男	農家生活・コミュニケーションへの関心	スケジュールが合えば、WHに参加したいと思っているので、これからもお知らせを送り続けてください。
	関東	50歳代	女	都会生活のリフレッシュ	WHについて、健常者のみではなく障害者も併せて利用できる専用のスペースが提供できると良いのでは。若い人の元気が出る設備があると良い。動物を飼ったりやりたいことを話し合っただけで決めるなど。
	近畿	30歳代	男	-	毎回参加できるわけではないので、飯田に行かなくても、地域に関わる仕組みを作ってください。例えば、農産物を使った新商品(加工品)のモニターやテストマーケティングなど。
	関東	40歳代	男	都会生活のリフレッシュ	このようなアンケートも、メールやネットでやった方が経費が抑えられると思います。
	九州・沖縄	60歳代 以上	女	農業・農作業に対する関心	財政も大変だろうと思いますが、ぜひ農家の方々がほこりを持って農業に打ち込める行政をして欲しいと思います。
	関東	50歳代	女	農業・農作業に対する関心	WHをいつも楽しみにしています。長く続けていただきたいと思っています。また、いろいろな飯田の案内を送ってください。私事ですが、体をこわして長期入院していますので、今回は参加できなくて本当に残念です。秋には参加できれば、入院中も考えて体の回復に頑張っている毎日です。今後ともよろしくお願いします。
	関東	40歳代	男	農業・農作業に対する関心	現在のWHはそれなりに軌道に乗っていると思いますが、中・長期的な目標設定やこれまでと違った取組にもチャレンジしたい。
	関東	30歳代	女	農家生活・コミュニケーションへの関心	あまり作業面での貢献ができなかったし、短期間だったので、余計に交通費の負担を重く感じました。ただ、ちょうど同時期、長野の他地域の農業ボランティアの公募案内はもっと費用がかかるものだったので、今回行くことを決めました。農家の方たちの本当のニーズ(人手)と、市としての今後の活性化や発展のための取組の思想との間に「開き」があることを感じました。やはり、現場に本当の意味のある活動があつてこそ、その次の発展につながると思います。具体的には、外国の果物ビッキングのワーキングホリデーのように、人手の欲しい時期にバリエーション活動させる代わりに、そこの生活も楽しめ、また、参加者にとつての費用負担も減らしてもらえれば、互いにうれしい仕組みが成立するんじゃないかと思いました。お世話になりました。よろしくご検討ください。良い体験ができたので、よりよくなって欲しいと思って意見しました。

区分	地域 ブロック	年齢	性別	参加理由1位	Q22(2)市役所担当者に対するメッセージ
WHに対する 意見・要望 (続き)	関東	50歳代	女	農業・農作業に対する関心	もう少し受け入れ農家への配慮があった方がよいと思います。農家の負担が軽減されれば、私どもも気を遣わずに仕事に専念することができます。朝、昼、晩の三食付きで民泊することがどんなに大変か。受け入れ農家の女性に負担が大きい。何をやるのか、喜んでくれるだろうか、などいろいろ考え相手に気を遣う。お茶なども密着しすぎて、返って気を遣ってしまいます。女としての立場が分かります。
	北海道	30歳代	女	農業・農作業に対する関心	WH自体は、第一歩として農村の生活体験ができ、生活や人々や考え方を知ったり(短期なので深くは分らなかったけど)、楽しかったり、気分転換になったり、自分の農業への方向性を考えたり、すごく満足度の高いものでした。農家の方々も、すごくありがたい程、普通に受け入れてくれて、「飯田が好きになってまた来たい」という思いが強かったです。都市にそのまま住んでいたら、仕事しながら、時間がある時に体験(生活、ふれあい、気分転換)するのがとても良いと思った。実際は仕事をしていれば、長期の休みはなかなか無理ですが、でも、できれば長期間滞在して、いろいろやってみたい。研修制度みたいなのもあったらいいと思う。
	近畿	50歳代	女	農業・農作業に対する関心	WH参加者マニュアルも読まず、遊びで参加している人が多い。農作業にやる気が感じられない方もいるし、老人の参加にも疑問がある。身勝手な楽しみのための参加は拒否してください。
	関東	50歳代	男	農業・農作業に対する関心	ずいぶん前のことなので記憶が薄く、記入に困りました。このようなアンケートで具体的にどのような農業振興が図れるか疑問です。より農家主導型にできないでしょうか。
就農・定住等の希望	関東	60歳代以上	男	農業・農作業に対する関心	就農、定住(飯田市での就職活動も含め)までを段階的、具体的に進められる方法を、体験者の実例を交えて相談できる窓口が欲しいですね。
	近畿	60歳代以上	女	農業・農作業に対する関心	息子が酪農をしてみたいと言っています(親からは無理かなと思いますが)。私と一緒に一度行かせていただけたらいいなと思っています。
	関東	40歳代	男	農業・農作業に対する関心	農林漁業といった一次産業に転職を希望しているので、農業法人の求人があったら希望者には伝えて欲しい。自分は希望している。
	関東	50歳代	男	農業・農作業に対する関心	定年になったら、日本のどこかの田舎に移住を考えています。飯田市も大変好きなのでです。空家等、情報があつたら知りたい。
	関東	30歳代	男	農業・農作業に対する関心	飯田へ定住された方々が、どのようにして定住を果たしたか、今どのように生活しているのか体験談が知りたいです。また、就農や住居、就職など定住に役立つ情報がもっと欲しいです。
	関東	40歳代	男	農業・農作業に対する関心	就農相談の窓口があれば、もっと気軽に相談できるようアピールして欲しい。
	近畿	60歳代以上	男	農業・農作業に対する関心	親切で満足しております。定住する場合の予備情報が欲しい。
	東海	60歳代以上	男	農業・農作業に対する関心	空き家等の紹介がほしい。
	近畿	30歳代	男	農業・農作業に対する関心	農業に興味はあっても、本格的に農業をするのはかなり難しいことだと言うことが3回のWHで感覚的に分かったような気がします。子供の時から生活や、代々受け継いでくるといって農業で生計を立てられている方とは全く違うわけです。しかし、山や川に囲まれた環境、静かな夜、少ない車、豊富な緑、おいしい野菜・果物が身近にある農村に、もし事務職などの雇用があるならば、今や通信手段は都市部と変わらないでしょうから、移り住みたいと思います。
	東海	60歳代以上	男	農家生活・コミュニケーションへの関心	定住は考えていませんが、短期間(例えば3カ月や半年)滞在したい場合の借家の斡旋を市でやってくれるとありがたい。
その他	関東	50歳代	男	農業・農作業に対する関心	良い体験ができました。豊かさとは何なのか考えさせられました。ただ、定住となると収入の面で難しいようです。年金をもらう頃では少し遅いように思うし。
	東海	60歳代以上	男	農業・農作業に対する関心	田舎、都会の別なく人の心が失われているが、そういう人々に感動を与えて欲しいです。
	関東	50歳代	女	農業・農作業に対する関心	養蜂農家の生活にとっても興味を持っています。紹介していただければ、参加させていただきたいと思っています。
	関東	20歳代	男	農業・農作業に対する関心	これからは活気ある、そして風通しの良い飯田市づくりに頑張ってください。

4. 自由記入欄について(Q23)

区分	地域 ブロック	年齢	性別	参加理由1位	Q23自由記入
感謝の気持ち	近畿	50歳代	男	農家生活・コミュニケーションへの関心	農業は人間の原点です。農業なくして人間は生きられません。すばらしい農家の人々にありがとうと言いたいです。
	関東	50歳代	女	農業・農作業に対する関心	素晴らしい企画をありがとうございます。年とともに自分が農家の方の農作業に十分役に立てなくなるのではと思い、無理なく働けるよう自分で定年を設け、前回までの参加としました。
	東海	40歳代	女	農業・農作業に対する関心	批判めいたことも書きましたが、農家の方は、良すぎるくらい良くて下さいました。飯田のために一生懸命持てなして下さいました。ありがとうございます。
	東海	20歳代	女	農業・農作業に対する関心	今は、人とのコミュニケーションによっても成り立っていると思う。交流はぜひ続けて欲しい。ありがとうございます。また、機会があれば...
	近畿	30歳代	男	農業・農作業に対する関心	飯田市のWHに参加できて、本当に良かったと思っています。この機会を与えていただいた市役所の方にも感謝しております。
	北海道	30歳代	女	農業・農作業に対する関心	WHは農業・農村に興味を持っている人に対して、すごく良い制度で、同時期に同じような仲間が集まることが、イベント以外の時期に時間の都合を合わせて任意に参加できることなどは、すごく良いと思う。そういう制度によって閉鎖的になりがちな(また、そういうイメージの)農村の人々が外部の人に対して、とても開放的になっている気がする。もともと開放的なのかも知れませんが、初めての都市の人などは、興味があっても閉鎖的な社会には入って行きづらいので、開放的に受け入れてくれるのはすごくありがたい。もっともっと、外へ向けて受け入れてくれるような町になって欲しい。言い方は変だけど、飯田だけでなく、日本の他の農村も。
	関東	60歳代以上	男	農業・農作業に対する関心	単独で2回WHに参加しました。農について学んでいる現在、種々の体験は大変役立っています。
	関東	30歳代	女	農家生活・コミュニケーションへの関心	今回は、ピンチヒッターでの参加、しかも2泊のところを1泊にしようというこちらからの都合には、素早くかつ丁寧に対応していただき、申し訳なく思うほどでした。

区分	地域 ブロック	年齢	性別	参加理由1位	Q23自由記入
WHの感想	関東	30歳代	女	農家生活・コミュニケーションへの関心	遠く離れた土地に、たまに会う知り合いができるということは、何となくうれしい感じがします。そんな人を増やしていきたいなと思います。
	近畿	40歳代	女	農業・農作業に対する関心	U・Iターン等の募集を見ると対象者が、夫婦、家族あるいは独身の若い人が圧倒的です。私のような独身40代が、単身移住するのは、あまり歓迎されない様子……。農村側としても、将来につながる人材を求めているからなのでしょうから、無理もないのですが、もう少し幅広く受け入れていただけると良いのになと思っています。
	関東	40歳代	男	農業・農作業に対する関心	この制度は就農ということに限らず、農家との交流や体験をより気楽に(といっは失礼になるかもしれませんが)できるといって非常に良いと思います。
	関東	30歳代	女	農業・農作業に対する関心	果樹農家にWHでお世話になったとき、様々な農家の苦勞を知りました。果物は値段が高いと思っていましたが、それも当然だと理解できました。
	関東	30歳代	女	-	とても良いシステムだと思います。外国でWWOOFというボランティアの有機栽培農家へ滞在するシステムがあるのですが、それと同じような感じで、とても楽しかったです。干し柿の時期は近所の人も集まって、昔の話も聞けて、すごく楽しかったです。その土地の食文化や習慣などが聞けるのは面白いです。機会があったら、本当は長く滞在したいものです。
WHのあり方について	関東	30歳代	男	農業・農作業に対する関心	WHには、どのような人が参加して欲しいのか、飯田市や農家側からもアピールしてみても良いような気がします。
	関東	60歳代以上	女	農業・農作業に対する関心	WHで全国から参加する人が、受入農家と楽しく作業や交流ができる飯田WHを広めていって欲しいと望みます。
	関東	40歳代	男	-	何年経ってもWHが飯田の方々、農家の皆様にとって良いものであって、また、参加する側にも有意義なものであって欲しいと思います。
	関東	40歳代	女	農業・農作業に対する関心	私たち都会に住む農業のことを知らない者でも、お手伝いできる作業があるというのは、とてもうれしいことです。普通の旅行では得られない満足感や充実感を与えてくれるのが、このWH制度だと思います。心身共にリフレッシュできるこの機会を、もっと多くの人に知って欲しい反面、本当に好きだと思える人だけに留めておきたい気持ちと、半々です。
	東海	20歳代	女	農家生活・コミュニケーションへの関心	作業だけでなく、積極的に人と関わる意欲のある参加者でないと、受け入れてくださる農家の方への負担が重いのではと、参加していて感じました。いろいろな方がいらっしやるのでしょけれど……
	関東	50歳代	男	農業・農作業に対する関心	WHを始めてから何年も経過していると思いますが、社会はその間かなり変化しています。「すすけた」とは言い過ぎかもしれませんが、やはりその変化に対応して脱皮していかないと存在価値がないのでは。そういう意味では、しばらく止めてみるのも一策では。
	関東	50歳代	女	農業・農作業に対する関心	交通費と負担を比較して考えたらWHなどできないと思います。飯田という地域をあまり詳しくみていないので、「独自の魅力」の設問には答えられない。仕事に一生懸命になり、他のことは考えなかった。WHとして出かけた以上は、遊びではなく仕事のみだと思ふので。
	東北	20歳代	女	農家生活・コミュニケーションへの関心	農業・農村に対する理解を深めるのに、とても有意義な取組だと思います。参加する方々は、とても農業に対して関心、理解度が高いと思いますが、逆に農業に関心のない人が参加するには、やや敷居が高いかも知れませんが(農家の方も遊びではないので、気楽に来られても困るでしょうが……。農業に関しての興味、関心の薄い人でも、もう少し気張らずに参加できるような交流の方法があると良いと感じています。
	関東	30歳代	男	農業・農作業に対する関心	農業には後継者がいないというような話を良く聞か、受け入れていただいた農家には、そんな事実はない。交流会はただの宴会に過ぎなかった。本当に後継者がいないのなら、「後継者募集」を全面的に打ち出しても良いのではないのでしょうか。また、問15について、「サービス」が得られたという考え方を持った(あるいは持たせた)時点で、この企画は失敗だと思う。
	関東	30歳代	男	農業・農作業に対する関心	複数回参加者のマンネリ対策を考えてもらいたい。ある新規就農相談会に行った時、「WHはあくまで体験であって、経験とは言い難い」と言われ、本人は就農への道の一部と考えていただけに残念な気持ちになった。
再参加の希望	近畿	30歳代	男	農業・農作業に対する関心	WHを通じて良い経験をさせてもらいました。これからずっと続けて下さい。また参加させていただきます。
	関東	20歳代	女	農家生活・コミュニケーションへの関心	前回、GW中に参加しましたが、今の仕事ではGW中に休みが取れません。でもまたWHに参加したいです。
	関東	20歳代	女	農業・農作業に対する関心	飯田はすばらしい場所でした。また機会があればぜひ訪れたいです。
WHの継続希望	東海	20歳代	女	農業・農作業に対する関心	大変スムーズに受入農家の決定や準備についての連絡がなされ、とても良かった。何も困った素案がない。受入農家の方がとても親切で、同じところで2度お世話になった。とても素晴らしい企画だと思いますので、今後多くの人が参加して体験していただけるよう、頑張ってください。
	関東	40歳代	男	農業・農作業に対する関心	「きっかけ作り」としては、これ以上ないくらい良い制度なので、今後も続けるべきだと思う。参加者同士の交流よりは、農家さんとの交流の方で、気持ちは精一杯になってしまふ。観光主体の消費者意識ではなく、生産者の立場になれるところが「売り」なのだと思う。都会の消費者こそ、農業新聞を読んだ方が良いと思う。就農までをトータルにサポートして欲しい。
	関東	20歳代	男	農家生活・コミュニケーションへの関心	これからも、こういった企画を続けてください。また、飯田市の繁栄を心より願っています。
	関東	50歳代	男	農業・農作業に対する関心	飯田市でのWHしか経験がないのですが、とても良い事業と感じました。もちろん、今後も継続していただきたいです。サラリーマン社会(生活)よりも農業、都会生活よりも農村生活の方が、得るものが多いようにさえ感じています。
	近畿	30歳代	女	農業・農作業に対する関心	これからも、どんどん活発に行って欲しいと思います。私もできる範囲で参加したいと思っています。
	関東	30歳代	女	農業・農作業に対する関心	これまでに2回、座光寺でお世話になり、とても貴重な時間を過ごさせていただきました。また、状況が許せば参加したいと考えています。WHがずっと続きますよう、応援しています。
	近畿	30歳代	男	農業・農作業に対する関心	WHを通じて良い経験をさせてもらいました。これからずっと続けて下さい。また参加させていただきます。

区分	地域 ブロック	年齢	性別	参加理由1位	Q23自由記入
WHの継続希望 (続き)	東海	30歳代	男	農業・農作業に対する関心	これからも参加しますので、続けていって欲しいです。
	関東	30歳代	男	都会生活のリフレッシュ	WHは農作業の実体験ができて良かった。継続して欲しい。
	関東	60歳代 以上	男	農業・農作業に対する関心	「都市農村交流」、この企画は大変良いことだと思います。末永く続くよう頑張ってください。
WHの次の段階の 取組について	関東	50歳代	女	農家生活・コミュニケーションへの関心	交流を継続できる仕組みがあるといいと思います。WHでなくても参加できるような...
	近畿	60歳代 以上	女	農業・農作業に対する関心	WHではないと思いますが、当地に菜園付きで最低限の生活用品付きの宿泊棟(有料)ができればうれしい。良い案だと思いますが、ホテル利用の農業体験パンフレットが同封されていましたが、少々金額が高すぎます。
	関東	60歳代 以上	男	農業・農作業に対する関心	WHとは無関係と思うが、最近盛んになった「クラインガルデン」を検討してみるべきと思う。安ければ非常に興味がある(今までに参加を検討してきたが、ずいぶん高いのが実感)。
	近畿	30歳代	男	農業・農作業に対する関心	WHの次の段階(農地取得や研修制度、空き家紹介、交流イベント等)を充実させて欲しい。
	東北	50歳代	男	農業・農作業に対する関心	WHとインターンシップの関連を考えて欲しい。WHからワーキングツアー、インターンシップへの方向付けが大切。
	四国	20歳代	女	農業・農作業に対する関心	長期研修の受け入れ。その場合、多少の日当があつたりすると良いのではないかと思います。
	関東	50歳代	女	農業・農作業に対する関心	飯田市のWHのあり方について、初めは今のあり方で良かったでしょうが、これからもう一歩進めたあり方を取り入れた方がよいと思います。具体的に考えが浮かびませんが、一定期間畑や住まいを貸すなどして、定住や営農を希望される方の初歩的な受入をした方がよいかもしれません。
	関東	20歳代	男	農業・農作業に対する関心	都市部の農学、畜産系大学(東京農工大、東京農大、獣医畜産大、玉川大など)との単位に連携させたタイプの仕組みを導入してはいいかでしょうか(地元の信大ではなく、都市部から農学系の人に参加してもらうことで定住率アップにも繋がる気がします)。
	関東	40歳代	女	農業・農作業に対する関心	1つの作物や1つの畑について、年間を通じて農業体験してみたい。
定住・就農等について	近畿	50歳代	男	農家生活・コミュニケーションへの関心	もし将来、飯田市で百姓ができれば最高ですが、いろいろ情報やお世話などいただけますか。丸4年間兼業と兼業だけで1反の畑を守ってきて、百姓生活のおもしろさも辛さもわかってきます。金はありませんが、本格的に百姓をしたいという気持ちが年々強くなってきています。加島祥造の「タオ、ヒア、ナウ」など読んでからは、一層、伊那谷が好きになってきました。長期の研修などを含めて、いろいろ教えてください。これからもよろしく願い申し上げます。
	関東	60歳代 以上	男	農業・農作業に対する関心	借家、貸し農地の情報を提供してほしい。飯田市の農業・農村の現況をもっと知るために説明会や1日程度の視察ツアー的なものを開催したらどうでしょうか。
	近畿	50歳代	女	農業・農作業に対する関心	ゆくゆくは、長野県へ移住したいと思いますが、畑はすぐに借りられても、家はなかなか見つからず困っています。
	関東	60歳代 以上	女	農業・農作業に対する関心	年をとったら田舎暮らしをしたいと思っていたが、田舎暮らしは若いときに始めた方がよいと思った。農村も高齢化や後継者問題で大変だなと思った。
	関東	30歳代	男	農業・農作業に対する関心	定住については、住居や仕事(収入)が大きな問題となってくるので、もっと情報が欲しいと感じます(うまくいった例やその逆も)。
	関東	40歳代	男	農業・農作業に対する関心	農業(1次産業)がダメなら、他の仕事に就職してでも飯田にいたいかもしれない。
体験教育との関わり	東海	20歳代	女	農業・農作業に対する関心	小学校や中学校などの教育の中でも、交流を取り入れ、幼い頃から農業・農村に親しめる機会を設けていくことが必要だと思う。
	関東	50歳代	女	農業・農作業に対する関心	私たちの受入農家では、中学生や高校生の受け入れもしていました。子供たちの感想文や写真も見せてもらいましたが、とても良いことだと感じました。農業という仕事を体験でき、人と関わることの楽しさを知ることができる、すばらしい体験だと思います。農家の方は大変なのかもしれませんが、是非もっと広く受け入れてくださればと思います。
地域交流について	近畿	60歳代 以上	男	農業・農作業に対する関心	地域の人たちと文化・スポーツ面で交流を図るともっと違った意味で楽しくなると思う。公民館、文化サークル、スポーツ活動、体育館など紹介すべき。
	関東	30歳代	男	農家生活・コミュニケーションへの関心	飯田の集落の祭りやイベントなどにも参加できるようになりたい。そうすれば飯田に愛着が湧き、もっと身近に感じるのだが。
	関東	50歳代	男	農業・農作業に対する関心	都市農村交流といっても、現在は一方通行になっていないか。農村から都市への交流もあっても良いのではないだろうか。
	関東	30歳代	男	農業・農作業に対する関心	村祭りなども含めたボランティア活動もあれば良いと思った。
	関東	60歳代 以上	男	農家生活・コミュニケーションへの関心	お世話になったご主人とは、毎年の賀状(近況)交換を行うと共に、時折、親戚のようにおじゃまさせていただいております。貴市主催の万古溪の沢登り行事に、2回参加しました。私は西丹沢(神奈川県と山梨県の県境)溪谷の沢登りを体験しておりますが、万古溪は西丹沢溪谷と比較すると極めて美しい絶景でした。
	甲信	30歳代	男	農業・農作業に対する関心	WHと一緒に、祭りや行事に参加できるような企画があったら面白いと思います。
	近畿	30歳代	男	農家生活・コミュニケーションへの関心	良い制度を利用されていると思います。問題点は何かとあると思いますが、異文化コミュニケーションや農村体験は、日本にとって重要だと思います。
他地域の取組について	関東	30歳代	女	農業・農作業に対する関心	WHは本場にすばらしい制度です。私は飯田が好きなので、現状でも構いませんが、できれば、県内の他市町村、さらに全国に広がってほしいと思います。
	関東	30歳代	女	農業・農作業に対する関心	実体験を通じて、農作業の大変や、食べ物のありがたみをヒシヒシと感じました。いろいろな農業地域がこのような試みをし、地域(県や市)同士の繋がりがもっと増えるといいなと思いました。

区分	地域 ブロック	年齢	性別	参加理由1位	Q23自由記入
他地域の 取組につ いて(続 き)	関東	30歳代	女	農業・農作業に対する関心	飯田市のWHは素晴らしい体験ではありましたが、東京からの距離、農家の負担を考えると、「気軽に」という訳にはいきません。都市に生活するストレスや、食への関心から、このような体験、交流を切望するのは私だけではないと思います。週末に気軽に参加できるような仕組みがあれば、また、東京から近い場所飯田市の様に積極的に受け入れていただける場所があれば良いと思います。
	近畿	20歳代	女	農業・農作業に対する関心	今後は、今住んでいる近くで農業に携わる場所が増えればよいと思います。もっと農業をすべきだと思います。
	関東	50歳代	男	農業・農作業に対する関心	飯田は東京から遠いので、山梨県で同様の取組があれば紹介下さい。肥料、殺虫剤、除草剤の使用に当たっては、身体に極大影響の小さいものを使ってほしい。
	近畿	30歳代	男	農家生活・コミュニケーションへの関心	WHが他府県にも広がることを願っています。もっと身近になれば、コスト負担も減ります。
農業・農 村のあり 方につ いて	関東	20歳代	女	農家生活・コミュニケーションへの関心	都市は農村にはなれませんが、農村は都市になれます。都市が失ったものを大切にしたいと思っています。
	東海	60歳代 以上	女	農業・農作業に対する関心	田舎の優しさや新鮮な空気など、お金では買えないものを求めて、我々はボランティア活動を行っている。田舎の心を失っては意味がない。経済を優遇すると、自然環境が破壊されます。金で買えない大切な心が失われる。田舎にあった自然環境を大切にすることを育むことが不可欠である。人間は自然から学ぶことが多い。
	関東	30歳代	女	農業・農作業に対する関心	自然の営みに触れることは、人間性の回復、再生につながるかと考えます。農業・農村は日本人のふるさとだと思うので、清く、正しくあることを大切にしたいです。
	九州・ 沖縄	60歳代 以上	女	農業・農作業に対する関心	農業は人間が生きていくための基本です。農業を全然知らない人たちに少しでも農業の大切さを知らしめるための事業だと思いますので、ずっと続けて欲しいです。
農業・農 村政策に ついて	関東	50歳代	男	農業・農作業に対する関心	今から40～50年前は日本の至る所に里山を抱えた農村地帯でした。それが現在、農村と都市は大きく切り離されています。都市に人口が集中し、そこで育った子供たちは都市が自然そのものであるというように育ってしまっています。農業のある風景が、人の住む本来の自然の風景です。国として都市農村交流を政策的に制度化する位置づけが必要ではないでしょうか。
	東海	60歳代 以上	男	農業・農作業に対する関心	日本の農業は国の政策に頼りすぎです。このままだと他の国の農作物に(市場を)とられてしまう。もっと各農家のアイデアを取り入れた方がよい。常に農業への転職を考えてきたが、今の年齢では難しい。
	中国	60歳代 以上	女	都会生活のリフレッシュ	日本における高齢夫婦世帯のみの農業は、重労働で食生活も含め環境条件が悪いと思った。今、現役を終えた、たっぷり時間のある元気な者たちがたくさんいる。飯田市はその点、行政がお手伝をし、農家を助ける制度(政策)を立ち上げ、市民のためになっていると思う。日本全土にこの風土が広がって欲しい。やる気のある行政がもっと増えて欲しい。農耕地や山が荒れている。行政が少し手助けすれば、市民は参加すると思う。
	九州・ 沖縄	30歳代	女	農業・農作業に対する関心	WHという機会を与えてくださってありがとうございます。コンクリートに固められた町で暮らすと、自然と向き合って日々働いておられる農家の方々からうらやましくもあり、また、尊敬の対象となります。日本政府は、もっと農業を大切にすべきです。食物自給率の高い国作りを目指してもらいたい、いつも思っています。
	関東	30歳代	男	農業・農作業に対する関心	農村では過疎がますます進み、農地や森林の荒廃が進む一方、都会ではフリーターやニートなど、働くことに意義を見いだせず希望を持ちづらい若者も多い。この両者をうまく結びつけて農林業の振興を図れないでしょうか。是非、研究していただきたい。
	関東	60歳代 以上	男	-	農家が自立できるよう、長期的視点に立って導いて欲しい。単純に補助金等で農家を助けるのは、農家を弱めることになるのではないかと。競争に勝てる農家を育てて欲しい。
その他	関東	40歳代	男	都会生活のリフレッシュ	受入農家で感想などをノートに記入したのですが、後から参加した方から私にメールがあり、お世話になった農家の方への不満が綴られていました。「あなたはわがままで贅沢だ」と返信メールを送ったら、それっきり返事は来なくなりました。何事も経験として受け止める寛容さを持つことを、若い人に参加前に伝えても良いと思います。農家の方も不満を持って帰って欲しくないと思います。
	関東	50歳代	女	農業・農作業に対する関心	受入農家にとって私たちのような年齢の者の参加が果たして本当に役立っているのだろうかと思うことがあります。自己満足と実質の成果とは必ずしも同一ではないでしょうし、農家の方が良い人であればなお、それを思うと後ろ向きになってしまいうるそうです。
	関東	30歳代	女	農業・農作業に対する関心	農業研修へ2年間行っていました。農家さんの意識などが、就農希望者と食い違いう気がしました。希望を持ってやって行こうとしている者に対して、現状をつらく伝える方が多いように思います。農業はすてきで、人として必要な全てを使う仕事だと思っています。そんな気持ちで、農業に皆で取り組めたら、もっと素晴らしい社会になっていくような気がします。
	東海	30歳代	男	-	後継者不足で畑がなくなっていると聞きました。WHなどを通じた人材の派遣等が重要かと思っています。人材派遣の会社などができると良いかも知れませんが。
	関東	40歳代	男	農業・農作業に対する関心	受入農家がどんなところか、WH参加者がどんな人間かいつも気にはなるが、喫煙者と非喫煙者の同部屋を避けてくれるところはありがたい。良い人が多く(そう選んでいるのか?)、身内なら、絶対農家をやるだろう。農業って儲かるの?だからあれだけ立派な家が建てられるのだろう。飯田のリンゴは、飯田のリンゴの味がする。東北その他の地域とは違う、信州の味なのだろうか。土地の味だね。私的には、飯田のリンゴはうまいと思う!もっと雑誌やなにかPRしたらよいのに。信州飯田のリンゴを!

巻末附表2 飯田市WHアンケート調査票

飯田市のワーキングホリデー(WH)に関するアンケート調査

飯田市農政課・農林水産省農林水産政策研究所

問1 居住地をご記入ください（左欄は都道府県名を記入、右欄の地域類型はいずれか1つに○）

	都道府県	1. 都市部 2. 都市郊外 3. 平地農村 4. 中山間農村
--	------	---------------------------------------

問2 年齢はおいくつですか（いずれか1つに○）

1. 10歳代	2. 20歳代	3. 30歳代	4. 40歳代	5. 50歳代	6. 60歳以上
---------	---------	---------	---------	---------	----------

問3 性別は？（いずれか1つに○） 問4 同居家族は誰ですか（当てはまるもの全てに○）

1. 男 2. 女	1. 祖父母 2. 父母 3. 配偶者 4. 子供 5. 独居
----------------	---

問5 職業についてお聞きます

(1) あなたの現在の職業は何ですか（いずれか1つに○）

1. 会社員	2. 自営業	3. 団体職員	4. パート・アルバイト	5. 公務員
6. 教員	7. 学生	8. 専業主婦	9. 無職	10. その他

(2) 前項で「1. 会社員、2. 自営業、3. 団体職員、4. パート・アルバイト」と回答された方にお聞きます。あなたの職業の業種は何ですか（いずれか1つに○）

1. 農林水産業	2. 鉱業・建設業	3. 製造業	4. 電気・ガス・水道
5. 運輸業	6. 情報・通信業	7. 卸売・小売業	8. 飲食・宿泊業
9. 金融・保険・不動産業	10. 医療・福祉	11. サービス業	12. その他

問6 日常の農業への関わりと関心についてお聞きます

(1) あなたの家は農家と関係がありますか（いずれか1つに○）

1. 実家が農家	2. 親戚が農家	3. 非農家
----------	----------	--------

(2) あなたは日常的に農業・農村にどのようなイメージを持っていますか（当てはまる数字1つに○）

	良いイメージ	やや良いイメージ	どちらとも言えない	やや悪いイメージ	悪いイメージ
〔農業・農村のイメージ〕	1	2	3	4	5

問7 ワーキングホリデー（以下、WH）に参加した理由は何ですか。下記の選択肢より第1位から第3位まで番号でお答えください

第1位: 	第2位: 	第3位:
---	---	---

1. 農作業がしてみたかった 3. 土への愛着があった 5. 人とのコミュニケーションをとりたかった 7. 観光を兼ねて 9. 単調な日常生活のリフレッシュ 11. 単に時間があった	2. 農作物に興味があった 4. 農家に泊まりたかった 6. 地域の生活に触れたかった 8. 農業の現状を知りたかった 10. 都会の生活に疲れた 12. その他 ()
--	---

問8 飯田のWHへ参加したのは平成何年度のことですか（複数回参加された方は、当てはまるもの全てに○）

- | | | | |
|---------|---------|---------|---------|
| 1. 10年度 | 2. 11年度 | 3. 12年度 | 4. 13年度 |
| 5. 14年度 | 6. 15年度 | 7. 16年度 | 8. 17年度 |

問9 WHの参加回数についてお聞きます

(1)飯田のWHには何度参加しましたか（1つに○）

- | | | |
|-------|-------|---------|
| 1. 1回 | 2. 2回 | 3. 3回以上 |
|-------|-------|---------|

(2)前項で「2. 2回、3. 3回以上」と回答された方にお聞きます。複数回参加された最も大きな理由は何ですか（いずれか1つに○）

- | | |
|---------------------|---------------------|
| 1. 飯田という地域が気に入ったから | 2. 受入農家が気に入ったから |
| 3. 訪問するのに手頃な場所だったから | 4. 継続的に土に触れていたかったから |
| 5. 単に時間があったから | 6. その他（ ） |

問10 受入農家は何の農家でしたか（複数回参加された分を含め、当てはまるもの全てに○）

- | | | | | |
|--------|-------|----------|-----------|-------|
| 1. りんご | 2. 柿 | 3. 梨 | 4. 稲作 | 5. 野菜 |
| 6. 花き | 7. 酪農 | 8. きのこと類 | 9. その他（ ） | |

問11 受入農家でどんな作業をしましたか（複数回参加された分を含め、当てはまるもの全てに○）

- | | | | |
|-----------|--------------|-------------|--------------|
| 1. 農作業全般 | 2. 耕うん | 3. 施肥 | 4. 土作り |
| 5. 種まき・定植 | 6. 農薬散布 | 7. 草刈り | 8. 鉢植え替え |
| 9. 受粉 | 10. せん定 | 11. 摘花・摘果 | 12. 袋がけ、袋はずし |
| 13. 収穫作業 | 14. 収穫物の調製作業 | 15. 出荷作業 | 16. 販売手伝い |
| 17. 餌やり | 18. 搾乳 | 19. 糞尿の掃除運搬 | 20. その他（ ） |

問12 飯田のWHに参加して満足できた点は何ですか（当てはまるもの3つまでに○）

- | | |
|---------------------|------------------------|
| 1. 農作業を体験できたこと | 2. 農家の人柄が良かったこと |
| 3. 農家における生活体験ができたこと | 4. 農家とのコミュニケーションがとれたこと |
| 5. WH参加者同士の交流ができたこと | 6. 飯田という地域をよりよく理解できたこと |
| 7. 農業についての理解が深まったこと | 8. 気分転換になったこと |
| 9. その他（ ） | 10. 満足できた点は特になかった |

問13 飯田のWHに参加して不満であった点は何ですか（当てはまるもの3つまでに○）

- | | |
|---------------------|------------------------|
| 1. 単調な作業が多かったこと | 2. 作業内容がきつすぎたこと |
| 3. 受入農家と意見が合わなかったこと | 4. 他のWH参加者と意見が合わなかったこと |
| 5. 交通費がかかりすぎたこと | 6. 観光的な楽しみ方ができなかったこと |
| 7. その他（ ） | 8. 不満な点は特になかった |

問14 あなたは飯田のWHに参加してどの程度満足しましたか（それぞれ当てはまる数字1つに○）

	満足	やや満足	どちらとも 言えない	やや不満	不満
〔農作業の満足度〕	1	2	3	4	5
〔農村生活・交流面の満足度〕	1	2	3	4	5
〔総合的な満足度〕	1	2	3	4	5

問15 飯田のWHでは、あなたが提供した労働(苦労)に見合うサービスや満足感を得られたとお考えですか (いずれか1つに○)

1. 提供した労働(苦労)を超えるサービス・満足感が得られた
2. 提供した労働(苦労)にちょうど見合うサービス・満足感が得られた
3. 提供した労働(苦労)の方がサービス・満足感より大きいと感じた
4. 両者を比較して考えたことはなかった(労働を苦労と考えなかった)

問16 飯田という地域への訪問から得られる楽しみは、あなたが負担した交通費に見合うものであったとお考えですか (いずれか1つに○)

1. 交通費の負担よりも、楽しみの方が大きかった
2. 交通費の負担相応の楽しみが得られた
3. 交通費の負担の方が、楽しみより大きかった

問17 下記に掲げる5つのキーワードの面で、飯田という地域はどの程度“独自の魅力”を有していると思いますか (それぞれ当てはまる数字1つに○)

	十分ある	ややある	あまりない	全くない
〔人〕	1	2	3	4
〔自然(環境)〕	1	2	3	4
〔農業〕	1	2	3	4
〔食〕	1	2	3	4
〔文化〕	1	2	3	4

問18 今後の飯田のWHへの参加について

(1)飯田市のWHにもう1度参加したいと思いますか (いずれか1つに○)

1. 強く思う
2. 機会があれば
3. あまり思わない
4. 全く思わない

(2)前項で「3. あまり思わない、4. 全く思わない」と回答された方にお聞きます。参加したいと思わない理由のうち最も大きいのはどれですか (いずれか1つに○)

1. これまでのWHへの参加で十分満足したから
2. 経済的な問題で参加が難しいから
3. 時間的な問題で参加が難しいから
4. WHが嫌になったから
5. その他 ()

問19 全国各地で行われている次の農業・農村に関わる取り組みのうち、あなたがこれまで参加した取り組みおよび今後参加したいと思う取り組みがあれば、当てはまるものすべてに○をしてください

	これまで	今後		これまで	今後
(1)家庭菜園	()	()	(7)援農(農作業ボランティア)－無償－	()	()
(2)市民農園	()	()	(8)援農(農作業ボランティア)－有償－	()	()
(3)他地域のWH	()	()	(9)農作業のアルバイト	()	()
(4)短期の農業研修	()	()	(10)親戚等の農業の手伝い	()	()
(5)長期の農業研修	()	()	(11)その他()	()	()
(6)農業インターンシップ	()	()	(12)何も参加していない(したいと思わない)	()	()

問20 将来的な農村への定住の意向についてお聞きします

(1)あなたは将来的に農村へ定住したいと思いますか (いずれか1つに○)

1. 強く思う 2. 少し思う 3. あまり思わない 4. 全く思わない

(2)前項で「1. 強く思う、2. 少し思う」と回答された方にお聞きします。それは具体的な計画を伴ったものですか (いずれか1つに○)

1. 具体的な計画がある 2. 具体的ではないが常々定住を考えている
3. 希望として考えたことはある 4. 全くの絵空事である

(3)前項に回答された方にお聞きします。農村へ定住する場合の生計手段は次のうちどれを想定していますか (いずれか1つに○)

1. 農業からの収入 2. 他産業(兼業)収入 3. 年金収入
4. 仕送り 5. わからない 6. その他()

問21 飯田市のWHに関して、例えば、受付から参加開始までの事務手続きや農作業、農家への民泊、交流のあり方など、何か要望があればご記入ください (自由記入)

--

問22 農家や市役所の担当者にメッセージがあればご自由にご記入ください

(1)受入農家へのメッセージ (自由記入)

--

(2)市役所の担当者へのメッセージ (自由記入)

--

問23 その他WHのあり方について、都市農村交流全般について、農業・農村への意見など、どのようなことでもご自由にご記入ください (自由記入)

--

ご質問は以上です。ご協力ありがとうございました。

平成17年11月30日 印刷・発行

ライフスタイルプロジェクト研究資料 第5号

わが国における農村型ワーキングホリデーの実態と課題

編集発行 農林水産省 農林水産政策研究所

〒114-0024 東京都北区西ヶ原2丁目2-1

電 話 東 京 (03) 3910-3946

F A X 東 京 (03) 3940-0232

印刷・株式会社 トーシン